ドイツ都市近郊農村史研究

――「都市史と農村史のあいだ」序説――

加藤房雄 著
ドイツ都市近郊農村史研究
——「都市史と農村史のあいだ」 序説——

加藤房雄 著

広島大学経済学部
ドイツ都市近郊農村史研究

序説
緒論
東エルベ農村社会史論覚書
全篇の序論にかえて

いま、ヨーロッパの地における農村社会史研究の近年の盛況を示すために、さまざまに、なんらかの仕方で当該の対象に強い関心を寄せる学術会議の論文集（Tagungsbuch）に紹げ、わたくしの知るかぎりでの主要な成果を列挙すれば、およそ以下のとおりである。ドイツ再統一の成った一九九○年には、ヴェーラー（Hans-Ulrich Weber）編著の『ヨーロッパ貴族一七五〇～一九五〇年』が上梓され、また、ブリクレ（Peter Blücher）が編んだ『中欧における農村共同体と都市共同体・構造比較』の公刊を見たのは、翌一九九一年のことであった。さらに、一九九四年、編者ライフ（Reinhard Rupf）の共同業作『第二帝政・ウィ瑪ール共和政における東エルベ農村社会・農業危機・エンカの利害政策・近代化戦略』が世に問われたかと思いつきや、ただちに、ペーター（Hans-Peter）編の『社会モデルとしてのグーツヘルシャフト』の出版が、その翌年に続き、一方において、西の家族農業（family farm）と東の工場農業（factory farm）の問題性が、ドイツ再統一を基調として現実的に提起された形で、新統一ドイツ農業の三元的構成（anthropotypische nature）の対立を示す他方には、当然に他方には、その歴史的な起源をめぐる問題、すなわち、ドイツを含めてより広く、西欧のグレントヘルシャフトと東欧のグーツヘルシャフトの対抗として理解されて久しい、かの農
業の「多元性」

(Agrarialisch)・東エルベ間立[3] または「東西諸国」といった諸問題の発生を伴いながらも、新たな興隆の観を呈しつつある農村社会史研究のこうした盛況の底流に息づく、軽視しうる一つの重要な契機にほかならない。

では、先述の四つのコロックヴィムないしターコングに象徴される東エルベ史研究の近年とみに目覚ましい意欲的展開の奔流の本流を形作りこそると、そこからさほど乖離してはいないと思えてよい大テーマは、なかた。本論の論述を始めるに先立ち、ここであらかじめ、そうした大々的な問題群に即したさしあたっての暫定的整理を果たすことにより、本書全篇の序論にかかえおきたい。それは、また同時に、将来の全体の総括あるいは複合的評価を目指すこと上での大著を閉じるに当たり、なお顧慮されていない今後の課題として残さざるをえない諸論点において、それらを沿う形を取って構成されている。
彼自ら自覚して述べており、「全体性視角」を重視する方法的見地に立っている。このような視野の広い著想のもとで、グーツヘルシャフトの研究史を涉猟し、一九五〇年代の旧西ドイツの歴史叙述に従往にして見受けられ
た観点の狭隘性を克服しようと試みるカールの視点は、理論と現実史との架橋を志向する「社会経済的考察
様式」と言うべき、すぐれてオーソドックスなものである。図序に掲げた「黒海・バルト海地帯」を示しつつ、
カールはこのグーツヘルシャフトこそが、後期封建制下ヨーロッパ土地制度の脇役ではない、主役的な
地域を占めたと力説する。

最初に、グーツヘルシャフト普及地域の地理的画定を見ておこう。図序に掲げた「黒海・バルト海地帯」を
広大な地域を擁する。この中核地域（Kernland）の西部と南部の境界線は、カールによって、きわめて
明白である。すなわち、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン東部に発した、ゴテラ（Gottland）の東エルベ地方を
除外しながら、エルベ川沿いに南東へ進む。すると、ラウジ

テ（Lausitz）ならびにシュレージェンから、ガリシア（Galizien）・ウクライナを経て、ついには、
黒海に臨む港町とシュレースヴィヒ＝ホルシュタインの「南北移行帯」にまで及ぶ。これに対して、
西部ペリフェリを成す南部ペリフェリは、ハンガリー北部地方に限定され、まるで、ラウジ
テを含むように、ワラキアさらに東部地方のモルダウにまで及ぶ。これに対して、
東部境界の画定は、多分に曖昧なままにとどま

ざるをえない。詳細については、新研究の出現を待つほかないのであるが、さしあたり、
白ロシアとウクライナとの
図序-2 グーツヘルシャフト圏の位置

<table>
<thead>
<tr>
<th>イギリス</th>
<th>オランダ</th>
<th>スカンジナビア半島</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>資本主義農業</td>
<td>自由農民の構造</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>西エルベ</th>
<th>ドイツ西部</th>
<th>スペイン・イタリア</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>グルントヘルシャフト</td>
<td>グーツヘルシャフト</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>東エルベ</th>
<th>東部</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>黒海・バルト海地域</td>
<td>農奴制の普及</td>
</tr>
</tbody>
</table>

南ヨーロッパ
地中海地域

（出典）H. Kaak, Gutsherrschaft, S. 434 f. より作成。
総論 東エルベ農村社会史論覚書

「黒海・バルト海地带」全体の共通性をないがしろにすることなく、その各構成地域の特殊性をも視野に取って行われる地域間比較。（ii）

「ゲーツベルと賦役農民（Grobemännen）の役割」

「ゲーツベル」の役割。（iii）

「ゲーツベル」の役割。（iv）

「ゲーツベル」の役割。（v）

当該地域全体のなかでの地域内的な、そして「ゲーツベル」の側面の問題が

まず第一に、わたたくしにとっての最重要検討課題の一つであるフライディコミスに関するマークの指摘は、この問題が

ある。わたたくし、このことを嬉しく思うが、しかし、まだ一部に、全面否定と全部否定のディヒトミーとでも言うべき浅薄なフライディコミス論が、なお残ることもまた一面の真実である。ここで、さしあたり、ヘス（Karl Heise）の新説に見られる無視しうる問題点の一端に触れおきたい。

ヘスは言う。時代は下って、一九世紀末の話であるが、「東エルベ大土地所有者の少からぬ者は、自分の家族農場（Handguts）に見られた伝統的束縛を放棄し、その農場を使って、荒らしくも逞しく投機を企て暴利をむさぼったかぎりにおいて、時代の最先端に立ちささえた」と述べている。

しかし、筆者引用者、と深く理解され、少しでもかげ離れれた嫌いが、ここにあきらめているべきか否かという「肯定的な経済的意義」を強調してやまなかったウェッパー（Max Weber）の「大世襲財産」（großes Erbrecht）の世界を制度把握をめぐる問題を示すグレットベルの二伝型、すなわち、西エルベの「土着的」農場所有者と東エルベの「投機的」ゲーツベルとの対
論文は、特に東欧の農業制度を分析したグンストの研究は、彼自身の主観的意図は別にして、客観的には、ウォルン・スタインのこの不備を、東欧の研究者自ら克服しようとする努力の現れの一つであったと評価されてよいように思われる。

さて、グンストは、西ヨーロッパとのあいだに結んだ通商関係の点から見て，全東欧を，両ゾーンに分岐したbifurcated「非等質の二地域」として理解すべきであるとする。その論旨の大筋は，以下のようにある。非西洋社会に立つ古代ギリシアの原則が，勝利を収めた点に，西ヨーロッパ全体の独自性が，求められなければならぬ。非西洋社会の三面制に特徴的な共同体の個々側面が，決定的に重要であった。こうして，意欲的生産が，強化され，東欧は，どうである。ここでは，資源，共同体の原則をかわりに，個体の原則を重視するという意味で，これは当然である。こうして，生産の強化は，一概にさかのぼったばかりではなく，一九五〇年代以降の社会的な変化を説明する場合，さえ決してまれではないのである。
このような社会経済的停滞状況にあった東欧世界、一〇世紀以降、「両ゾーンにおける分岐」という地政学的な観点をもとにした東部と西部の分野が形成される。そのうち、東部の経済的発展においては、農業の重要性が示された。農業の発展は、新たな生産手段の導入、土地の利用効率の向上、技術の進歩などにより、農業生産力の向上が図られた。これにより、農業の増加が見られた。農業の増加により、農業の経済的収益が増加し、農業労働者の生活水準が向上した。農業の経済的収益の増加により、農業の労働者の生活水準が向上した。農業の経済的収益の増加により、農業の労働者の生活水準が向上した。
レムベルク近辺に見られたような村落定住地（Settlement）のネットワークは、ほとんど形作られなかったのである。グンストは、ドイツ人的入植地における社会構造変革的な彼らの影響力の大きさを、あおフレンケル・ブルク川ラインの西側、すなわち、ポーランド・ハンガリー・ボヘミアを中心とした広域圏における都市やもとにある村落の住民が、土着の先住民と比較的容易に融和し、化したのでに対して、都市では、こうした事態はなかなか生じにくかったと目されるのである。

いわゆる「東オーストリア化」の前提となる土台を構えたものだが、ドイツ人のこの植民活動だったとすれば、西ヨーロッパの商品需要、とりわけ、一五世紀後半に発するオランダ諸都市の穀倉需要を中心とした近代世界市場の規定的力が、それを決定的に進めした要因だった。研究動向の整理を主眼とする小論においては、この大変動の具体的なプロセスの詳細に関する経済史的説明をひとまず検証し、一九世紀に至り、ついに構造的・類型的定義と言いうべき事態を迎ええた巨大ゾーン成立の前提のみを論じるところとなり、それをさらに延長・拡大した一線として示される「バート・ハインツの頂点」における東ヨーロッパの関係都市であるヨーロッパの諸都市が含まれる。グンストの呼ぶ歴史的・バーチェン・リッツァー・カルパチア山脈ラインの東西に、基本的には二分される。その西側には、フラインド・アウトリア・ナウア・グルメクロマーを基にして、東欧の「非等質の二地域」の特性を構成しうると見えるように思われている。しかし、グンストの呼ぶ歴史的・バーチェン・リッツァー・カルパチア山脈ラインの東西に、基本的には二分される。
2 ハルニッシュの東エルベ地域論

ハルニッシュは、東エルベ地域論を引用しながら、レーゼナーは言う。すなわち、「中欧東部（Ostmitteldeutsch）においては、農民の自治は、経済的諸変化、とりわけゲーツヘルシャフトの拡大によって、西ヨーロッパの、いや、と言えようのもむしろ、もっと端々しく、われわれの固有の対象であるの「黑海」、「バルト海地域」内の地域間比較を果たすにあたり、少なくならず参考にされてよい一つの準備的な視角を、グースの「東欧二ゾーン分岐論」が提案しているとし、あたって評価するにとどめて、先に進むことにしよう。
このままだっただと、ハルニッシュは、ブランデンブルクの農村共同体の内部構造に深く沈潜して、村農地方自治の全部の欠落あるいは「ゲーパルシュ」の単なる農民団体」という支配的観念のものとし、永く置かれてきた通説的な東エルベ理解に疑問を呈しつつ、地域視的な見地から見ても、すぐれて示唆的な議論を展開する。さて、カーカが注目したシュルツェと、プロイセン一般ランクト法典によって、グーテルシュファントが任命されるゲーメインデ長であった。中世盛期の東方農民において作り出された東エルベの農業的入植地は、その多くのもの、村農共同体（Schlutzenvereine）として組織されていた。すなわち、彼は、一方において、支配命の支配側の利益を共同体のなかで代理・貫徹したとすれば、他方では、地主の支配を近隣のゲーメインデにあらがって、彼の共同体の利益を実にあって日常的な衝突を繰り返した支配と相交の「中和化」を実現しようという重要な立場にあたったと言える。それゆえ、東エルベの「ゲーメインデ」の諸条件のもとで、いわゆる「反応的（Reaktions）共同体集合」を構成するリアレーテ（Rialetze）共存地のダンフルデ（Dunfelde）の共存、アルニム（Armim）、村のボイツェンブレーゲ（Boizenburger），共同体集合が維持され続けた点に、疑念の余地はなくもない。一つの例証として、アルニムの言う「提訴する」（Glättet）共同体集合の所領が存在するダンフルデの共同体集合を取得したであろうことは、想像に難くない。ハルニッシュによれば、そうした訴訟の際にゲーメインデとそのシュルツェが一結束して事に当たった実例も、決してたまらなかったのである。
このように、一六世紀から一八世紀を通じて、東エルベの相当な広域圏に、権利能力を持つ「農民共同体」が存在したことは、否認されるべくもない厳然たる事実である。むしろ、問題は、地域・地域間の比較で見た東エルベの特殊性の把握にあろう。ハルニッシュの指す立った観点は、「ザレーリー・エルベ川ライン」のState, The Lineの東、西どちら側に位置するのかという基本的見地として、東エルベ圏内の地域的相違にも同等の比重を置く、すくして、地域的かつ構造的な座標軸である。まず第一に指摘されているべき点は、「西ヨーロッパの村落」との違いを、共同体財産(Gemeindevermogen od. Gemeindegut)の有無に求めて、ハルニッシュは、次のようにして論を進める。共同体の財産である農業・牧場・ビール醸造所・パン製造所・乾燥庫・浴場等の各種営業部門によって成り立ち、村の財産が存在した。共同体には、これら財産からの規則的な収入がとられて、それはまた、共同体所有の財産の管理にたって成り立つことが、重要な意味を持った。つまり、とりわけ村長職に就いても、その任に堪えなければならない共同体の各成員には、「共同体生活の展開に対する積極的関与の意識」が芽生え、「連帯責任感」もまたおのおの成熟して行ったからである。これの共同体生活の慣例として執り行われた共同体結会の役(Reederei)が、村民と一体の共同体との一体感を強める上で大いにかかって力あるものだったのである。だが、共同体自身の会計組織を欠く東エルベの「村長共同体」では、自分の共同体の案件になんらかの仕方で直接関与しているという住民意識が発展することは、望むべくもなかった。それでも、共同体自前の財政組織の欠如こそが、東エルベ地域の農村共同体における住民自治の発展を、西部に比べて立ち遅れの目立つ低い水準に押しとどめ続けた。
真因の一つに何かならない。村民は、グループヘルによっての「御しやすい居委員」的に甘んじ、共同体は、地主支配に服する「従属的村落」を化した。共同体固有的力量と機能は、グループヘルシャフトの条件下にある。村民からの献金（Gemeinde）の根本的な相違というか一例にあたる。\(^{61}\) が生じて、共同体は資金調達の要に迫られたと想定しよう。この場合、村民からの献金（Gemeinde）を募る方針のほうが残されるであろう。しかし、こうした窮余の一策でも、永代小作権を保証された村落においてのゆっくりは残り残りで、逆に、いわゆる「従属的共同体」が運営されている。さらに、一歩を進めて、彼は、定住史と地域史の成果に目配りをきかせながら、次のような論述を展開する。

いったい、定款策定権は必要か、共同体裁判権さえ許されなかった東エルペの「村落共同体」は、「現地攻略」に見えるわけは行かないのである。ブリクレの言う「共同体主義」（Kommunalismus）のそうした特性を、「村長共同体」に見るようにすれば、ゲミュンデ自治（Gemeindeautonomie）がכותシュタイン東部のグループヘルシャフト地域のないとして確立したような、農村共同体の属性を完全に失ってしまった村落にすぎぬものだったのであろうか、否か。

Kromeのがホルシュタイン東部のグループヘルシャフト地域に即して確認したような、グループヘルシャフトの圧倒的優位のiomとに置かれたにせよ、「反応的共同体集団」ないしは「提訴する共同体集団」ではない。
第1に、それは、三面制の経験に必要な共同作業「決定事項を主内容とする三面制」を保持した農民団体だった点で、「農業経済的レールガマイエンデ」であり続けた。第2に、単なる農業的用益団体としての働きだけでなく、警察の権限の行使を通じて、村落の治安維持機能を担ったという意味において、それは、封建的支配体制の不可欠の支柱であった役割を果たしていたのである。したがって、東エルペの村落共同体は、封建制下の農村における地方自治の発展段階の、少なくとも「最下端」に位置していたと結論づけられるよう。

エルペ川中・下流域の広大な東部ドイツにおいて、郷村小作権にすなわち権利形態のもとに農民層を置き行く地域としての様態が、ここから、ハルニッシュ下の通説批判の最終的結論は、こうである。「オーランの穀物需要」に属する西エルペのアールマルク（Altmark）における農民保有権の支配的ない地域において、十二世紀以前には相当数見いだされたのである。そして、地域の穀類販売がもたらし、農民保有権の支配的な存在という点において求められてくるべきである、その逆ではいささかもない。つまり、グーツヘルシャフトが、優良な農民の永代小作権を、劣悪な郷村小作権に機能替えし、そのわけでは決してないのである。グーツヘルシャフトとラッシェーテン農民とのゲーティッシュな因果連鎖を一言にし
て言えば、前者が後者の生み出したのでは毫もなく、逆に、ラッシーンゲン農民層の前身、換言すれば、所有権としての実質を備えぬ脆弱な保有権しか許されなかった農民階層が、ゲーテヘルシュャフトの生成をもたらす規定の一要因としての歴史的役割を担ったのである。このような新しい理解は、ゲーテヘルシュャフト形成史を、プロイセン史、ひいては東エルベの「黒海・バルト海地帯」史のなかに位置づけ直す今後の歴史研究を導く一つのガイドラインとなったものである。本书の前篇、ドイツ大地所有の歴史的役割の主要課題の一つは、この関連をめぐる試論的検討のきしこた一契機を作った。なぜなら、ハルニッシュのこの結論部分は「特殊東エルペの発展」、特に「農業所有制」の歴史的功罪のうちの一個の側面に光を当てた農業・土地制度史研究の作業にとって有益かつ有効であろうからである。本书の前篇、ドイツ大地所有の歴史的役割の主要課題の一つは、この関連をめぐる試論的検討のきしこた一契機を作った。なぜなら、ハルニッシュのこの結論部分は「特殊東エルペの発展」、特に「農業所有制」の歴史的功罪のうちの一個の側面に光を当てた農業・土地制度史研究の作業にとって有益かつ有効であろうからである。
選論 東エルペ農村社会史論覚書

緒論

三 ヴンダーの農村共同体論

ペーターズ編（九五五年刊）の「社会モデルとしてのゲーテヘルシャフト」に収められたツー ヴンダーによる「農村社会の比較的分析のための一観念」は、農村共同体の内部構成の問題に積極的に触れる。きわめて意欲的な議論を展開している。この論考においてツー ヴンダーが取り組んだ課題は、自明の理とされてきた学間的解決法を豊かに含むと評価されていた。次に、ツー ヴンダー（Heide Wunder）の近作の概要を見てみよう。

うち、彼は「南ドイツ的自由主義的バーススペクティブを堅持しつつ、ある『南ドイツ的自由主義的バーススペクティブ』を堅持しつつ、その地

内特性をも忘れずに認識し、併せて、東エルペの地域形象を構築して行く基礎研究を進める上で、グエストとハルニッシュの研究は、ともに、大いに参考になる深い意味と示唆を豊かに含むと評価されてよいであろう。次に、
式化したばかりではなく、同時に、地主への農村労働者の従属関係をめぐる一九世紀についての彼の知見を基礎にし、一八世紀以前のグーツヘルト農民関係を、一八世紀末に活躍したジャン＝バティストモーザー（Johann Jacob Mooser）の言説を積極的に援用することにより批判しながら、論を進めると。神聖ローマ帝国の臣民が置かれている状況の地域的相違に関するモーザーの評論を見ると、それは、帝国中央部の自由農民の自由と東部沿岸地方における農民の不自由との対照だけに限定されていたわけでは必ずしもある。彼は、南部と西部と北部と東部の違いを強調する。とこれのバランス感覚こそが、モーザーその人のものだった。最終的に確認されているべきは、この点であるが、モーザーによる「東西軸」の認識の有り様について一考したのである。彼は、フランケン（Francken）・シュヴァルツェンバーグ（Schwarzenberg）・ライン川沿岸・ザクセン等の自由農民と銃を観るのに対し、農業構造の二元性を無視しない伝統的視点が認められる。しかし、今日では、中世以降のドイツ人植民によって施設され、西部と中部と東部の違いを強調する。とこれのバランス感覚こそが、モーザーその人のものだった。最終的に確認されているべきは、この点であるが、モーザーによる「東西軸」の認識の有り様について一考したのである。彼は、フランケン（Francken）・シュヴァルツェンバーグ（Schwarzenberg）・ライン川沿岸・ザクセン等の自由農民と銃を観るのに対し、農業構造の二元性を無視しない伝統的視点が認められる。しかし、今日では、中世以降のドイツ人植民によって施設され、西部と中部と東部の違いを強調する。とこれのバランス感覚こそが、モーザーその人のものだった。最終的に確認されているべきは、この点であるが、モーザーによる「東西軸」の認識の有り様について一考したのである。彼は、フランケン（Francken）・シュヴァルツェンバーグ（Schwarzenberg）・ライン川沿岸・ザクセン等の自由農民と銃を観るのに対し、農業構造の二元性を無視しない伝統的視点が認められる。しかし、今日では、中世以降のドイツ人植民によって施設され、西部と中部と東部の違いを強調する。とこれのバランス感覚こそが、モーザーその人のものだった。最終的に確認されているべきは、この点であるが、モーザーによる「東西軸」の認識の有り様について一考したのである。彼は、フランケン（Francken）・シュヴァルツェンバーグ（Schwarzenberg）・ライン川沿岸・ザクセン等の自由農民と銃を観るのに対し、農業構造の二元性を無視しない伝統的視点が認められる。
臣民の未成年性の問題もまた、東エルペにおける中世以降の農奴制にその根拠として位置づけられる。したがって、ムーア（Barrington Moore Jr.）やプレンナー（Robert Bremer）の基礎的 Apocalypse においても、色鮮やかに受け継がれてきた「再封建化」に対する農民の抵抗の強さを判断基準としながら、東エルペにおいてムーアに対して、ウンダールが重視するモーダーラは、むしろ、対極的な位置にあった。すなわち、彼は、東エルペの被押圧農民を、ムーアとは正反対に、すくれて反逆的な存在として捉えるシェフセットの研究を批判的に回顧して、ドーリーシャフト史の精査がさほど進捗しなかった戦後の研究史を批判的に回顧して、真剣な吟味を迫る好論と言えよう。}

考察の対象を絞り込むこととする。第一は、支配（Herrschaft）概念の狭隘性の問題である。従来にあっては、主として、農村共同体把握のための基本的な観点に重要となる。その点では、地主・農民関係を最も例外ではなく、それは、交流と相互作用を伴う断片的な日常的過程
のなかにのみ存立した。このことの豊かな含蓄を理解するには、ギルケ（Otto von Gierke）による古典的なゲノンセシシャフト論を想起するに如くはない。すなわち、ギルケは、これを、都市ギマインまたは農民ギマインデにおける同等者（Gemeinschaft）間だけに存在した関係と見る見地を取らない。そこでではなくて、『主人と下僕』といえども、身分差の不平等はそのままに、個人的に、また、社会的（Gemeinschaft）関係においても、『主人と下僕』の間柄（Gesellschaft）をたどった。いや、それどころではなく、むしろ、こうした仲間関係こそが、実は、『主人と下僕』の間柄の、それが、階級社会での支配と連带の両極の対立関係（Polarität von Herrschaft und Genossenschaft）における関係である。そこで、支配と連帯の両極の対立関係は、それが、大いなる重荷を負るようにも見える。それ自体の存立と継続にとっての前提条件を形作っていたのである。もし、そうだとすれば、このギルケ的見解は、一般的理解に対して、なんらかの重大な修正を迫るものでもある。しかも、支配の分野（Gesellschaft）のステラ版的な固定的図式化は、好ましくない。逆に、『社会的実践』としての支配（Gesellschaft）は、内容豊かに精緻化して行く作業こそが、いま求められている肝要な追察なのである。この点を関わって、ここで、『主人と下僕』の間柄（Gesellschaft）における主従関係の研究に、ようやく深く視点を、ウンダーハベストが提示したことの重みを味みしめながら、ベル（シャフト）とグレーテル（シュァフト）の弁証法を、いつそう内容豊かに精緻化して行く作業こそが、いま求められている肝要な追察なのである。この点を関わって、ここで、『主人と下僕』の間柄（Gesellschaft）における主従関係の研究に、ようやく深く視点を、ウンダーハベストが提示したことの重みを味みしめながら、ベル（シャフト）とグレーテル（シュァフト）の弁証法を、いつそう内容豊かに精緻化して行く作業こそが、いま求められている肝要な追察なのである。
属関係の比較という課題は、各農村社会の個性的特徴を描き出す際に、決して軽んじられないべきではない。下層民と

「社会的相互作用」に即して拡充される手法を経て、行う行うは、「社会的機能様式」論をそのまま昇華されなければならない。ここでは、ヴンダーバは、私的諸個人の社会的な繋がりを含意する「ゲゼルクント」もまた、そうなのかであった。婚姻・所帯・親戚・代父母・結婚・親人関係・証証依頼人関係・世代別

グループ・男女別団・同好会・等の「ゲゼルクント」、「私的社会圏」の諸形態、制度的な性格を帯びつつ、様々な組織への所属によって繊り成されていたのは、分・階層だけにとどまるのでではなく、公私の違つ見なしに、個人の自然な新たな光を当てて、近代以前の社会を分析する必要性は、しおく当然のことと言うべきであろう。垂直的または水平的な結合関係を、婚姻と所帯について言うと、こうである。すなわち、

青年会（Klubentrechte）と婦人裁判（Frauentheorie）とは、それぞれ、結婚相手の紹介等の世話や、また、既婚者と

うしのつきあい、もめごとに変わる諸事情の出来事をめぐって、人間関係を規制する重要な役割を果たしていた。監督を受けていたのではなく、ゲマインデ内の制度化された諸集団による管理・統制人にも置かれていた実事が判明する。それゆえ、「私的社会圏」を営むこうした地域のグループの諸形態が、ゲマインデにおける男女のまっとう

総論 東エルペ農村社会史論覚書

eighteenth to the early nineteenth century. London/New York 1991, p. 46. (Ed.)

Richard J. Evans (eds), The German Bourgeoisie: Essays on the social history of the German middle class from the late Augustin. Arriving in the upper class, the wealthy business elite of Württemberg Germany, in David Blackmon and Dolores L. H. Wunder, Das Selbstverständliche Denken, S. 132.

Ebd., S. 47.

Ebd., S. 46 u. 49.

Dieu, das Selbstverständliche Denken, S. 38.
前篇
ドイツ大土地所有の歴史的役割
研究史・実証・問題提起
問題

「土地所有と近代社会の相関」という古典的ながら、いまなお、その重要性をいささかも減じてはいない社会経済史研究上の基本的なテーマを、近代ドイツ史に即して検討しようとすれば、ドイツ大土地所有の実体を成すユンカーレ実証分析を経て逐次系統的に検討した結果、所領の実証的考察は、おのずから不可欠である。研究史批判と、戦後歴史学のア・プリオリな想定とは逆に、ドイツ近代化促進の固有の効用とドイツ資本主義の近代的展開の安定的基盤を、世襲財産を含むドイツ大土地所有の歴史的役割として見取ること、これである。
ヘス (Klaus Hess) の手に成った一九〇年刊の『帝政におけるユンカールアムト的大土地所有者』は、

その副題「一九七〇年・九四年のプロイセンにおける農業大経営、大土地所有、そして家族世襲財産」から

土地所有の特殊形態」が、それである。ここでは、対象をこの世襲財産問題に絞った上で、しかも、当該書物のメソド学、ならびに、わたとし自身のフィディイコミス問題を、検討テーマの一に据えている。同書の「D・家族世襲財産――農林業大

小限必要な範囲内に議論を限定して、分析のメソドを入れておきたい。

最初にヘスは、次の点を強調する。彼の書物では、「世襲財産制」の追求に、長大なページ数が割られているが、それは、次のような理由による。すなわち、こうした『世襲財産制の包括的かつ経歴的な論述が必要となるのは、要するに、この種の研究が今日に至るまで皆無だったからである。第二帝政期のプロイセンにあっては、大土地所有の相当的な部分が、世襲財産の法形態取る固定的な

1
状態下にあった。フィディオミネは、その政治的意義や社会政策・経済政策上の評価の点で、これを認めるか否かをめぐり、「保守主義対自由主義の世界観の対立」と見られる問題なのであるから、その研究が重要視されなければならないのは、けれどもその当然と言えるべきであろう。「世界観の対立」まで含む課題の複雑さを示したのでこのフィディオミネを対象として、ここにようやく始められた本格的研究の主要な成果は、さしあたり、以下のとおりである。

1
評
価

「近代的」世襲財産への発展経路

古ドイツ法の知るところではなかった単独相続（Vaterstamme）は、世襲財産制の固有の一原則を成すが、それでは、中世法に徐徐に導入されて行ったものだった。家の権勢が農場分割によって衰微した結果、土地所有は家業（Familienbetrieb）にほかならず、また、男系相続を行うべきであるという観念が呼び覚まされたからである。このようにして、一四世紀以降、立法自由権（Gesetzegebung）を握る上級貴族が、ハンデスヘルトし、分割を行うようとすれば、いえいえ共同相続（Gemeinschaft）に向かわざるをえないかった。彼らは、「近代的」世襲財産成立の第一の可能性である。これに対して、下級貴族の場合はどうであったか。彼らは、上述の方法を採ることができないかったので、財産の分割を求めるようとすれば、いかにして共同相続（Gemeinschaft）に向かわざるをえないか。これは、兄弟として兄弟の末を過ごすの、共同相続を放棄して財産の分割に甘んじるのか、それとも、単独相続を選んで、共同相続財産を家族世襲財産に転化させるのか。この二つ択一が迫まれる。後者の場合に、「近代的」世襲財産の形成に至る「番目のパスベテリュが開く。
近代の世襲財産への展開は、以上のような比較新しい二つの筋道に沿って遂げられた。ヴィデイコミスは、一六世紀の初頭以降、ドイツの地方特別法（{Artikelrecht}）を根拠とし、世襲財産の形成に寄与したことが確認されている。これについては、その後にも、スペインからドイツに持ち込まれる創造的な努力がなされた。当時までが問題-topicとはならなかったユスティニアヌス（Justinianus）の「旧法典」（Novellae）の解釈に帰せられる。このようにして、一九世紀末に至るまでドイツにあっては、当該の「粗削りの統一化法学」の悪影響が尾を引いた。ドイツの世襲財産の成立に及ぼすスペイン法の影響は最大限に重視される傾向にあった。
第一章 研究史整理

世家財産に関する全国規模での統一法は、神聖ローマ帝国（九六二一八〇六年）にも、ドイツ連邦（一八五六年）とドイツ帝国（一八七一年八〇八年）との時代のいずれにおいても存在しなかった。その規制は、各領邦の法律による。世家財産の廃棄と禁止を謳うが、早くもその二年後には、貴族の圧力によって、当該の規定は取り払われる。一九〇〇年の『プロイセン塩税及び代税法』、同様、世襲財産を廃棄と禁止を謳うが、既存の法律によっては不可と定められたにもしても、世襲財産の廃棄を新たに制定し、実施が各領邦に完全に委ねられなかったのである。

一九〇〇年八月一日の『マイマー共和国憲法』第一条第五条第二項は、全国津津浦浦にわたる世襲財産の解消を規定する。その施行は、各領邦に任されるものの、プロイセンにあっては、『家産条例』Verordnung über die Familiengüter、一九〇三年三月一日、ライヒ・レベルでの廃棄命令に先んじて発布された。だが、同邦における
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

世襲財産の破壊は、遅れとして進まず、一九四四年時点に存続した全世襲財産の半分弱が、一九三二年一月までに廃棄された。それらのすべてが、自己財産に転化したわけでは必ずしもなく、世襲財産の譲渡制限から脱しはしたが、保護林に、又は、森林財産に再特権形態化を遂げたものも少なからず見られたことである。さらに、別の問題は、世襲財産の極めて僅かではあるが、土地としての面積を、一九三〇年代の中葉期を迎えても、世襲財産の解体はなお終了しなかった。事態の打開のために、ドイツ全国法が用意される。一九五〇年六月二六日の世襲財産解体規格化法と、一九三九年七月六日の世襲財産解体規格化法と、それである。後者は、全世襲財産を一九三九年一月一日までに減消させるべきと、帝大を指定した。それにもかかわらず、世襲財産廃棄をめぐる議論、法律問題の最終的な決着は、多くの場合、当面の時期までずれこみ、長期化したことも決してたまらなかった。問に最終的な解決は、旧東独地域について、一九四五年に敢行された大土地所有の全部的取用を、そして旧西ドイツ地域に関して、一九四七年の「管理委員会」の設立、及び同様のものとして、あるいは、家族施設（Familienverwaltung）のもとで、自由な流通から排除されている。これに加えて、昨今ではまた、財産を家族基金（Familiengüterverwaltung）におい

（Ⅲ） 現代的問題との連携

財産もしくは、企業を未分割のまま、長時期に残そうとする。資本力あるブルジョア（Bourgeoisie）の利害関心は、たとえ形態は「フィデイコミス」とは違うにせよ、今日でもなお、充分期待されている。以前の世襲財産の一部は、保護林お

的手

性も存する。だが一九四九年以前の時代と異なって、今日の譲渡制限財産の所有者は、法律によって、定期的な
課税と、相続法上当人が持つ自由裁量権の一時的（ex ante）制限に服せしめられてはいる。（

このように、フィデイコミス問題は、現状の問題としても少なくらず関係する。形態上の違いはあるにせよ、保護林あ
るな家庭基金等の存在と世襲財産との関係している実事に関するヘスの指摘は、貴重であり、このテーマの実証分
析は、フィデイコミス史研究の現代の意義を追究するうえで、欠くべからざる一重要課題を成す、と言っても過言で
はないであろう。

2 批判

次に、ヘスのフィデイコミス論の批判的検討に進もう。わたたくしは、当該著書D・のIII・プロイセンにおける土
地所有世界財産（Grundstücke und Kommune）の社会経済的意義、一八六七・一九一四年』、ならびに、同D・の
産設立事例における世界財産政策の諸相、一八九五・一九一八年』に即して、ヘスの世界財産論の無視しえぬ難点を、わ
たし自身のフィデイコミス理解との対照上、その相違を明らかにするに最小限必要な範囲内で確認しておきたいと
思う。

全面肯定と全部否定のディヒヨトミー

プロイセン世界財産問題に立ち向かうためには、一九〇四年に発表されたマックス・ウェーパーの世襲財産論に折り触れ
てはならない。しかし、問題は、彼の解釈の仕方に自体にある、「特微的なことだが、国民経済学者と歴史家は、お
むね一致して、世界財産に対する多かれ少なかれきっぱりとした拒否の立場を取った人々に属していた。決定的
な反対者は、ブラントナー（Lejo Brentano）、コンラート（Johannes Conrad）、そして、ウェーパーである。これに
43
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

これにより、世襲財産の擁護者として、おもに、法律家の世襲財産の利害関係当事者たる間立った存在であった。

一般のウェーバー論を批判したときに、われわれ明らかにしたところ、ウェーバーの世襲財産論の新しい一見点を、ある種の世襲財産に対する全面批判の見地にとってのものである。世襲財産（所有者）が実質的に把握を行っていたわけでは決して、また、ドイツ世襲財産制全体に対する全面批判において詳述したのでで、絶対論を言うこともよい。世襲財産反対『自由主義』の《ディヒ・トミー》の内箱に、高評価にこそある。この論点について、すでに前著において詳述したのである。

第二の問題は、経済学の理論視角と比較史的比較の表象をベッセーの両者のテクニック的な議論を自在に展開するウェーバーを、とても、問題性を論じる学問対象にほかならないかったのである。

ヘッセは、『農業経営における世襲財産所有者』の問題を、たわめて面倒かつ一方的な私見にすぎぬ、と論じられても致し方ないであろう。ウェーバーの世襲財産論が開示する世界とは、たわめて面倒かつ一方的な私見にすぎない、難解さを、もって学問対象にほかならないかったのである。

理論と歴史との立体的観点の蛻薄さに、かつて加えて、一筋縄で行かぬアムビヴァレントな議論を自在に展開するウェーバーを、とても、問題性を論じる学問対象にほかならないかったのである。

例えば、統計表の整理を主な基礎にしながら、代理人経営（Administration）を含む借地制の相当な展開が世襲財産農場に見られた事実を対置する。さらに、世襲財産における自己経営の進展程度は、次の二つの事情に拡

44
第一章 研究史整理

ここまでの議論について、異論はまだ残る。まず最初に、ヘスは、ある註記において、「ウエストファーレン州の事例を引きついて、数々の地域の世襲地の絶え間ない買い足し」として、ドイツ西部における大土地所有の零細地への分割を証明する例と言った。このしきりというお話のしきりがあったことで、大土地所有の零細地への分割を説明する例と言ったのであるが、これでは、話のしきりが合わない。そこで、ヘスの評価を考慮した場合に、五〇〇ヘクタール以下の土地面積を上限とするいわゆる「小世襲地」が急激に増加した。これにより、世襲地の絶え間ない買い足しが現れた。さらに、小世襲地の有効性、すなわち、二世代目の経営への寄与が増大した。新たな零細地の形成がはげしくなったのである。たとえば数々ヘクタールにすぎず、「小世襲地」が、その所有者に内在する零細地の絶え間ない買い足しの経済的効用としての「領域的」や「地域的」としての意味がある。
零細地等への大土地所有の分割の事実を正しく摘出ししながらも、惜しむらくは、これと、ブロイゼン世襲財産制の重大な側面を成す「零細地の追放による大土地所有」「小世襲財産の拡大」とを取り違えている。「小世襲財産」と「大世襲財産」の対照的な相違に関するヴィヴィットな認識の欠如が、こうした誤解の原因だったのではあらんか。

上述の問題点は、また、次の事柄に関わる。ヘスは、「農業経営における世襲財産所有者の地位」を論じて、プロイセン世襲財産制イセンでは、「自分の農業経営に従事するグループの類型」の優勢は見られず、「世襲財産の所有形態と大経営の存否との必然的結びつき」もなさない。いや、そればかりではなくな、極論するならばでも、世襲財産の所有者リスクの分裂に見たウェーバーの「テーゼは正しい」と結論づけるのであるが、この議論には説得力がないと言うべきではない。

なぜなら、第一に、ウェーバーその人は、自己経営の優勢な展開、ならびに、所有と経営の合体、両狭義を、あらためて、「企業リスクの分離」に見たウェーバーの「テーゼは正しい」ことを結論づけるのである。それならば、四、〇〇〇〇、五〇〇〇ヘクタールの線を越え、ときには数万ヘクタールの巨大規模に達することさえまれてはなかった「大世襲財産」の特徴的機能だったのである。第二に、イギリス史との比較史的比較を踏まえたウェーバーの瑞前見の表象を、ヘスは理解していない。ウェーバーが呼ぶグランドで発展を遂げた、地主と進地農業者による「共同のビジネス」joint businessとウェーバーが呼ぶ
このイギリス的な事態は、自分が生きた現実のドイツにあっては、全く生み出されていなかったのか。逆に、もしあっ
たとすれば、いったいそれはなにか。イギリスの史実を比較歴的に横目で睨みながら、モルツ初頭期のドイツの
実情を精査しようとする、歴史的であると同時に実践感覚に導くこの問題意識、これこそが、ウエルバー=世襲財
成に、大土地所有制の合理的改編に基づくドイツ帝国主義の合理的建設を実現するための本質的要因としての夢
を託そうとしたのであった。

このように、一方において、「資本主義の大規模経営の面積縮小へと導く経営技術的諸契機と大土地所有の規模拡大に
向かう私経済的促進力」との対立・矛盾のかなに指摘に端的に示されるという、ウエルバーの『世襲財産論』には、
マルクス経済学のある種の共通性・親近性さえ感じさせるような、『合理的経営と土地所有の矛盾』あるいは『資
本蓄積過程の障害としての土地所有』に関する経済理論的認識の視座が認められるとすれば、同時に他方では、言え
ば大規模史学的の形成するならば、それは私は思わせるほど、イギリスとドイツとの比較歴史的比較の表象、
の視角を否定すべきもなく同居していたのである。ウェルバーのこの立体的な三重側面に関する理解が、残念ながら、

ヘスは、Goetheとvon Potockiとの間ポーランド人伯爵の世襲財産設立申請に関する、ポーランド州長官

ページ 47
ヴィラモーヴィツ (Hugo Theodor Wichard von Wilamowitz-Moellendorf) のプロイセン法務大臣宛て報告書（1949-53年）に見られる、プロイセンの世襲財産政策の決定的弱点は、その限界であると考えられる。ヴィラモーヴィツは、三万マルク以上の世襲財産を必要とし、プロイセン法務大臣の認可が必要である。これにより、世襲財産の任意数の新設は、設立申請者の意思を完全に委ねられている。逆に言うと、現行法規定のこの限界さえ抑えなければ、世襲財産の任意数の新設は、設立申請者の意思を完全に委ねられている。逆に言うと、現行法規定のこの限界さえ抑えなければ、世襲財産の任意数の新設は、設立申請者の意思を完全に委ねられている。逆に言うと、現行法規定のこの限界さえ抑えなければ、世襲財産の任意数の新設は、設立申請者の意思を完全に委ねられている。逆に言うと、現行法規定のこの限界さえ抑えなければ、世襲財産の任意数の新設は、設立申請者の意思を完全に委ねられている。逆に言うと、現行法規定のこの限界さえ抑えなければ、世襲財産の任意数の新設は、設立申請者の意思を完全に委ねられている。逆に言うと、現行法規定のこの限界さえ抑えなければ、世襲財産の任意数の新設は、設立申請者の意思を完全に委ねられている。逆に言うと、現行法規定のこの限界さえ抑えなければ、世襲財産の任意数の新設は、設立申請者の意思を完全に委ねられている。逆に言うと、現行法規定のこの限界さえ抑えなければ、世襲財産の任意数の新設は、設立申請者の意思を完全に委ねされている。
第一章 研究史整理

であろう。ウィンモーヴィッツは、このように、ポーランド人世襲財産の設立を正当化しようとする政治的理由を列挙したの

である。ポーランド人世襲財産を正当化しようとする理由の一つは、ポーランド人世襲財産の存在が、ポーランド州におけるドイツ人土地所有強化の国策に全面的に背反するというである。ポーランド人世襲財産の設立を正当化しようとする理由の一つは、ポーランド人世襲財産の存在が、ポーランド州におけるドイツ人土地所有強化の国策に全面的に背反するというである。

しかし、このような理由は、ポーランド人世襲財産の設立を正当化しようとする理由の一つは、ポーランド人世襲財産の存在が、ポーランド州におけるドイツ人土地所有強化の国策に全面的に背反するというである。

そのため、ポーランド人世襲財産の設立を正当化しようとする理由の一つは、ポーランド人世襲財産の存在が、ポーランド州におけるドイツ人土地所有強化の国策に全面的に背反するというである。

そのため、ポーランド人世襲財産の設立を正当化しようとする理由の一つは、ポーランド人世襲財産の存在が、ポーランド州におけるドイツ人土地所有強化の国策に全面的に背反するというである。

そのため、ポーランド人世襲財産の設立を正当化しようとする理由の一つは、ポーランド人世襲財産の存在が、ポーランド州におけるドイツ人土地所有強化の国策に全面的に背反するというである。

そのため、ポーランド人世襲財産の設立を正当化しようとする理由の一つは、ポーランド人世襲財産の存在が、ポーランド州におけるドイツ人土地所有強化の国策に全面的に背反するというである。
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

まだ残る。ここでは、さしあたり、以下の諸点の指摘にとどめておきたい。第一に、いったい、世紀中換後のプロイセンの対ポーランド人世襲財産政策は、その新設を未然に防ぐことだけに向けられていたのでは決してない。われわれの処はすでに経済的または社会的根拠を有している。それによっては、ポーランドの歴史的役割を果たすことは不可能である。このことは、ポーランド人世襲財産の強権化解体と、ドイツ人所有地へのその一方の転化化というきわめて圧制的な措置が、執行されなかったのである。これは、コフスキ家の所有の、ハッタールを突破する広大な世襲財産がプロイセン政府によって消減させられた一九二三年の史実が、忘れられてはならない。

植民法25に始まり、一九〇八年のポーランド問題における収用法26の成立とともにピックを迎え、一九〇六年のプロイセン民法27に至る歴史過程のなかに、相互に関連づけられた一連の諸契機として、すぐれて総体的に位置づけられなければならぬのであって、逆に、そうした具体的経過から個別的に摘出した断片にすぎず、扱われ方を受けるべきでは断じてない。世襲財産問題のみ、それも、ポーランド人による世襲財産をなさなかったにせよ、ポーランド人所有地の強化を、あらゆる全体の一方と言ってよい側面だけの一面の強調では、事態の全体像を見失う危険性なしとしないであろう。

最後に、ヘスの以下著者の言説を聞きたい。いわゆる、プロイセンの世襲財産政策が、ポーランド人を、民族的反対派の側に追いやったからにほかならない。総じて、この政策は、ドイツ東部において表現は断固として精力的に推進されたゲルマン化政策の一新的内容であり、プロイセンの世襲財産政策が、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。ドイツ大土地所有の振興とポーランド人に対するプロイセン人世襲財産政策は、一九〇〇年後、不始末に終わった。}

50

植民23、Imere Kolonisation対スラブ人の「対抗分地」 24Gegensatzzubereitungの「土地闘争」に関する実証分析を、欠
付図 ヒエリウス家の系図

Hierius

Alexander  Constantinus  Anthemius  Calliopius

Hierius——Maria

Constantinus——Maria

postuma

（出典）D. Johnston, Roman Law, p. 112, より作成。
ドイツ大帝領統治の歴史的役割

第一章 研究史整理

(78) 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

K. Heß, Juncker, S. 207 Anm. 616.

(78) F. Kato, Die Bedeutung der Fideikommissfrage, S. 87-92.

(57) Hans-Inter Wehler, Krisenorte des Kaiserreichs 1871-1918, S. 207.

(56) M. Broszat, Politik, S. 143f.

(55) R. Jaworski, Handel, S. 27.

(54) K. Heß, Juncker, S. 207.

(53) Martin Broszat, Zweihundert Jahre deutsche Politik, Neuausgabe, Frankfurt am Main 1972, S. 169; R.

(52) Jaworski, Handel, S. 21 u. 27.
ニ
ドイツ農村社会史に関するベルリン国際学会の討議

ドイツ農村社会史に関する国際学会が、一九九二年四月九日より一日までの三日間、ベルリ

1 各報告の要旨

最初に、大会プログラムを示しておこう。

A 第一テーマ 経済全体の発展から見た東部ドイツ農業
構想・経済状況・発展の障壁

司会：Hans-Jürgen Teuteberg (Münster)

Hartmut Hamisch (Berlin)

 Kobe (Buchstein, 1989, 258-259) の地上のゴーセン (Goßern) において開催された。その会議は、危機脱出の方針と打開策、一九世紀から二〇世紀への転換期における東部ドイツ農業の安定化構想と適応戦略であった。ベルリン工科大学歴史学研究所が同大学のハインツ・ライフ教授を主催者として組織したこの学術会議、ハインツ・ライフ教授の手に成った学会報告集総論などにという発表の活発な討議との大要を紹介することは、学ぶべき学び、かつまた批判すべき批判しつつ、新たな論点と観点を探り当てるための一つの準備的な整理を果たしておきたい。
Wlodzimierz Stepinski (Szczecin)

ドイツ大土地所有の歴史的役割

i. Hans-Heinrich Müller (Heidelberg)
ii. Klaus Herrmann (Hohenheim)
iii. Wolfgang Jacobit (Berlin)
iv. Hans-Joachim Rook (Berlin)

ホーネンベルク農業に関する地域経営史に関するポーランドの新研究

司会 Hans-Jürgen Puhle (Frankfurt a. M.)
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

の結論は、およそ以下のとおりであった。すなわち、議論は、工業国路線がすでに不可逆化していたときに始められたのだが、この既定経路の貫徹とともに、東部ドイツ大土地所有の経済政策上の目的を擁護しつつ、ウンカーの経済的基礎の建て直しを図ろうとした点に、論争の意義があったのである。と、ヤルクハックは、農業の窮境を嘆く大地主（Grande）の猛烈な苦情と、国からの援助を求める彼らの要求を与えられた、一九世紀末の農民アンケート調査が実施されたことを論じた。生産と経営の実情に関する調査の主眼は、地主農場と農民経営との分割（Partelleierung）の猛威を敵役に務める。こうした傾向は、まだ現れていないのが現状である。だが、このアンケート調査は、一九世紀末期農業の実態把握を問題点の理論的洞察、そして、農業変革を指す実践的解決策の提言のいずれにとっても、ポメルンの土地所有の便覧と大地主所有とを分析したブーフシュタイナーは、一方において、一八七九年以降、農業生産におけるブルジョア的の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなる。これゆえ、資本主義的農業発展のいわゆる「プロイセン型の道」の経済的帰結を評価する際、上の事実が当然、視野に収められなければならなくなったのである。
第一章 研究史整理

エディーは、プロイセン土地所有構造の利点を強調する。一方において、構造的な困難を示される場合もあるとすれば、他方、農業構造上の問題が大きいです。この分析は、農業経済の危機という通説的見解の再検討を試みる。彼は、農業・植物生産の実数とそれらの価格上昇傾向を確認した上で、不動産抵当負債額を調べても、それほど憂慮すべき状態は生じておらず、むしろ逆に、土地価格の高騰を前提に、持続的もしくは慢性的な構造上の危機を語ることはとうていできない。しかし、一九世紀末から第一次世界大戦に至る時期のディスコミック問題を担当した加藤は、報告の前半において、M・ウエーバーの意図が、相当多数の合理的経済単位を解体することを試みた。つまり、ディスコミック建物の解体を図ろうとする点にこそあったと見、ウエーバーは、この一筋の道に、世紀末から用途東部ドイツにおける農業・土地制度の客観的に可能な最善の形成を託していたと語る。さらに、報告の後半で、加藤は、プロイセン世襲財産問題の歴史的事実を、具体的事例に即し、違った民族の大土地所有者の世襲財産にも疑いをつけていた史実が、の結論部分において指摘されている。
ドイツの農業の歴史的役割

ヴァイツェンスキーは、19世紀末から20世紀初頭期の農業大経営に関するポーランドの近年の研究に見られる特徴的な傾向を報告した。彼は、ユンカースの農村労働者政策、ならびに、大土地所有の発展条件とその面積規模の変化等のテーマを示し、さらに、ポメレレン（Pomerellen）や東プロイセンを対象とする地域史からの関心の集中を著しいと結論づけた。

以上が大会初日の報告要旨であるが、二日目の議事は、近代化の諸問題の検討に捧げられた。まず、農学の発展とゾンツィルト社の近代化について、グレムは、一九世紀後半における一大飛躍を検証した。農業技術への広がりが大きくなり進んだこと、また、その利用の実際を、各地域・経営諸層において突き止めると同時に、農学の実務への応用が急激に進んだこと、さらに、農業の集約化の急進も、忘れられはならない同時的要因である。農学技術への応用が進む限り、農業生産の改革等の変化をもたらした。グレムは、農地の集約化が、各地域における農学技術の発展を、農学技術の経験的地域史研究の基礎に、その必要性を力説しながら、農業近代化過程における植物栽培の必要性を示した。時に、農業経営の精緻化を高める評価に、これまでの農業経営学は、第一次世界大戦期に至るまでの経験をもとに、農地の利用を図ることより、はるかに至ることが、自分たちの永続的栽培の証明と国家の助成を求める要求とを強行した。これは、経営の最大限活用を図ることより、はるかに至ることが、自分たちの永続的栽培の証明と国家の助成を求める要求とを強行した。}

メルヒは、西南ドイツに比して、東エルベにおける農業協同組合運動の開始が遅れたこと、また、そのメンバー構成...
第一章 研究史整理

成も別物であったことを指摘した。東ルペでは、大土地所有者比率が明らかに高い。一八九六年以降、農業者が同盟や連合組織の運営に乗り出したのだ。収穫の組合に頼べるかに攻撃的な言動が目立った。組合が、その自己目的を達成したとは言いがたい。化学肥料や強化飼料の普及に示される農業進歩の波頭に立ったのは、酪農・畜産組合だったのでは。

ステピンスキーは、一九四五年前のプロイセン領ポーランドにおけるドイツ化政策の結果、農民の所有構造を肯定的に評価する。内国農民の擁護論も見られ、他方、プロイセン農民政策により作り出された農民の所有構造を否定的に評価する。内国農民の擁護論も見られる。一方で、プロイセン農民政策により作り出された農民の所有構造を肯定的に評価する。内国農民の擁護論も見られる。一方で、プロイセン農民政策により作り出された農民の所有構造を否定的に評価する。内国農民の擁護論も見られる。一方で、プロイセン農民政策により作り出された農民の所有構造を肯定的に評価する。内国農民の擁護論も見られる。一方で、プロイセン農民政策により作り出された農民の所有構造を否定的に評価する。内国農民の擁護論も見られる。
彼らのすぐれた業績は、高い教育水準、地主との良好な人間関係、そして、企業家的な経済感覚等のためである。次に、ペーター層は、土地取得を回避して、経営資本を農業につぎこみ、自立的経営を実践した。このグルーブの人々は、利潤を目的とする企業家にほかならない。高等教育を受けた彼らは、経済的にはペーターだが、政治的にはおしなべて保守的だった。ミュラーは、ペーターのなかでも、とりわけ御料地借地人（Dornfleiser）が農業進歩に寄与する活動的役割を浮き彫りにした。

ミュラーは、ドイツ農業協会について報告した。当協会は、もともと、全ドイツ的規模での農業発展を目的とした組織でありながら、その活動には、ある種の地域的偏向、すなわち、東部ドイツのあらゆる農業家が協会メンバー中に含まれること、協会主催の巡回展示会が東エルベの諸都市で合計一回開かれたこと、そして、協会がポメルンと東プロイセンにおいて機械的検査を実施したこと、によって検証した。

民俗学者のコパイは、進歩と伝統のひざまで揺れる農民の状態に省察を加える。彼は、農業技術振興機関に照準を当てる。規約・創設メンバー・幹部構成を一見すればただちに知られる通り、そこでは、大経営優遇の傾向が明確であった。だが、一九一八年以後のドイツ農業の再建とアウタルキーの樹立のためには、この大経営のみならず、当然、有為の中小農民経営が必要視されるのである。それによる結果、従来の伝統的な労働方式を、農民が一見したところまるで固執しているのかのような事態がもたらされたのである。他方、トラクターの導入を試みようとした農民が、機械化ならびにそれによる労働軽減への心愿を、自余の社会環境に適応しうる労働生活様式を求める希望の念を掲げ、あわせていたことも、忘れられてはならないもう一
第一章 研究史整理

の事実である。

ロックは、一九七〇年代から一九三〇年代までのプランデンブルク農業を、作業機械の刷新・電気・エネルギー利用の開
始・自動鉄とトラクターとの導入、の三つの基礎過程に即して分析する。電気化と機械的仕入れ費用がかさんだため、
農民経営では、依然として筋力を頼りとするのがなった。田舎の実を認めた上で、ロックは、プランデンブルク農業にお
ける機械化の進展に、技術的進歩への適応のなりやすい農村民の流離と国際的競争戦に対する戦略をも講じるようと帰結した。

オーバー・シェーレジエンを対象とするラウプナーの報告は、現在利用可能な資料の性格、得られる結論は一
種のアノロジーとしてとらえることができる。一〇〇〇ヘクタール以上の農場では、船及びトラクターの導入した農村民の流
離と国際的競争戦に対する戦略をも講じるようと帰結した。

大会三日目の午前の部では、東部ドイツ農業における反近代主義を共通テーマとして三つの報告が行われた。ビュ
タは、土地所有者が、ライヒとラントとして下位レベルの地方自治体のいずれにおいても、一九二〇年までの農
業経営の減益をもたらした。ドイツ農業の地主が経済的苦境に陥って行くことの一因であったろうことは、想像に難
えない。租税問題との取り組み方のスタイルの違いは、ピュータについての問題が指摘する重要な事実で、租税の煩雑さ・欠陥ならびに、税額決定における農場所有者の政治的影響力であった。ウィマール期にあっては、インフレーションの

産税（Grundvermögensteuer）が、一九三〇年代初めの東部ドイツにおいて、大多数の大経営者が経済的苦境に陥って
よれば、声高に叫ばれたさまざまな利害の対立が際立つ時局から、法律違反も含むのかは、特定利害に与する立場を極限まで


67
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

で突きつめようとする局面への移行を指示する標識としての意義を持つものであった。農村労働者政策を論じたフレンシング報告の要旨は、以下のとおりである。農場に定住する日雇い労働者とゲルツヘルトとの利害共同体は次第に解体し、経済外的強制を脱した即物的な雇用「被雇用問題は形成されつつある」と、農村労働者状態に関する一九〇年代のアンケート調査を基礎にして、M・ウェーバーが結論づけたことは広く知られた事実である。これに対し、農業会議所による「対抗アンケート」（Gegenkundgebung）とは、農村での人間関係はすすぐれで協調性に富み、都市におけるよりも良好であるとする見解の証明を企てるものであった。フレンシングは、農村民離脱の不利益を埋め合わせるための地主の諸方策を引き合いに出すことにより、この「対抗アンケート」の主張に対し反論を加える。日雇い労働者の生活状態は低下し、社会的不安が高まっただした農民同盟の機関紙に、反ユダヤ主義の論説はほとんど載らなかったのである。

共通論題報告の拠尾を飾ったのは、大会主催者のライフ自身であった。ライフは、帝国土地同盟（Reichsland）の機関紙ならびに自宅の農業専門紙を分析して、ライフの政策対象と化すほかないかったのである。

デオロジーの流布に努めたのが、ドイツ貴族新聞とドイツ青年農民の二紙だった。これに対し、国粋的ないしは人種的イデオロジーの言説は、同盟の地方紙すなわちほとんど現れずしまいであった。一九二五年以後の時局に移った、全農業利益を力強く代弁するという、帝国土地同盟の中心公分母を作り出すことが、反ユダヤ主義の論説はほとんど載らなかったことは、紛れもない事実である。だが、帝国土地同盟の中央公分母を作り出すことが、反ユダヤ主義の言説は、同盟の地方紙すなわちほとんど現れずしまいであった。これに対し、国粋的ないしは人種的イデオロジーの流布に努めたのが、帝国土地同盟の中心公分母を作り出すことが、反ユダヤ主義の論説はほとんど載らなかったことは、紛れもない事実である。
第一章 研究史整理

2 討論の要点

各報告の直後も、また、最終日後半の総括討論の際にも、巨細の別なく、きわめて批判的な意見が飛び交ったが、

議論の内容は、およそ四つに大別される。

（i）農業国・工業国論争

ベルク（Bercouli）は、当該の論争がもたらした帰結はなかいか、そして、この論争は、当時のドイツ社会にお

いて、どの程度気付かれていたのか、と問うた。この問いに対する明確な解答は、結局得られず、終わったが、ドイ

ツ農業は、当時、いったいどのような危機のもとにあったのか。農業と国家・工業との関係、国内市場の構想をめぐる農工両部門

の調停等の問題領域が、もっと念入りに分析されなければならないと小括した。

モーザー（Jasch, Moses）は、経済的要因など存在しなかったと主張するレースの議論に対する疑念を表明した。ドイ

ツの農業は、当時、いったいどのような危機のもとにあったのか。農業と国家、経済の関係のみに還元されるものでは決してない。

人々の生活状況、文化、経済の面、など、体の細部を指摘しつつ、レースが失った発展の帰結を問うた。

プーフシュタインナーは、レースの立論が、一九〇年代の調査報告のみに基づく分析であることを、そして、ドイツ帝

国全体の統計数値に依拠していること、の二点を指摘しつつ、レースが失った発展の帰結を問うた。

レースの発言要旨は、こうである。主として農民的土地所有により特徴づけられる南部・西部と、大土地所有が支配的な

の発言を踏まえ、こうである。
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

東部のあいだには、一八九〇年代の半ばに至るまで、ヘクタール当たりの収穫高の点で、前後で格差が見られた。大農業経営において実施された生産の集約化の結果、逆の展開がようやく示されるのは、一八九〇年代に入って以降のことなのである。さらに、これ以外のおもだった発言としては、負債統計の欠点をアヒレスが批判したとすれば、他方ミュラーは、大経営の収益性の増進をめぐる蒸留酒製造業の寄与の程度を問題にした。プール・ノーマーという概念を用いることとは適当でなく、その構造的衰退こそが問われるべきであるとした上での発展の見地を取る加藤の理解に批判的に言及した。ハルニッシュは、ある種のフライデコミスが担った積極的役割を肯定的に評価しようとする加藤説に異議を唱えて、基本的に重要だったはずであると発言した。これに対して、集約性・収益・生産の質といった観点で示される大経営の優越を力説したウィアトロフスキーは、加藤のポジティブなフライデコミス理解に知的興味をそそられると表明した。

近代化過程の諸問題

ヘクターの事情は、次のような補足説明を行った。すなわち、大学教育を受けた専門家が農業経営の実務の道に進んだ例は皆無ではないが、概して通例的ではない。彼らは通常、農業機械化の進展について、アヒレスは、ドイツ農業の階層別経営構造自体に、その決定的な阻害要因が潜むと見るのであるが、ベルケは、農園（hess）の機械化が農地区画（feld）のそれに比して、はあるかに遅れを取ったのはな

70
第一章 研究史の整理

なぜかの論点を提起しつつ、それは、経営構造によって説明されるのではないか、むしろ、技術上・費用上の諸問題に起因すると指摘した。プールは、機械化の進展がきわめて緩慢だった点に着目して、その原因を尋ねるとともに、東部ドイツ農業にあって、近代的なものはいたいにだっただけの根拠的な問いを投げかける。彼によれば、そうとも、近代的農業は、資産と特化した北西ドイツ、あるいは甜菜糖ベルト地域においてのみ見いだされるにすぎないのである。

ライフ報告に対するコメントとして、トイペルクは、農村の反ユダヤ主義を説明する大きな手がかりさえもつかれていないと批判した。その際の注意点は、おそらく、二重の意味での文化的遅滞（cultural lag）のような特産物生産地域においてのみ見いだされるにすぎないのである。すなわち、一つは、都市と農村とのずれであり、二つ目は、農業における著しい変化と農村の生産者が抱く遅れた集団意識との相違である。農村に対する都市住民のきびすみの念が、農村の反ユダヤ主義を激化した根拠の一つに挙げられている。

プールは、近代化概念とそのクリティカとの理論的洞察を問題にする。彼によれば、近代化は、社会、政治、文化などの様相に分野的複合的な構成要素を包括するものである。プールは、官僚化・工業化そして民主化という三つの過程を比較考察することによって、近代化の説明モデルを用意しようと説く。いや、それだけではない。近代化とは、そもそも、誰の行なったか、どれほどのコストを要するものだったのかが問われなければならない。さらに、当該の過程は、生産特化による農業の構造改良、農業と工業・政策・国家との関係、そして、経済的失敗の政治的埋め合わせの程度といった諸側面に即して究明される必要があるのである。

トイペルクは、プールに基本的な啓蒙を表しつつ、彼が示した三つの過程に加えて、コミュニケーションの国
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

営化と大量消費の実現との二要因を挙げた。ドイツベルクの議論は、さらに、農村社会史家によって用いられる比較の基準は、本来、厳密な地域史的考察に基づいて選定されるべきであるとの指摘に立った。他方、国家干渉の実態把握も重大問題の一つなのであって、この点を解き明かすためには、この干渉の機能と作用に関する予備知識の集積さ

かれた方向での保護が、国家干渉によって行われたのかもしれない。その上で問われるべきは、次の点である。新たな秩序をもたらすか、革新的な変化を解き放つかが疑問視されるのをえないのである。

ハルニッシュは、農業近代化を、重層的でひずみのある、のろのろと進む（progressive process）過程と捉える。このような特徴をもたらす多様な要因は、彼によれば、農村の流動・都市化・ナショナリズム・教養市民層の文明批判、東部ドイツの過疎化・土地国有化の動き・農業ロマン主義の強まり・軍事力拡充に対する懸念等である。これに加えて、農業に対する工業の影響となろうとして残ると指摘する。この点を解明する決定的な手がかりを農業経済学に求めつつ、彼は、次のよう提案する。すな

わち、近代化の評価のためには、少しく専門的（special）になりすぎると嫌いはあるにせよ、やはり、農業経済学の基

本的な近代化概念が中心に置かれなければならない。と。アヒレスは、これに異を唱える。国は、一八〇年以来、関税によって、農業生産の前提となる諸条件を整えてきたのであるから、純経済的な考察には限界があるというのが
第一章 研究史整理

ハルニッシュは、農村社会史としてのアグリカル・ガシナを主張する。本大会で取り上げられた時期の農業経済をめぐる問題は、社会政策上の諸問題と密接不可分の関係に立つことが明らかになった。われわれが目指すべき新しいうま平野は、社会政策（Gemeinschaftspolitik）としての農業・地域政策（Länderschaftspolitik）の分析に求められているべきものである。

シュテーケン（Stettin）の発言は、こうである。農業近代化とは、もとより、認識不可能な契機ではなないものの、たとえばそれがどの程度まで進展したのかという点の判定は、必ずしも容易ではない。近代化の進め具合を精確に測定するための一の可能性は、国際比較である。また、東エルベの大農場に、改良（Verbesserung）の道を歩む移行の可能性があったのか否かという問題は、シュテーケンにとって、依然として未解決である。国は、一九一六零年に至るまで、農業を最大限操ってきた。農業に残された自主的労力の余地は、おそらく未解明である。国は、一九一八年以後、改革がそれほど進まなかった農業政策の混在野における共同体の危機という事態に立ち至る。国の保護が、なんらの代償を与えられず突如として打ち切られたためである。こうして、東エルベの大農業生産者は、一九一二〇年代に耐えがたい新しい危機の渦中に身をさらす結果となったのである。

セピアスキーは、農村における目的的な生産者グループの合理性に止目して、苦境時のその適応戦略とともに、国・企業・工業国に対する諸グループのスタンスの置き方の違いを視野に収める必要性を説いた。彼の発言は、さらに農村社会の発展を国際比較の視点から見る重要性の指摘に及んだ。アヒレッは、(1)経営、(2)市場経済、(3)イデオロギーとエリートをめぐる社会関係、の三者の区
別とそれらの総合の必要性を、帝政期アグラーール・ゲシヒテ研究の固有の課題に挙げ、また、テストベルクは、都市化過程の分析こそが新しいアグラーール・ゲシヒテの中心的位置を占めなければならぬと提唱した。

総括討論においては、さらに、次のような一連のテーマ、すなわち、農業信用組織・保険組織・通信網の整備・農業の官僚支配・農村の日常生活（レビュー）・婦人の地位、そして、農民の家政、まだ未解決であると指摘される問題、いずれも築き上げた建物的な学会だと評価して、二日間にわたる大会を締め括った。

（1）原題は「Wege und Auswirkungen der Krise. Stabilisierungskonzepte und Modernisierungsoptionen der Bedeutung der Landwirtschaftsformen am Ende der Welt」の内容であり、この論点が正確に伝えるという点に重視されている。それゆえ、各論の諸説解に対する批判的なコメントと、自己の見解を示すために、会場での議論を取り上げ、注記におけるこの簡単な言及にとどめている。

（2）同世代人M・ウェーバーの見地に関する詳細な考察は、ハルニッシュ報告によれば次のように示された。そのような期待を超える事象の存在、これは、これ一つとして、世界経済の意義を論じるための基礎を提供している。

（3）この事実は、一九九六年五月八日付の私信において、ラミレス教授より送付された。
S. 267.

(3) かのちの『大拡張 彼女は夜明け』（M. Weber）より「オイコス（Oikos）」の現状に関する考察の結果、「農業の土地利用」（Starosten-Industrie）の現状について述べるようにならぬ。

中谷義次 『日本農業政策の歴史的考察』（Agrarindustriekomplex）より「農業の土地利用」の現状に関する考察の結果、「農業の土地利用」の現状について述べるようにならぬ。


(2) かのちの『大拡張 彼女は夜明け』（M. Weber）より「オイコス（Oikos）」の現状に関する考察の結果、「農業の土地利用」（Starosten-Industrie）の現状について述べるようにならぬ。


(1) かのちの『大拡張 彼女は夜明け』（M. Weber）より「オイコス（Oikos）」の現状に関する考察の結果、「農業の土地利用」（Starosten-Industrie）の現状について述べるようにならぬ。

第一章  研究史整理

学経済学会雑誌 二二の二（一九七〇年）に、編者として要を示した内容の整理と紹介を含む。好意的でいても、同時批判的でもあるサジェスティヴな書評を寄せておられる。そこで、本書の概要については、佐藤氏の好書賞評是非参照していただくこととして、ここでは、紙数の制約もあり、慣例としての内容の約略をこれをあえて控える、その上若干の感想を、佐藤氏が指摘する論点との重複をできるだけ避けながら書き記すことにより、本書公刊を慶び、その意義を共感するよすかにさせていただきたいため、改めて、本書第一の特長は、この作品が英訳の書であるということである。著者の研究生活のプライベート・ヒストリーや、多くの数年後の成果（ウェブページ）を含め、著者三十八歳のときから新たに始まった研究的考察の所産にほかならぬ一学部時代から数えて三十数年の成果（ウェブページ）ではなく、たかだかその半分強ほどにすぎぬ年月によって生み出された果実である。也と专は、この対象の放棄と新たな課題設定に、松尾氏の経済史家としての英断を示す必要がありますと思える。
第三章【地代償却関係に全国統計とその問題点】

論理の歩みのみを一瞥しておこう。併せてザクセン農民解放史研究
に大きく寄与したグロース（R. Große）は、公式統計と見なされる
なわち、償却件数全国統計と委託地代額全国統計がそれである。松尾氏は、これらの中種類の全国統計に逐一本緊密な
批判を加えるのであるが、この中では前者の官庁統計に対するテクストクリティックの要領のみをきこくんで見てお
きたい。当該の統計に宿るザクセン土地制度史研究上の無視すべきからなる問題性は、著者によれどもいかんと五点で見てお
ては一切不明である。（1）いわゆる本領地域（リュートゲル・リューベックの規定）で言う中部ドイツ荘園制が支配的な地方と
民層が憎しむのを所存としていた領主狭領権の償却件数が、実数よりはるかに小さい。（2）償却地代の額の多寡が、
全く等閑に付されている。

著者は、全国統計のこうした重大な難点を指摘することにより、一方で、ドイツ人研究者の議論の基礎とされるものに
銳利な批判の眼を向けながら、同時に他方においては、対象をつらしだして、リューベックにおける第一次資料の解読と検討に進むことを、すくさま行われるべき継続的実証作業の一課
題として自らに課しつつ本書を結んでいる。
第一章　研究史整理

それにもかかわらず、わたたくしは、実証史家松尾氏のこの点での比類なき学問的良心が見逃されてはならないと考える。

それではまず最初に、事実のアプロオリ然な性格規定と無関係だったとは言えぬ、わが国の西洋経済史研究史上のあの非客観的「予断」とは完全に無縁である。徹底的に史料そのもののに着目して、事実それ自体をして語らしめる氏の厳かな禁欲的態度と、そこからおのずとたどられる分析結果の説得力に富む客観性とは、評者は心からの敬意を禁じえない。それは、さながら、大塚久雄氏が説くあの「事実の信仰」『著作集』第1巻、岩波書店、一九七〇年、一九ページの精神に近い高尚さではないかと考えさせられるほどのものである。

四一（ページ）の精神に近い高尚さではないかと考えさせるべきは、本書の実証分析それ自体が、ある種の研究スタイリルに対する批判的な傾向、この極端な一部の風潮に対する批判意識こそが、松尾氏の禁欲的姿勢に脈打つ学問的熱情の一柱であったろうことは、想像に難くない。

では、逆に、本書にはクーラの言う両極の一端をなす「非理論的な歴史主義」（historical abstraction）のいわゆる「非歴史的な抽象」（theoretical abstraction）の傾きは、いささか見られないのであろうか。ことによると、本書に対する批判者は、一例にすぎぬが、第一章第四節で著者が止目する「近郊農村に対する大都市の経済的放射力」（ページ）や一九〇年以降の「大都市の近郊農村合併」、一九ページは、近代ザクセン資本主義の史的特質と普遍性の双方を考察する上できわめて興味深き事実であるが、これらも、資本主義発展における源流的積積と資本蓄積の絡み合いとも呼ぶべき理論視角の設定と、そうした理論と史実の突き合わせの問題をこそ示唆するものである。とても言うのであろうか。この点に関する評者の印象は、こどもの学問に深く関与する本の基本的姿勢とその方法的立場に
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

対して、なんらかの批判的な言辞を弾丸する資格も勇気も、少なくともわたたくしにはない。むしろ、われわれはやはり、
かって柳澤洛氏が諸田實氏の労作『ドイツ領土同盟の成立』について語った「理論・解釈重視のわが国のドイツ経済史研究への厳しい批判」（土地制度史学 第七〇号、一九七六年、六七ページ）と同じ精神をこそ、本書からもまた読
み取らなければならないであろう。と。さらに、わたたくしは、本書第三の特長を、謹厳実直な筋論と沈黙にもかかわらず、清らかな史実の泉からおのおずと
湧き出るその豊富な問題提起の諸論点に見た。以下では、主として、評者が特に興味深いと感じた第一章（課題の
限定）第三節「中部ドイツ荘園制」の内容理解と深く関わると思われる次の五点ほどの疑問を列記して評者としての
責めをふさぎ、併せて、いつものご教示をおおぐための用に供したいと思う。

a、農民層分化との関係

とより、本書に分解論的観点が全然ないわけではない。事実、著者は「農民層分化」（四〇ページ）の進行を指摘
しているし、「騎士領・封建地代の償却」（五ページ）ののみ抽出は、文字どおりならにかかせないの収束を
おさえるその意義とが追求されねばならないのではいかろうか。この点でははより、分析対象としての農民層の
差異（四〇ページ）の分析が重要な意味を持つことは、言うまでもない。しかし、同時に、「騎士領農民」と管区
農民と区別される三層ごとに、

農民内部それ自体での償却負担の階層別相違で、経営ならびに管区農民の総体としての農業制度全体の近代的改変
過程からの「封建地代の償却」（ページ）ののみ抽出は、文字どおりならにかかせないの収束を
おさえるその意義とが追究されねばならないのではいかろうか。この点でははより、分析対象としての農民層の
差異（四〇ページ）の分析が重要な意味を持つことは、言うまでもない。しかし、同時に、「騎士領農民」と管区
農民と区別される三層ごとに、
朗読 |

第一幕

完結篇

テキスト転換を試みる。
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

一八五〇年代の頃（ロイセンについてのハルニッシャ説だったの。それとも、そのいずれでもない別の割期が設
定されなければならないのでであろう。著者のご見解を伺いたい。

d、工業化との関連

初期工業化（前工業化）と高度工業化（後工業化）という二種類の概念装置を用意する
デッパーや「騎士領の抵当負債の返済」、「ヘーレン」にのみ費消されたのではなく、法面では高度工業化に対して
特の刻印を与える大きな役割をも果たしたのでなかったか。この点についてもご教示を得たい。

e、研究史批判

最後に、著者の慎重な態度を理解しつつ、それでもなお著者の一貫性は何かと思われる問題が、一つ残る。

著者の実証研究が、優に国際的水準に達する高いものであることは、モルがその後著において松尾氏の論考を引用し
ている一事をもってしても充分首肯されよう。そうであればこそ、評者は、ザクセンを「中部ドイツ（ロイセン
とザクセン農民解放史研究に関するかぎり、世界でもすでに五本の指に入るG. Grob. H. Keeswetter. C. Moll. C.
Dippel. そして松尾氏）著者は、ただ単にリュートゲの規定を踏襲する（四八ページ参照）と言うのではなく、諸事実のみ

ページ
第一章 研究史整理

ならず諸見解の「ジャンル」にも奥深く分け入り、そこから抜け出す筋の道をわれわれ後進に示すべき、積極的に独自の松尾説を打ち出すべきではないだろうか。この点についてもまた著者の「英断」を切に望みたいと願うのは、ぎぬのではないか、恐れる。評者の主観的感想にかかわり、本書の客観性がまぎれも確固不動のものであることには、一見の疑念の余地もない。わたしえは、おわりに、「理論の奴隷」へのある種の成り下がりを敬遠し、徹頭徹尾に続く者への礼にかかせざるをえなかったと思う。本書は、実証研究の一つの規範を示す労作である。

2 佐藤勝則著「オーストリア農民解放史研究——東中欧地域社会史研究序説」

佐藤勝則氏の近著「オーストリア農民解放史研究」は、以下に示す章立てを一見するだけでもただちに首肯される。
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

第二部 オーストリア農民解放の経済的帰結

第四章 三月革命後の農業・土地政策の展開構造

第五章 土地所有・農業経営構造と農民階層分化の地帯構造

第六章 多民族複合社会における地域構造と農民意識

第七章 オーストリア農民解放とハプスブルク帝国

終章 総括と展望

1. Agrargeschichte 研究の新たな隆盛

一九六七年に公刊された藤村宏司氏の「近代ドイツ農業の形成」を、プロイセン「ドイツ農業史に関する最高成果」に九七五○年の研究をみた。藤村宏司の「ドイツ社会民主党と農業問題」（一九八七年）というように、ドイツ農業史に直接関わる数点の示された力作が世に問われたもの、ドイツ語圏諸国・諸地域の農業・土地制度史を対象とした本格的研究の際は、必ずしも多産ではなかった。と言わざるをえない。しかし、一九八九年の東欧改革（佐藤氏著、同上）に毎一年の所属消減等の激動の現代史的諸相とあたかも歴史を同じくして、いま、ようやくAgrargeschichte研究の新たな隆盛の時期を迎えるであろうようにと思われる。奇しくも、歴史的なドイツ統一のときと相前後にして上梓さ
第一章 研究史整理

ーー摂政を引き合いに出てもおこがましくはあるがーー加藤房雄の『ドイツ世襲財産と帝国主義』、そして松尾展成氏の『ザクセン農民解放史研究序論』の両著をもって、該研究史上の『創造の新局面』の到来と見なしたとしても、あらゆる不妥とは言えないであろう。眼をほどこらぬドイツの地に転じても、一九二四年四月、ベルリン郊外のゴーゼンに旧東西両ドイツの著名な農業史家が一堂に会して、統一後初の歴史的な国際会議を開き、農業・土地制度史研究興隆の機運は、ここにいてもいやが上にも高まりを見せつつある。佐藤勝則氏のこのたびの大著は、このような内外の『創造の新局面』に正当に位置づけられるべき格式と内実を兼備した重量感あふれる作品であり、わたくしは、本書の公刊に対して、次のような感想を発表するに至ったのである。

2、研究史上的貢献

佐藤氏自身、先行研究の代表作として瀬村康氏の『中欧諸国の土地制度および土地政策』（一九二〇年）を挙げておらう（五三ページ）が、少なくとも同書の第六・七章（オーストリアとハンガリーの土地政策）の実証水準に関する考察を志向する著者の研究意欲そのものに見たいと考える。それは「一言にして、『経済史から地域社会史へ』という一続きの線に集約して定式化される研究方向なのであるが、この点で本書の主題『オーストリア農民解放史』と副題
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

『東ヨーロッパ地域社会史』とは、密接不可分の関係に立ち、また、序章から終章へと至る論理の流れこそ自体が、この一筋の基本線に従って構成されている。こうした新しい研究方向は、佐藤氏の場合、研究対象そのものが然らしめる要求として捉えられている（四六、五三ページ）のであって、対象と方向の融合は、佐藤氏にとって一つの必然で、これは目的の達成法を内包しうるものである。本書もまた、この強固な意欲をも内包しうるものである。本書もまた、残念ながら、この世の習慣から必ずしも完全には抜け出せていないのである。けだし、そもそも、最も基本的な経済史の分析そのものに若干の問題なしとしないとも思われる面がまだ残っているからである。以下、評者の専攻するプロイセン＝ドイツ農業・土地制度史研究の立場から、

II 若干の問題点

1. 必要な通過点（二九、四〇、五三ページ）

「自営農民の自由的な所有は、明らかに小経営によって、中略……土地所有の最も正常な形態である。土地所有、ここの経営様式の完全な発展のために必要であることは、用具の所有が、手工業経営の自由な発展のためには必要であると同様である。土地所有、ここでは人格的独立の発展のための基礎を成す。それは農業そのものの発展にとって、一つの必然的通過点（ein notwendiger Durchgangspunkt）である。K・マルクス『資本論』第三巻、

向坂逸郎訳、岩波書店版、一〇ページ、注ヘペー、（三二、三三ページ、傍点解）

マルクスのこの古典的文言は、農業そのものの近代的進化（佐藤、五三ページ）をのぞのりに理解するのかと、いう根本問題に深く関わっている。佐藤氏にとって、個別小農民経営の創出（四〇ページ）が、農民の下か
第一章 研究史整理

特に、大塚史学の古典的な「二つの道」論が、オーストリア農民解放の歴史的意義の把握に適用されている。まず、周知のように、レーニンは、マルクスを基にした指摘について、次のようになされるべきである。すなわち、「分割論者はよくマルクスの言葉を引用する。『自給農民の自由な所有は、明らかに小経営にとっての土地所有の最も通例の形態である。用具の所有が、手工業経営の自由な発展のために必要である。ここから結論されるはずとは、自由な農民的耕作の完全な勝利が私有を要求することもある」という註釈を加えている（レーニン『社会民主党的農業政策』）。

ここには、大塚史学の通説的な「二つの道」論とは違う別の理論的可能性が秘められていると思われるが、事実、レーニンは、ストルイピンの土地改革によるフートル農民の自由な所有を認め、この段階に於いてこそ農民的農業革命が勝利し、それならば、こここそ資本主義のロシアにとって可能なただ一つの道と見なし、そこで「農業の技術的向
上と「経済的進歩」を力説している。ただし、この種のブリュア的な道は、徹底的に「地主の利益」に沿った進化であると同時に、「強力な農民ブリュアジーの分離」を伴う経路である（同上、九九一〇〇ページ）これは、

このように、資本主義的農業の進化に関する大塚史学の見地と、フレーミンの内在的説明を踏まえた理論視角とのあいだには、相当な隔たりのあることが明らかである。だがあ、読者の間には、ときに、標準的な古典の片言隻句をめぐる解釈上の違いについての詰詰めの答弁に傾きかねぬ傾向が重要なのでなくて、ひとまずは、事実そのもの

事例1、マクデブルク地方のKlein Warnzebenは、世界的に有名な甜葉糖工場である。工場は、一九四○年代の半ばに変わる約七〇〇へクタール以上の農用地を経営した。われわれは、ここに、W・トロイエ（W. Tröte）のいう、「農民企業家」の典型例を見ることができるよう。

事例2、von Alvensleben・Schorbien伯爵は、一八六九年に、自分が所有する騎士農場の借地人を、一九〇二年間契約で募る。これには合計三〇四人の応募者があった。その傾向はその後とおりである。Rittergutsbesitzer一人、Dorfleut-和GroßBauer五人。これを見た最終的には、Osvorsichtenに四年契約で落札されたのであるが、興味深い事実は、pachtwilligen農民層のなりきり広範な存在である。旧東ドイツの農業史研究を代表するH・H・ミュラーは、この点について、御料地と騎士農場との借地人は、概してbürgerliche Herkunftの者が多いようであるが、
イツの「農業寡頭制」をどのように評価するべきか、という問題に直結する。
例3、騎士農場と御料地のペヒター、Artur Schürigは、農民村落Großers出身のSon eines Landwirtsであるミュラー氏の評者宛て「九十九年二月二十五日付私信によれば、この用語は、wirtschaftsfördernden Mittel- oder Großerbauplanerを意味する。富農最上層の一員としてされているSchürigは、一九七七年には、三五〇〇ヘクタール規模の大規模な農場が所有する有名人Boitenburg所有の所領は、その規模は万ヘクタールを超える。名望は別だが、彼がポツダムの文書館で見出された史料によれば、同所領の一つの農業進化の「プロイセン型の道」において、資本力ある大・中農層は、センターアームとハンケーモードのパターン、介環としての重要な歴史的役割を担った。この点を鑑みて、ゲーツヘル層による「上からの道」に農民の「下からの道」をどのように評価するべきか、という問題に直結する。
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

道一との鋭い対抗という、大塚史学の類型把握の一面性型抽象性は、明らかなのであるまいか。そして、「上から」の農民解放を深部において規定していた基礎契機が、下から」の農民層のプルジョア的階段分解だけののではなかっ

たか。なぜかぎりでは、「プロイセン型の道」における「富農制」の制覇は、依然として両極分解の一端結で

ある。したがって、マルクスの「必然的」道選点とレーニンの「プロイセン型の道」とは、必ずしも両立不可能な

二極性ではありえないのであるまいか。

読者は、この視点から、佐藤氏の論述、とりわけ一九四一・八・五月九、そして二七・五ページのハンガリ

リ―農業に関する分析を批判的に吟味されたい。氏によって、「農民解放後のオーストリアにおける農民経営構造の

特質」として捉えられた「農業における資本主義発展の地主型の道」によれば、ハンガリーにおける農民経営構造の

（二ページ、傍点解者、とは少なくとも一九四二・八・五月九、一九四一・八・五月九）が見たと見なされる。ただしご

一方の当事者であるH・ハルニッシュの的確な指摘が想起される。すなわち、「多大な土地喪失にもかかわらず、平均的な農民経営は、（農民解放工程での）、調整の完了後、東・西プロイセン、ボメルン、そして、ブランデンブルクの諸州において、かつてからの劣悪な地質の場合でさえ、大農地化を可能とする土地を保持した。」と（傍点解者、とりあえず、前掲掲指二ページの註二参照）。

３、貴族経営の指導的役割

紙面に制約があり、読者の疑問点の全面展開については、残念ながら断念せざるをえない。ここでは、問題点をも
第一章 研究史整理

イツマングーテン支配の成立とシュタロステン・インデュストリーの展開（四）

一、農民のプロテスタント的な日常的営為（下から）

農業者のプチ・プロテスタント的な日常的営為（下から）　農民の「発展の展望を解き放つ」（四）

「二つの道」の農民解放（農村富樫を果たしたこと、第二に、農民の「プロテスタント的な日常的営為」（上から）にモデルを提供したのは、カトリック教の観点から、「上からの道」を、「下からの道」との、ある種の単純明快さを帯びてはいるが、やはり依然として抽象的であると言わざるを得ない。対抗的な「型分け」（G・モル）をもってするだけでは、ヨーロッパ諸国・諸地域の資本主義の農業進化の基本問題についても、その具体的全体像に迫ることは必ずしもできないのではないか。佐藤氏が適用された理論と同様な理論と同様な理論と同様な理論と同様な理論と同様な理論と同様な理論と同様なる種の構図が生じているのであるが、それは、季節性の労関係の逆転、すなわち、大塚史学の理論観点をもっての理論である。あるいは、マルクス＝レーニンのそれにせよ、なんとかの観点をもとに始められた分析の結果、得られる豊富な社会経済的諸事実を、もしこれほど権威ある学説であるとし、安易に、先行者の通説的な経済史理論の枠組みに依拠して説明することではなく、さあたっては、傑出した
Agrarhistoriker H. H. ミュラーが二貫して行っているように、史実そのものを徹底的に精査し尽くすという意味での事実の復権なのでないか。そして、そのとき、あるいはその後、初めて、経済史の分野それ自体における佐藤氏の高著が、ヨーロッパ地域社会史というすすれて斬新な未踏の研究領域の開拓者の業績としての輝かしい光芒を永く放ち続けるであろうことは、もとより言うまでもない。

結論で展開されるダルマチア、ボスニア・ヘルツェゴビナなどがの諸地域に関する社会史的分析は、先にも述べたが、東欧世界の現代の原点を押さえる上で、味覚されるに足る現代的意義すら主張しうる力薬である。それだけではない。

J・A・シュペーターやF・リストらへの真摯な敬意から知られるところ、本書は、ある意味では、ヨーロッパ文化史と思想史の書でもある。例にすぎぬが、等族自治区の評価に関する研究の積極的言及は、沈思黙想に値する重要な一論点であろう。今後、佐藤氏によって、継続されるにちがいない地域史・社会史はおそらく、思想史まで包括する重要な歴史を自らの義務としている。最も基本的な経済史について、今後果たされるべき、やり残された固有の課題が、まだあまない山積している。経済史研究に踏みとどまり、経済史における史実の復権と新理論の展開を目指す可能性を、まとめて幅広い新しい文化問題の発見——五三ページから、貴重な教示を与えられ続ける恩恵には、ささめし計り知れぬものがあろう。しかし、それにもかかわらず、いや、それであればこそ、われわれが、次のようにあえて言えるであろう。
第一章 研究史整理

3 馬場哲著『ドイツ農村工業史』 プロト工業化・地域・世界市場

シューレージェン麻織物工業史に関する丹念な実証研究として傑出した水準の本書は、『明示的なドイツ資本主義論とはなっていない』（三ページ）との著者自らの謙虚な反省の弁にもかかわらず、ドイツ資本主義論の広くヨーロッパ資本主義形成史論に直結する重大な理論的諸問題を少なからず含む点では、すぐれてポーラーミッシェル性格をも併せ持つ作品と言ってよい。それは、序章「ヨーロッパ農村工業史研究の現段階」において発せられた研究史への三つの「警告」を一見するだけでなく、ただちに認められるところであろう。すなわち、第一に、工場制工業への移行の基本線を、「小生産者の発展」と「商業資本から産業資本への転化」の二本の指を求める視点に対する警告、そして第二に、各国・各地域への「農民層分解」論の無媒介的適用に向けられた警告、そして第三に、農村工業の成立と発展を、特定の農業・土地制度や自然条件に固定的に結びつける視点に対する警告、がそれである。パージ。これらの三つの「警告」は、密接な関連のもとにあると言えるが、著者の問題関心は、一言にして、「当該工業の歴史的特質や盛衰の過程を、農業・土地制度との関連だけで説明する傾向のあったわが国の研究史に対する批判を一の動機とする」（三ページ）という文言に集約されている。と見てよいだろう。このように、本書は、独自の実証世界に深く沈潜しながら、同時に、研究史の批判的観点をも横目で観む。すぐれて論争的で特徴の書である。そこには評者なりに応えることで、与えられた責めをふさぐことにさせていたかといえば、そうではない、以下二点の研究史批判においてはときに階層立つ感を禁じえないが、小稿では、紙数の制約もあり、そうした批判の概要を約略することによって、内容紹介にかかえておきた。
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

それはまず第一に、シュレージェン麻織物工業の構造の契機たる「農村の領有」への転化・上昇の可能性を説いた大塚久雄氏の古典的論考「農村の領有と都市の織元」における類型論的視座の誤差を、著者がいかにして、むしろ、領主資本主義の問題提起を起点とする「プラト工業化論」が決定的に重視する観点に明らかである。ここでは、F・F・メンデルスの問題提起を克服する、スウェーデンの規制をもつのは、なお考えられた良好な土地保有権を基礎とする「農民層の両極分解」の順調な進展にとっての有利な条件を構築し、かつその経路を通じての有利な条件が存在し、それに着目した北條功氏の周知の見地を

「世界市場ないし資本主義的世界体制の規定性」（六ページ）が力説されている。

第二に、シュレージェンの農村住民がゲーツヘルシャフトの規制のもとでは、なお期待された良好な土地保有権を基礎とする「農民層の両極分解」の順調な進展にとっての有利な条件を構築し、カブリあるいは奉公人の「構造の再生産」（九〜十ページ）図のである。ここにあっては、植物のいわゆる「両極分解論の把握方法に対する批判潮流」（拙著「四ページ」）における「ドイツ世襲財産と帝国主義」（九ページ）参照、「二ページ」の別個の経路において重要であったと考えられ、『三ページ』が、より肯定的に評価された上で、その見地が基本的に継承されることになる。

要約すれば、おそらくかのようになるか（四ページ参照）シュレージェン麻織物工業を通じた流通過程の分析が重要である。当該工業の「農村工業としての側面」においては、所与の条件に対する商人の対応の違い（三ページ）を含む「流通過程の分析」が重要である。当該工業の「農村工業としての側面」においては、所与の条件に対する商人の対応の違い（三ページ）を含む「流通過程の分析」が重要である。当該工業の「農村工業としての側面」においては、所与の条件に対する商人の対応の違い（三ページ）を含む「流通過程の分析」が重要である。「プロト工業化論」と村落共同体の位置を強調する「農村史研究者」の側面により「相対化」されつつある。
第一章 研究史整理

こうか、踏まえられているべきである。評者は、本書のサブタイトルを成すとともに、相互に有機的ない関連に立つ二要機会である『プロト工業化･地域・世界市場』の視点のもとで、『ドイツ農村工業化』と『ドイツ村社共同体論』の невозめとせせるな実勢の森に、果敢にしかも多面的かつ鋭利に切り込んだ、『大坂理論』を構成した主要な諸源泉のうち、さあ、あたり次の両者、すなわちマルクスとレーニンにまで立ち返った、『原蓄論』あるいは『土地所有論』との対比の作業は、不必要かつ無意味となってしまったのであろうか。以下では、この素朴な疑問から発する二つの批判的論点をあえて提示して、著者のいう無と、教授を得たいと思う。

第一に、マルクス「原蓄論」あるいは『土地所有論』との関連について。およそ『プロト工業化』もしくは『原蓄論』を取り扱う以上、『本源的蓄積論』との対比の作業は、不可欠と評者には思われる。この点で特に興味深いのが、著者の目指す一六一八世紀の『内地植民』（五ページ以下）である。一七四一八〇五年のあたりに植民者が得た保有地数は、約三万〇〇〇で、そのうちがテュールの自己負担によって新設された保有地は、野に在り、植民者に貢献された農村下層民だたのである。この『農村工業の担い手』（二三ページ）は、概ね、ゲーツヘルにより積極的に創出された一種の直接生産者（二三ページ）である。この農村工業の担い手（二三ページ）と飛行を、ゲーツヘルによる資料なんすに、ギャラズ、馬場氏の言う『資労働の担い手』（九ページ）でもあったとすれば、上の事実は、たえは、封建的・身分制的な社会経済構造の枠内（二三ページ）においてであれ、『封建的』と大土地所有者としてのゲーツヘルジャフが、資本にとらわれた。
能動的基盤とする「賃労働」を導き出す点でのながりが何かの規定性を発揮したかぎりにおいて、すでにいくばくかの近代的性格をも帯びていたことをさがわせるに足りよう。馬場氏のいわゆる「近代植民」を考察するが、ともあれ、植民の中世的性格を規定したものが農業であったとしても、その近代性を工業的色彩と特徴づけるだけではいかかなか曖昧であろう。厳密な意味での「近代国家」と呼ぶにはなおほど遠い（三三八ページ）本源的蓄積期における「土地所有と賃労働の関係」（抽著、一七〇ページ参照）こそ、もっと詳しく追究されてもよかったのでなかったか。この点で、本書にあっては、グループ化または零人の直生の産業過程そのもの、または、当該工業の仕事場の個別事例に即した実証分析が、ほとんど果たされていないように思われることが惜しまれる。

第二に、「レーニンの内極分解論」との異同に関しては、以下各論点を指摘するためにとどめた。馬場氏は、農村下層の経済的矛盾の総体をレーニンが深く拡大したとして、あるいは、オーバルラジオの地点における四つの農村の実態分析を出したと評者は理解するが、それほどにその安定ぶり（二九〇ページ）を示している。検討の年代は、一六一七世紀から、一八世紀末ないしは一九世紀初頭期までである。
第一章 研究史の整理

保有面積の合計は三六〇ルーテであった。そして、一九二二年には、農民数が四一で、総面積は三六〇ルーテになっていたのである。
こうした言わばフラットな農民層の両極分解が実際に進んだか否かは、したがって、ここでは、
また判定不可なのである。
問題は、むしろ、一八九〇年代以降とりわけ農民解放後の近代の東部ドイツにおけ
るその有無であろう。レーニンの分解論は、前近代的土地制度をいかに非難するかという、すく
ねてブルジョア的な観点を基準として、いまなお保持されなければならない一視角なので
はないだろうか。ともあれ、馬場氏がイメージする
いコスのベルーに関する周知の古典的規定、すなわち「産業的大経営の創造」は、
さらに、「大塚理論」のもう一つの重要な源流であるM・ウェーバーとの関連性を問
いにするところだろう。オペラ・ウッジツにおける麻

"農民層分解"とレーニン的分解論の内実とは、かな
りのぞれてあるよう、されば、本稿に完全に近づけることがあろう。
M. Weber, Wirtschaft und Gesellschaft, S. 122。この點に関して、
一九四〇年に世襲財産化されたことが知られるのである。
(1. Conrad, Agrarstatistische Untersuchungen.
Schlesien, in: Jahrbuch für Nationalökonomie und Statistik, Dritte Folge, Bd. XV, S. 726)。同
所関とシュレージェ

の領土は、一九五〇年代の最終
麻

を、"資本主義的企業化"に

っておきたい。コンラートが一九世紀末期に作成した統計表によれば、約四六六ヘクタート
る地図を聞くことは、さらに、地域名を用

に着目して大作「世襲財産論」を仕上げたM・ウェーバーの当時

の世界とその前史をより深く理解する上で、
前篇  ドイツ大土地所有の歴史的役割

分析対象にうるであろう。プロイセン世界財産制の近現代史的展開に執着する読者にとっての貴重な史実課題
第二章
実証分析
ザクセンのヴェンツェル家

『ドイツ最大の資本主義的農業経営の一つ』とされるカール・ヴェンツェル（Carl Wenzel）の『農工複合体』（約700ヘクタール規模）は、ヴェンツェル（Wenzel）とカールとの一九〇六年の婚姻（Zweckheirat）を機縁と
して、ヴェンツェルの創始者ヨハン・ゴットフリート・ボルツ（Johann Gottfried Boltze）の娘婿ツィムマーマンの系譜に連なる婦人であった。

ザーレ川沿いに拡がるハレ盆地に大土地所有を構えたヴェンツェルとボルツェの両者が迎えた歩みは、それ自体と
地借地人（Donaulehensmann）の独特のプルジョア的特性を体現した一典型と評価した実証研究への興味に端を発し
ているが、さらにこれに加えて、ヴェンツェルの大土地所有は、東ドイツ消滅後の広い意味でのユーラシア的大土
地所有の部分的復活の一指標と目されてよいのではないか、という二つの問題関心に基づいていた。

本章は、従前のこうした問題意識を踏襲しつつ、ドイツ大土地所有の近現代史的展開に関する実証的検討を、
ヴェンツェル家の個別事例から明らかにされるかぎりで果たしておくための一読論である。ただし、ここでの考察の対象としてはヴェンツェル社とボルツェ社の起源を尋ねた上で、独占資本主義の成立・展開期におけるヴェンツェル家の社会経済的役割、特に19世紀のカタストロフィを迎えるまでの個別家族史の大筋を跡づけることに限定した。なお、分析の主要な材料は、ヴェンツェルの博士（Dr. phil.）の学位請求論文であるが、有体に言うと、この論考には、一九七〇年頃の東ドイツの政治状況が然るべきした影響からか、公式マルクス主義の影響が残るが、ないわけではない。本稿においては、したがって、そうしたドミネーション的な分析を、しから、史実に即した個別土地所有史の厳密な再構成という一点に着目して、検討の歩を進める。
第二章 実証分析

表 2-2 シュラプラウ農場の労働力

<table>
<thead>
<tr>
<th>畜耕役農</th>
<th>Anspänner</th>
<th>19人</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Halbspänner</td>
<td>4</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Kärner</td>
<td>7</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>手賦役農</td>
<td>Handfröner</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>Kossaten</td>
<td>61</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>97人</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）A. Bues, Rolle Wentzels, S. 3, より作成。

表 2-1 借地関係の締結

| 保証金 | 3,000 |
| 現金 | 1,131 |
| 材料 | 手数料 | 54 |
| 借地料 | 5,420 |
| 公課 | 229 |
| 共同 | 合計 | 9,834 |

（出典）A. Bues, Rolle Wentzels, S. 11f, より作成。

その封建的関係を特徴づけた要因は、言わなくても、その農場経営であった。一三の農民たちのもまった同一日数の役務を履行していた。シュラプラウにおける労働力構成は、表 2-1 のときである。一七三三年の畜耕役務の役務が履行されていたので、もしもシュラプラウが農場の役務総日数は、一年二百八十八日に達し、ヴェンツェルは、一日当たり三〇人以上の労働力を使役していた計算になる。シュラプラウの裁判権を握ることにより、シュラプラウの勢力範囲は、御料地管理人（Amsrat）としての権限で、領民に対し、かつ、バーレーヴィンデン（Nieder-Abersfeld）、オーウェルおよびシュルツェヒェッテル（Schachtseehe）、ニーダーアルバーケン（Albersfeld）の計八つの村落（Amsdorf）とシュラプラウの市場町（Plecker）に住む百数の人数にまで及んだ。

一七六六年に、彼は、早くも第二の御料地（Unteramt）の貸借に乗り出す。御料地シュラプラウの借地によって、ヴェンツェルの勢力圏は一斉に拡張する。当該の御料
表 2-3 ヴェンツェル家の系譜

| 1. Georg Philipp     | 1734.9.16-1791.12.1 |
| 2. Andreas Friedrich Philipp | 1776-1826 |
| 3. Heinrich Moritz Carl   | 1790-1856 |
| 4. Carl Emil           | 1812-1882 |
| 5. Carl                | 1843-1907 |
| 6. Philipp Kurt Carl Emil | 1876.12.9-1944.12.20 |

（出典）A. Bues, Rolle Wentzels, S. 1, 7f., 10, 16, 48 u. 242, より作成。
第一章 実証分析

2 ボルツェ家の「グルップ伝説」

ボルツェ社（Firma J.C. Bollce）の始祖ヨハンは、男系の跡継ぎに恵まれなかったため、社名の存続を賭けた命運

107
表2-4 J.G. ポルツェ社の系譜

<table>
<thead>
<tr>
<th>No</th>
<th>姓名</th>
<th>生年-没年</th>
<th>職業</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>Johann Gottfried Bortze</td>
<td>1802.1.14-1868.5.30</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>Leopold August Julius Zimmermann</td>
<td>1826.6.17-1875.6.9</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>Leopold Julius August von Zimmermann</td>
<td>1849.6.16-1913.11.25</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>Leopold August Julius von Zimmermann</td>
<td>1887.6.4-1915.7.20</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>Ella von Zimmermann</td>
<td>?-1949</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）A. Bues, Rolle Wentzels, S. 39 Anm. 1) u. 249, より作成。
まで及んだ。その結果、起業時からわずか四〇余年後の一八六五年頃には、工業設備を整えた、有機的農場復
合体（zusammenhängender Güterkomplex）と言われる大規模資本主義経営が、中部ドイツに出現する。一八六六年
時点で約二九〇ヘクタールに達したボルツェの大土地所有は、一八五二年と一八六三年に獲得した二つの騎士農
場を含む約三六の私有農場、および、一五の借地農場を包括していたが、それは、ザールツミュンデを中心に合計一
五に上る地方自治体（Gemeinde）中にも及ぶかわめて広大な範囲にわたっていた。彼は、ザールツミュンデを呼んで称詠
することを習慣的に行うが、四代目のレオポルト・アングスト・ユーリウス
ボルツェの社長はツイムマインデ家によって守られて行くが、四代目のレオポルト・アングスト・ユーリウス
ボルツェは、ゲマイネデ家（Gemeindewesentlichen）警察管区長官（Amtsvorsteher）兼、郡会（Gremien)
ニヴェンツェルの「社会的給付」

ニヴェンツェル伝説が生み出されるのに大いに与かって力があったものの、それは、多くの農村労働者用住宅の建設、ならびに、職員・使用人・労働者等が設立した記念基金（エニンクェレンシュテッフング）の二つであった。第一次世界大戦中からすでに、一〇万マルクを拠出した。その結果、ドイチェンテールザルツミュンデー導入は、二〇〇以上ものアパートが新築される。また、病気や困窮のときに勤労者の救済を目的で作られた労働者支援基金、一種の老齢年金として設けられた年金用基金もまた有益だったと伝えられている。ニヴェンツェルは、という一般的な姿勢と比較するならば、はるかに積極的な態度を有する当該の課題に対して示した点は評価されてよいのである。彼が提供した住宅が、一九三〇年代初頭に一〇三〇以上もの上ったことを、ニヴェンツェルのパーソナルズムの「社会的給付」無批判的にほめやる一部の傾向とはむしろ逆に、いわゆるニヴェンツェルの素材におけるユニークな特徴を指摘しつつ、その前提は一九五〇年以上も存続した。その結果、ニヴェンツェルの住宅のすべてがそうした理想的な状態にあったわけではない。家屋小屋や納屋などを若干手直しにしたにすぎぬ劣悪な住宅も少なくながら存在した。ニヴェンツェルの内実を評価する際には、以下の四点がしっかりと押されなければならないのである。まず第一に、

「社会的給付」の内実を評価する際には、以下の四点がしっかりと押されなければならないのである。まず第一に、
表 2-5 1921年2月の地方選挙（Landtag）における得票数

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>共産党</th>
<th>独立社会民主党</th>
<th>社会民主党</th>
<th>中央党</th>
<th>プルジョア政党統一リスト</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Salzmünde</td>
<td>102</td>
<td>3</td>
<td>6</td>
<td>11</td>
<td>230</td>
</tr>
<tr>
<td>Schraplau</td>
<td>645</td>
<td>—</td>
<td>53</td>
<td>5</td>
<td>397</td>
</tr>
<tr>
<td>Langenbogen</td>
<td>374</td>
<td>3</td>
<td>7</td>
<td>3</td>
<td>174</td>
</tr>
<tr>
<td>Ober-Teutschenthal</td>
<td>265</td>
<td>110</td>
<td>2</td>
<td>—</td>
<td>199</td>
</tr>
<tr>
<td>Unter-Teutschenthal</td>
<td>753</td>
<td>183</td>
<td>2</td>
<td>—</td>
<td>349</td>
</tr>
<tr>
<td>Schochwitz</td>
<td>40</td>
<td>—</td>
<td>4</td>
<td>—</td>
<td>29</td>
</tr>
<tr>
<td>Zappdorf</td>
<td>261</td>
<td>—</td>
<td>17</td>
<td>28</td>
<td>90</td>
</tr>
<tr>
<td>Quillschina</td>
<td>94</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>10</td>
<td>73</td>
</tr>
<tr>
<td>Eisdorf</td>
<td>272</td>
<td>62</td>
<td>—</td>
<td>1</td>
<td>172</td>
</tr>
<tr>
<td>Stedten</td>
<td>504</td>
<td>—</td>
<td>77</td>
<td>60</td>
<td>276</td>
</tr>
<tr>
<td>Höhnstedt</td>
<td>455</td>
<td>7</td>
<td>2</td>
<td>—</td>
<td>292</td>
</tr>
<tr>
<td>Fienstedt</td>
<td>94</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>87</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）A. Bues, Rolle Wentzels, S. XXI Anhang 7, より作成。
表2-6 記念基金の実態

<table>
<thead>
<tr>
<th>基金総額</th>
<th>500,000マルク</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>年運用額</td>
<td>20,000</td>
</tr>
<tr>
<td>一社あたり運用額</td>
<td>10,000</td>
</tr>
<tr>
<td>使用人用年金額</td>
<td>6,670</td>
</tr>
<tr>
<td>労働者用年金額</td>
<td>3,330</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）A. Bues, Rolle Wentzels, S. 146f.より作成。

表2-7 ボルツェ社における年金額 1924年

<table>
<thead>
<tr>
<th>人数</th>
<th>93人</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>一人当たり年金額</td>
<td>71.72マルク</td>
</tr>
<tr>
<td>使用人</td>
<td>1,022</td>
</tr>
<tr>
<td>労働者</td>
<td>3.26</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）A. Bues, Rolle Wentzels, S. 146f.より作成。

前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

ます改善し、未熟練労働者の帰結を伴わざるをえなかった。反抗的な振り舞いが追い討ちをかけたのである。

その間の実情をいっそう鮮明に把握するために、ボルツェ社の規約上可能な支給年金額を一九二四年について記したものである。
第二章 実証分析

<table>
<thead>
<tr>
<th>表2-8 使用人支援金庫の実際</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1. 繰り越し高（1924.7.1現在）</td>
</tr>
<tr>
<td>2. 積み立て金（1924-1928年）</td>
</tr>
<tr>
<td>3. 合計</td>
</tr>
<tr>
<td>4. 資本勘定へ転記（1928.6.30）</td>
</tr>
<tr>
<td>5. 金庫繰り越し高（3-4）</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）A. Bues, *Rolle Wentzels*, S. 149, より作成。

だが、彼らは両者ともに、一年間の勤務を無事果たし終わなければ、年金受給資格を得られなかった。また、支給そのものも幹部の自由裁量に任されていた点では同じであった。

彼らは、年間の勤務を無事果たし終わなければ、年金受給資格を得られなかった。また、支給そのものも幹部の自由裁量に任されていた点では同じであった。

表2-8 使用人支援金庫の実際

| 使用人支援金庫の実際 | 330,968.27マルク |
|--------------------------------|
| 1. 繰り越し高（1924.7.1現在） | 330,968.27マルク |
| 2. 積み立て金（1924-1928年） | 140,255.95 |
| 3. 合計 | 471,224.22 |
| 4. 資本勘定へ転記（1928.6.30） | 418,851.65 |
| 5. 金庫繰り越し高（3-4） | 52,372.57 |

（出典）A. Bues, *Rolle Wentzels*, S. 149, より作成。

例えば、一人材の面を併せ持っていたのであった。さらに、自己資本から回されるこの種の基金そのもの、免税特権を享受したと言うにとどまり、同時に、巧妙な脱税策としても利用された実事が関係である。表2-8を見よう。

当該の金融には、一九二八年時点で、四五万マルク強の金額が全く無税で積み上げられていた。ヴェンツェルが金融本来の目的のために使った額は、そのうちのわずか四五万マルク強にすぎない。彼は、四五万マルク以上に達する貨幣を資本勘定に転記することによって、そこから相当額の企業家資本を捻出したのである。それゆえ、この種の基金が、書面上の計画に沿って仮想資本を積み上げ、意図的か否かは別として、結果的に長期間の脱税のための隠れ込の評用された点が観察されているとはならない。それは、資本積立に伴う税金を逃れることの一策たる実質的役割をも担っていたのである。

純粋な博愛的配慮ではなく、あからさまな資本家利潤追求の観点が、上述した「社会的給付」の本質を規定する契機にほかならないと説くヴェンツェルの主張は、肯綮に当たると言ってよい。
表2-9 ウンター・トイチェンタルのゲマインデ議会

<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>共産党</th>
<th>社会民主党</th>
<th>プルジョア・ブロック</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1921年まで</td>
<td>11</td>
<td>1</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>1921年</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>1924年 (a)</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>(b)</td>
<td>4</td>
<td></td>
<td>5</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）1921年までの数値11は、独立社会民主党と共産党との議員の合計。また、1924年の3は、オーバー・トイチェンタルの数字。
（出典）A. Bues, Rolle Wentzels, S. 100f.より作成。

三
ヴェンツェルの地域管理政策。

ヴェンツェルの『社会的給付』の第一のねらいが、農業労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かれていたことは、先述のとおりである。このよう

に、次節では、ヴェンツェルの地域管理政策の実態を追究する。

192年から農村労働者を隔離する点に置かられてい
第二章 実証分析

は、これを、当選のための買収工作の一つと見なしている。

次に、行政上、領地区域（Gemeinde）解体の拒否である。一九二八年の一月革命後、封建制下の残滓、{}

と呼ばれる領地区域の解体が日程に上り、その後、一九二九年を迎えると、領地区域の解体に激しく抵抗した。その理由は、およそ以下のとおりである。

一つに、領地区域が与えられた税制上の優遇措置は、格別であった。逆に、ゲーマインデは、領地区域の実質的な財政負担は、自治体が負担するものであり、自治体の上に重くのしかかったものである。領地区域が、自己を運営するための扁平組織を形成する際、必要不可欠である。

第二に、ヴェンツェルは、自分自身が領地区域に住む児童・四人のために、その教育費、一等、二等、三等マルクの支払いを引き受けたものである。義務教育の財政負担は、自治体が負担するものであり、自治体の上に重くのしかかったものである。

第三に、自治体は、救貧のための主要な役割を果たすことができるので、自治体もまた、領地区域の児童・四人のために、その教育費、一等、二等、三等マルクの支払いを引き受けたものである。義務教育の財政負担は、自治体が負担するものである。

さらに、労働者夫妻は、三年間の永年にわたり、領地区域で額に汗して働いていた。就学義務を果たす目的で、身体障害者や老齢年金受給者を支える労働者の扶養を自治体に押しつけた事実は、明白である。

第四に、このような領地区域からの労働者の追放は、
「農業王」であるキャールがナチス党員でなかったことは、厳然たる事実である。しかし、ヴェンツェル社の社内報「われわれの経営」から知られるところ、彼は、ドイツ・ファシズムのスペインへの軍事介入や反ユダヤ主義の「人種理論」を支持する記事をさかんに載せたばかりではなく、ザルツミュンデのナチス突撃騎兵部隊（Reichsverteidigungskorps SA）駐屯地の維持を資金面で援助することさえはからなかなかった。ヴェンツェルの影響下にあったハレの精糖工業からSAに与えられた寄付金は、一九三四年より一九四〇年までで、総額八六・六七二・三五マルクに達した。また、ヴェンツェル自らの農業経営からは、一九三四・一九四三年のあいだに合計七八・五五六・七五マルクがSAに供与されている。一糖ナチスの協力者ないしは支持者としての役割を演じたもう一面の厳然たる事実が見逃されはならない。
スターリングラードのドイツ軍降伏に至るまで、グループの面倒は、ヒトラーに絶対順を守る即応命令を下さず、そこで何をやるかを決定していた。その中でも、ハンガリーのズラックを含む南東部のハリー・ゲッベルスの責任は重い。

Roman 2017年7月、ロイシュ・グループは、ヴァンツェルを初め、グループのメンバーは、南東部のハリー・グループを発見し、ヴァンツェルを釘付けにした。また、彼らは、ヴァンツェルの偽証をあえて行っては、その屈折した心理の奥底に、このように、地主・小作人関係と債務・債権関係がオーバーラップした世俗的人間模様が隠されていたのである。すでに、地主・小作人関係と債務・債権関係がオーバーラップした世俗の人間模様が隠されていたのである。
その後の経緯

九四四年七月、ナチスは、ヴェンツェル夫妻の全財産を差し押さえる。妻のエラは、有罪判決を免れたものの、ペルリン近郊のかの悪名高いヴァンズブリュック（Vansbrock）女性専用強制収容所送りとなる。彼らは、翌一九四五年三月一日、ようやく釈放される。アメリカ軍がトレビンタール方面へ同年四月三日進駐してきたのち、エラと息子のカール・フリードリヒは、ただちに財産を戻しの闘いを始める。アメリカ軍当局は、ヴェンツェルの右腕だったシュタウフェンデルをトレビンタールの村長兼農民指導者（Ortsbaumeister）にそれぞれ任命する。そして、カール・フリードリヒ・ヴェンツェルの全財産の返還を決定する。

しかし、ヴェンツェル社の存続が問題である。共産政権当局の先の決定は白紙撤回されたからである。『民主的土地改革』が実施される運びとなり、アメリカ軍政当局は、ヴェンツェルの右腕だったシュタウフェンデルをトレビンタールの村長兼農民指導者（Ortsbaumeister）にそれぞれ任命する。そして、カール・フリードリヒ・ヴェンツェルの全財産の返還を決定する。しかし、ヴェンツェル社の存続が問題である。共産政権当局の先の決定は白紙撤回されたからである。

その内容は、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくとも、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくとも、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくとも、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくとも、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくとも、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくとも、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくとも、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくとも、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくとも、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくとも、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくとも、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくとも、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくとも、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくとも、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくとも、農業の再統合に役立つとされたもので、収穫処理業の実施がどうしても避けられないと言うのであれば、少なくも
第二章 実証分析

五

結

語

対象から外された残留農場の二つ、母と自分用に留保することをお認めいただいたからでは、幸せである。

C・F・ヴァンツェルが求めた残留農場は、ザルツミュンデとフィーニシュテット（Fehstett）に位置するものだった。

これに先立つ一九四五年一月一日付のエラの陳情書では、ザルツミュンデにおける住民からの土地取得要求は皆無であるとして、また残留農場がエラに与えられることには、當地の農村住民の願いにも沿うと述べられている。

しかし、ザクセン州の地方管理当局は、ヴァンツェル家のフィーニシュテット農場の付与に限って妥協しただけでは、ザルツミュンデの残留農場扱いと大土地所有の「共同管理」の要求に関しては、ここにとどまることになった。この決定を不服としたカール・フリードリヒは抵抗を続けるが、一九四五年一月一日以降、特に西ドイツへ向かう。その後、彼は失意のうちに自殺を遂げた。

四月三〇日に発行された彼は、ただちに西ドイツへ向かう。その後、彼は失意のうちに自殺を遂げた。

アウシュヴィッツに連絡する一筋の連続線で、ドイツ近現代史における「ヒトラーの政治的史」を厳しく批判す

る「定題的にアミティ・グルッペル」（Gesellschaftsgeschichte）と農業史（Agrargeschichte）の二つの研究潮流にあって、終始堅持され続けた一つの基礎視角だったこと、そして、その底流に息づく「旧ソ連ジャガパン」的な原則的立場が、民主的農民解放を支持する
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

を以下に示しておこう。

第一に、コンシェ（Werner Cenae）のペーベル（Peppe）論を、近年とみに隆盛の観察の強い農村下層問題に関す

ザーヴェノ領内での貧民（the landless poor, p. 649）について言うと、その足跡

ザーヴェノ農民層を、下層民との比較において相対的に減少すると見たウェンダーのいわゆる「農村人口の社会経済的分化」

第二に、地主のパターナリズムの役割について、ことシュテーウェノ領に関するかぎり、一八七七年の前後期を問わず、

それを積極的に例証する証拠に欠ける、とウェンダーは断言する。彼によれば、シュテーウェノの地主に、パターナリズム

の基本的属性を見るのはできなかったのである。では一一つの事実に、とウェンダーという、システムとしてのバ

ーナリズムの社会的役割の方に力点を置くペーベルの周知の構造的解体に対する影響やかなこの対照が意味するこ

には、なにか。ペーベルとペーベルとの突き合わせの研究史整理が必要となるね。

第三に、村落政治を支配する土地保有農民の一種の寡頭制（a kind of oligarchy of landholding farmers, p. 650）の指

取が、興味深い。それは、土地を持たぬ隣人と、地主が任命する村長（いわゆる「Schatzen」）との双方に、等しく重大

な影響を落とすものだった。この点は、ウェンダーの「富農寡頭制」論を補強する事柄と見なさないのか否か、吟味する

だけの意味があるであろう。

以上のように、ペーベルの立つ特に一つは、実証の厚みを重視する一点に絞って理解されるべきでなく、むしろ、

もろもろの研究史を、あたかも一刀両断のもとに斬り捨てるかのような、すぐれてポリミッシュな論点提示の仕方に求

められるよう。もし、このように言い当てないとするならば、なおさらのこと、その難点に言うべきべき問題点にも同

時に批判的な眼が向けられなければならない。大切なしか、いま用意できるようした観点は、さしあたり、以下の二つで

ある。

第一に、ペーベルにあたっては、階級的構造的視点が稀薄な点。断して見逃されるべきではない。次は、言説を聞かれた

い。シュテーウェノの多くの人々が送っていた暮らし向きは、西あるいは南の多くないドイツ人の暮らしを凌ぐ物的満足

をもたらすものだった（p. 653）。後世の歴史家が封建農村の物的満足度の地域差を判定することに意味がないとは言
第二章 実証分析

いま、たとえ、東エルベのシュテューヴェノのみならず、南そして西ドイツの農村住民の日常生活が分析されなければならない。そのとき、異なった地域対象の相違と共通性を二つながらに把握する可能性が、初めて生まれるのである。いま、こうした判定の当否はひとまず置くとして、そもそも、西・南・東ドイツ各地の農業社会の歴史的構造の特質と個性は、どのようなものだったのであろうか。ハーゲンの結論からは、この点に関する具体的イメージ

いや、そればかりではない。いいしょ、農村社会のミクロ史を手がける以上、全構成メンバーを引きくるための村落全体の

表様（例、p.532）が振りかざされる必要性、というか、第二帝政期のユーダーウィー・イデオロギー的な武器について、そこに、「ユンター」階級の全部の一把握でなく、同一階級内の内部的類型差の

違に対する知的関心をともにかわめて薄弱であるとの差を免れることはできないのである。それと、ハーゲンが、東西ドイツ二元論の「地理学的・説明上の有用性」を一方で認めつつも、同時に他方において、「ドイツ社会政治史に関する東エルベ・西エルベ二元論のアプローチ」の放棄」を、さらに学術的持久性があるとの点において、

正しいとあるが、あまりにも抽象的な普遍的事実を、一面的かつ一義的に強調したところで、それ、というように、なんの意味があると言うののか。そうした一般的な「共通性」（community, p.17）の一方的な指摘だけでは、歴史認識の深化な、およそ望むべくもなかろう。
| 1887 - 1888年 | 95,25 | 155,5 | 50,55 | 21,31 |
| 1992 - 2003年 | 95,25 | 155,5 | 50,55 | 21,31 |

| 4.9.95ha | 22,076Ztr. | 155,5 | 96,720.1 |
| 6,6.96ha | 50,55 | 21,31 |

**付表**

- Hohenburen
- Gleisen
- Nienberg

---

Feudal, S. 16.

A. Boss, Rolle Wendels, S. 10.


(337.7ha) Hohenburen (69.03ha) · Nienberge (224.53ha) · Gleisen (224.53ha) (von Wuthenau) · Nienberge (337.7ha)

*Note: The text is in Japanese with some German words and columns. The table contains data on land areas and possibly other measurements or statistics related to the mentioned locations.*
第三章
問題提起

東エルベの心性と大地所有

ドイツ第二帝政（一八六二～一九一八年）の構造的な民主主義敵対性を厳しく批判して、ウェーバーは、次のように述べる。すなわち、一公権的国家のこうした機構に対する一種の心理的な補完物を成したの
は、臣民性（Entertainmentalität）であった。国家権力の意志行為や権利侵害をも受け身に甘受し、過度
に用心深く沈黙をもって日常の些事にわたる嫌がらせに反応し、歩道で出会った少尉を脱帽して避けて、取るに足らぬ村の巡査にも国家の面影の宿っているのを見る、それゆえに抗議するよりむしろ適応することを、このすくなく東エルベ的な心性
（Mentalität）は、何百年の年月を経た政治的、宗教的、伝統の所産であったという。

ドイツ近現代史における「連続性問題」を決定的に重視するウェーバーにとって、この「臣民性」とは、旧来の前工業的なエリートと価値体系が、工業化達成後の社会をなお刻印し続けた「負荷」のきわめて重大な構成要素にほかならなかった。実際、ほかならぬドイツにおいても一八六七～七年以降、重要な経済的、社会的ならびに
政治的な諸決定が農業社会の指導エリートの利害に沿って下され、これらの政策決定がその後もずっと引き続いて帝國ドイツの工業社会の展開を規定していたことは、きわめて明白なものである。それとここから、この社会の相違立つ矛盾や「断層」の大部分は、まさにその点に帰着せしめられるのである。⑥。「ウェーバーのこうしたユンカース派である）。

と北西部との「農民意識」（Bauernbewusstsein）の類型的相違を対比し、北西部に特徴的な「農民自負感」（Bauernstolz）とは全然異なる東部農民の思考様式について、つとに、次のような興味深い定式化を行っていた。

「グーテーベルグ上流階級としてあまりにもかけ離れた存在になっている村がある」とすれば、その村は除くとして、すべての自治体（Selbstverwaltungskörper）において、中農と大農（die mittleren u. größeren Bauern）が、このグーテーブルグ支配（Härend）を自らの上に感じ取っている所、いわばはすでにと、グーテーベルグ農場の広大な規模の土地が、ひしめきあって住みついている村（Rente-Leute）たちは、社会経済的意気消沈（Sozial- und Ökonomisches Gedankheits- und Abhängigkeitsgefühl）が、このような状態に適合的な感情であり、それは、年がら年中、明確な識譜に上っているひは決してな
ウェーバーがここで指摘する「社会経済的意気消沈・従属感」とウェーバーの言う「市民従順性」とは、重畳的な関係に立っているように思われる。いや、むしろ、より正確には、一種の論念にも似た「東エルベの中心性」を生み出すものである。この「ウェーバーのハント」なのであった。

これで、ウェーバーの農業史研究の近作をする。 CARL (H. Kretz) の「グーツヘルシャフト」が注目される。 CARL は、「グーツヘルシャフト」をどのように把握するかという点で、一九四五年後の研究史を、四つのロイセン・グーツ民性、グーツ民性、グーツ民性の最も重要な歴史的起源の一つ、グーツヘルシャフト下での「農場・農民制」（Gutsuntertänigkeit）であった。

これによれば、このグーツヘルシャフトをどのように把握するかという点では、東エルベの農村史に着眼するのである。グーツヘルシャフト、グーツヘルシャフト、グーツヘルシャフトを、経済・所有関係・法的側面の総合として把握する。封建領主の自己経営は、中世末期の農業危機の下に拡大し始めた。広範囲にわたる領地の、まどまりが形作られ、法的諸関係が整えられて行くのも、このとき以降である。グーツヘルシャフトは、一八世紀に完成を見ると、グーツヘルシャフトは、土地・農民支配と保護権（Grund, Leib- und Patronatsverhältnis）に束縛される。
第三章 問題提起

第二に、リュトゲ（Gerhard Hertz）もまた、歴史的展開を重視するが、ゲーツベルシャフトを狭義に限定して理
解する。彼にとって、それは、ゲーツベルの統治上の諸機能を伴う閉鎖的な領域形成の中核を成すものだった。したがって、ゲーツベルシャフトの概念構成上メルクマールでは必ずしものない

第三の潮流を形成したのが、ハイツ（Gerhard Hertz）、ハルニッシュ、そして、ミュラーらの旧東ドイツのマルク

主義的農業史家によって展開された「再版農奴制」（zweite Leibeigenschaft）の一覧にあるマルクス主義的な時期区

分によれば、ゲーツベルシャフトとは「封建制末期」（Spätfamilialismus）の一事象にほかならないのであった。

第四に、ポルケ・シュートルツフォルト（Hennig Grap von Borcke Stargard）は、独特の自説を、第三者の学説に対

置する。すなわち、計画的に行われされるゲーツベルシャフトを持ち大土地所有は、一八世紀の末まで、実はそれほど一般的ではないかった。農業技術と農業生産も、まだ、少なからぬ剰余生産物を産出すほどの水準には達してい

なかった。利潤に対する関心は、全く微弱だったのである。その上、ゲーツベルシャフトという概念で言い表されていたことは、明らかに、支配体制と経済的事実との不相応な交錯にすぎない。ゲーツベルシャフトとゲーツベルシャフトという言い方は、東西の法的相異に関する誤った表象を呼び

醒まし、され、なら意味ある対概念ではない。グランツベルシャフトとゲーツベルシャフトという概念で言い表されたことは、しばしば、基本的な一致

な学説は別として、研究史は、一八〇〇年以前の東エルベの農業事情を一節の発展史として描く点で、基本的な一致。
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

を示している見てよいだろう。そのあらましは、およそ以下のとおりである。

ツーハルシャフトは、ルントヘルシャルシャフトの転化形態（Austformung）として、一五世紀末以降に成立した。

その重要な前提は、ルントヘルが一三一四世紀に、それまで領邦君主（Landesherr）が持っていた土地所有権の権限とを獲得したことである。ルントヘルは、とりわけ領主裁判権を握ったことで、農民に対する支配権を行使した。一四世紀以降、独立自動農民層は衰退して行く。

ルントヘルは、一五世紀に入ると、不毛の地と化した農民地を、新たな農民家族に任せるのではなく、自己経営地に組み入れ始めた。ルントヘルが行ったことは、すなわち、農地を耕す直接生産者の意志を無視してそれを取り上げることであった。ルントヘルの経営は、当初ながらも一部は、農民族民や新しい農民家族の利益を図る変化を招き出させた。また、ルントヘルは、自農地を耕す直接生産者の利益を図る変化を招き出す。

一六世紀になるとルントヘルは、地方法（Gutsverfassung）の諸規範を、ますます農村住民に不利に働くよう変化する。ルントヘルとノースハイムの諸規範は、農民族民が、自由移住権（Gutsmauerrecht）を奪い、きわめて過酷な、いや、と言うよりもむしろ、従来にして雇用のない賦役を彼らに課したばかりではなく、奉公人（Gutsler）としての義務まで要求した。ある、農場民族制が次第に仕上げられて行く。こうして、ルントヘルは、自農地を耕す直接生産者の利益を図る変化を招き出させる。
保有権の根本的変化がもたらされる。戦争の結果、農民地保有者が消えたそのあとの後任は、より劣悪な無権利状態の農場においてである。土地の支配権をもとども裁判権を領民保護権をも一手に握ったグーツヘーレルが、同時に、彼の潔民が無償で営むグーツヴィルシュタフトの専一的な利用権者（ mezger ）でもあった。

しかし、一八世紀には、また、グーツヘーレルが廃止しようとする動きも始まる。一方において、政治的軍事的かつ財政上の利害関心に従って、強力な農民層を必要としたランデスヘルが、グーツヘーレルシャフトの縮小ないし除去を望んだとするならば、他方、農業生産の進歩それ自体により、旧来の因習的な方式の克服が促されたのである。一八世紀から一九世紀への転換期を皮切りに、その後五〇年以上続く農民解放（ Bauernbefreiung ）によって、グーツヘーレルシャフトは、最終的に廃棄される運命を迎えるのである。

グーツヘーレルは、模様な地域的偏差を帯びながらも、経済的見地で東エルペのかの「黒海・バルト海地域」北部の西の農業経営を、特殊東エルペの発展」と呼び、その主因を経済にあるとする。農民地保有者が消えたそのあとの後任は、土地の支配権をもとども裁判権を領民保護権をも一手に握ったグーツヘーレルが、同時に、彼の潔民が無償で営むグーツヴィルシュタフトが展開した。
前篇　ドイツ大土地所有の歴史的役割

に卓越した筆致で生き生きと描き出したプロイセン王国の歴史について、記述することを目的とした。この一連の描画は、一九九〇年のドイツ統一後を経て、一九九〇年代の無駄である。

現代史の連なる出来事と激動に思いを致すとき、次のような問題があたり、この地で指摘しておくことを、あるとする。こうした感情の持ち主に固有の精神的態度は、根本的な方策は、奈辺にあるのであろうか。他方、あえて誤解を恐れず、文化の価値のかけらもそこにはなんら認められぬ、言わば、全の「負のエールトス」にすぎないものなのか。しごく近い例とは言え、グラス（G. G. Grassei）が評価する「打ち解放した交わり」（Gesellschaftsschafft）を育んできたもまた。

東ドイツに住む平凡的な市民たちは、このわけではないだろうか。グラスは言う。東ドイツへ何度も行ったことがある。街頭や民主主義者と会う機会を猶々とした生活のテンポ、それに思い合う対話の時間の長さ、です。打ち解放した交わりがここから生まれました。
第三章 問題提起

の問題がなす潜むのであるまいか。ヴェーバーが、ドイツ社会主義的統一を果たした一八七一年後の第二帝政期の
東エルベベ Crimes における東エルベベ世界の現状のただなかに、ほほ一九九零年後における東エルベベ世界的
現しつつ一九九零年後における東エルベベ世界的再統一を実
現した一九九零年後における東エルベベ世界的
の問題性、今日、あらためて再現しているように思われる。ともあれ、ドイツベルシャフト生成史を精
査・追究することには、ヴェーバーのいうゆる「すぐれて東エルベベ的な心性」を歴史的文脈において説き明かすきわ
めて重要な意義がある、と言ってよいだろう。

第二、東エルベベにおける「大地産業、所有の問題、どのような実在をいかうどぁと持つことになる
体後、東エルベベ土地制度再建の実態問題を見据えているように思われる。この点について、ここでは、次の
史書記述行論を進めたい。かくて、わが国における比較史的な農業土地制度史研究は、寄生地主制の解体と農地
改革の推進という、当時の国民的課題を強く自覚しつつ、隆盛をきわめて一時代を築いた、一九四八年創立の「土地制
度史学会」となからず、「変革期における地域圏域」を共通論読として、「農業変革・土地変革の諸事象・地
定の」世界史的視野から一戦後、農地改革の性格一の総合把握を試みた学会、九五五年度大会が、その要著を解
メントに目される。歴史と実在の二つのモメントの交差」関を直視する強烈な問題意識が、当学会のなにより
関の時代が、すでに始まっていると見てよいのではないだろうか。「東エルベ、アグラール、シュミヒ－研究の現代的
意義とその重要性が、見直されてしかるべきであると思われる。
アムブロジス、ハーバード著、前掲『三言論』・金子邦子・馬場哲訳『三〇世紀ヨーロッパ社会経済史』名古屋大学出版会、一九九一年、三〇ページ。
一
旧東独農業史研究の意義

1 検討課題

旧西ドイツ「社会史」研究の主導的論者の一人であるコッカ（Gerhard Ritter）は、昭和七年に発表した論考において、「社会史」研究による近代の諸成果を批判的に分析し、この「マルクス主義的経済史」を「普通史的諸条件を利かせている。彼が列挙する重要作品群の著者は、以下の人物、すなわち、ミュラー、ハルニッシュ、ハイツ、シェムテル、ヘルンリング、ディルヴィッツ、および、ヘルガ・ネッサム（Helga Nussbaum）の研究に止まっている。
第三者 提起

コッカとファーそしてメラーによる第三者の研究史の整理を一瞥するだけで、このように、旧東独の農業史家は相当な多数に達することが知られる。旧東ドイツ農業史の研究動向を、その細部と支流をあえて切り捨てた上で、大霜を講じた考察がみえ、あらかじめ問題を限定することが、必須の前提となるべきではない。本節の検討課題は、まず第二に、旧東独の言わば「マルクス主義的農業史学」から、たとえば批判的ではある、今後継承されうるべき論点を、さしぐたってわたたくしの能力の及ぶ範囲内で明らかにし、ついて第二に、この旧東ドイツを含む欧米にあっての近現代ドイツ農業史、農村社会史研究の近年とみに目覚ましい精力的展開の主要な論点把握を目的しつつ、ひいては、日本人研究者としてこれと対決し、切り続け上、とくにあえる困難な課題に対処しておくことである。外国人研究者のすぐれた成果から虚構を学びながらも、そうした一方的な姿勢にとどまらず、国際的にあってもあえて一石を投げる相互交流の道を、ドイツ農業史農村社会史研究においても探し出せば、旧東独の消滅とともに、そこで唱和し続けられてきたマルクス主義的経済史農業史研究もまた、水泡に帰したのか否かという問題までで、まだに突きつけられる考察は、このような問題の全面点検を試みる上で、まんざら不要とも言えまい粗削りの Appears よりも、そもそも旧東独における学術全般の歩みは、研究の金点と主眼との推移を伴うおおよそ五つの時期に区分される。1、一九四五年一九五〇年。ドイツ史の否定的
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

側面、その悲惨さ（Gewerbe）の強調期，2. 一九五一年一九五六年。ドイツ労働者運動史研究への専一的集中期，3. 一九七一年一九七〇年。ドイツ労働者運動史研究への専一的集中期，4. 一九七一年一九七〇年。プロレタリア歴史理解の形成期。こことにおいて，それまでなんらかの一面の強調を伴わずに，なおかつ従来の選択的（Selektive）歴史理解は影を潜め，いわゆる「史的繼承論」（Historische Erbe）と比較的撫取的（Rezeptive）歴史理解が成立した。基本的には，この最終局面でのあのエルベ（Erbe）論争における一見，コンラート（Johannes Conrad）からウェーバーへと至るドイツ歴史学的視野の有効な潮流にあって堅持されていった。なお，これを約言すると，ドイツ大土地所有制の全面否認ではなく，それを構成するある一翼に対するウェーバーとコンラートのすぐれた高い肯定的評価という点の再認識の急労が多いと考えられる。
で検討することとしていた。その有効性をどのように証明する手続を踏まえて初めて、われわれは、ファーハとメラールによる二つの成果——「ベルリン学派」の成果——H・H・ミュラーを中心に行う——ファーアの評価に見えるように、東独農業史家全般に共通する特徴は、一言にして、「レーニンのいわゆる「プロイセン型の道」をめぐる「挑戦的な理論的枠組み内での緻密な実証研究」の積み重ねである。ベルリンのミュラー、ハニッシュ、クレムらの農業史家グループによって、「ベルリン学派」と呼ぶ。なろうに、ロストック大学を拠点とするハイツ、モルらのシューレが、この種の研究の中心的推進者と言ってよい。もとより、ここには、ラウジッヒ（Graßmann）を対象としたショウタの「農民化の過程」の階級差異と社会関係の変化についての準問題、ヴァイセール、ラッハらによる詳細な追究という、先のニーグループとは別個のそれぞれに貴重なニニー系列の地域史研究が含まれる。しかし、わたしたしは、ハニッシュの「農民層解剖」を対象とした論争は、おそらく、「ベルリン学派」の確立期に、注目すべき大著を世に問うた。ハニッシュの「資本主義的農業改革と産業革命の歴史」を、二九八四年、そして、モルによる「プロイセン型の道」とドイツのプランシュタット変革を、二九八八年、それである。前著は、「国民経済の拡大・深化
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

と産業革命の進展にとってのプロイセン農業改革の決定的重要性を、プランデンブルク州の実態に即して、後期封

建制から一八四八・四九年のブロジョア民主主義革命期までの時代について分析した重厚な力作であり、また、モル

の作品は、ドイツの議論を踏襲しながら、プロイセンの西部諸州をライン川左岸まで含めて、ブロジョアの農業進化

の「アメリカ型の道」ではなく、「プロイセン型の道の変極」として把握しうるという新しい分析である。著作公刊

後の両者の論争、プロイセンにおける封建制から資本主義への移行の観点をどこに置くかという、重要ながら、

ある意味では古い論点をめぐって争われた対決であり、過程の経済的性格に関するかぎり、プロイセンの論争は、ある種の

年頃を移行終了の時期と捉えようとする経済史上の研究の到達水準から見ると、この論争は、ある種の研究を必要とするか、

ハルニッシャが一八五〇年頃を経験したのがプロイセンの経済史研究の到達水準か、それとも、傾聴に値するであろうか。

一八四八年度のライン川左岸地方における定期小作（Sättig）を規定的なものではないかと見なす点などに示され

るハルニッシャのモル批判は、おそらく、傾聴に値するであろうか。ハルニッシャの立場は、わが国の比較経済史学の基礎

視点さながらに、すくれて原則的かつ堅固である。これに対して、モルは、ライン川左岸を問題に取り上げ、封建的負担の

西ドイツ全般に関する独自の「プロイセン型の道の主要二変極」説を展開するのである。両論争の決着について、

ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャ

のその後の沈黙は、ハルニッシャ説に軍配が上がったことを物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうではないのか。ハルニッシャの原論論的見地を尊重しつつも、モルの真骨頂を物語るのであろうか。それとも、そうのではない
第三章 問題提起

Variationの析出という重要な実証的検討課題が提起されたことを驚く。プロイセン型の道の諸地域史研究の一つである。こういった実証的な検討課題が提起されたことにより、全農用地の五五パーセントが借地だったのに対して、ドイツにおけるその比率は九一パーセントを数えるのみだったからである。とりわけ、プロイセンの東部諸州、ザクセン州を含むとメクレンブルクにおいては、相当数の農地が存在していたのである。この的確な指摘で始まる『ベルリン学派』の大家ミュラーの『借地人と農場支配人』は、東部ドイツ農業にあっての『土地所有と経営の分離』の具体相を、豊富な未公開史料を駆使して解明した注目すべき書である。それは、先述の本書第一章、三、一で見たとおり、一九二二年四月九日から一〇までの間、ベルリン郊外のゴーセンにおいて、旧東西両ドイツの名だたる農業史家が会合して『ベルリン学派』の席上報告された。以下では、ミュラーによって初めて発掘された興味深い新事実のうちのいくつかを、御料地借地人（Domänenmäzten）に関する一九九年論文の成果を併せて加味しながら、本節の行論にとって必要なかぎりを紹介してみたい。
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

なる経験をも併せ持つ。この所領経営において彼は、生産の集約化と収益の増大に成功する。傑出した農場管理人

としての練腕をふるう。世紀転換期の農業経済学の頂点に立ったと称されるエルンボは、同時日に、当時の貴族の大所

領における所有と経営の分離を実践する農業経営者の一面を兼ね備えていたのである。

一八七〇年代以降の農業クリーチェに対する一つの解答として示されるその克服策が、エルンボの場合は、地主的三

分解制推奨論」としても言うべき施策にかかわらなかった点に、まったくも、特に着眼したいと思う。言うのは、こ

均的効率には、自己経営を行う大土地所有者を断然凌駕している。実務的にも理論上もすくれた知識を持ち、勤勉かつ

意志堅固なのだ。資本力だけでいささか見劣りするペヒターに「土地取得の回避」を保証する重要な役割が、エルン

ボの提案にみじかくも明示されているとおり、エルンボの立場は、徹底的に大土地所有者寄りである。それゆえ、

この議論は、「借地人にによる、地主のある役をあらゆるリスクのペヒターへの転嫁」にほかならない。

の『三分解制の勧め』と言ってよいのであるが、なお以下の二点に注意する必要がある。経営リスクのペヒター

出によって、地主が実現しうること、それは、「経営のありとあらゆるリスクのペヒターへの転嫁」にほかならな

いからである。

このように、エルンボは、プロイセン東部の大農場における借地制の相当程度の進展という事実を前提に置きながら

説いたウェーバーとのエルンボの違いが指摘されなければならない。おそらくの前著で詳述したとおり、ウェーバー

が理解する「所有と経営の分離」の利点は、あくまで、大世襲財産における「地主と借地農業者」とによる「共通の
ビジネスの円滑な展開を図るため、〈一人の力〉に頼るのか、〈二つの力〉に頼るのか、という問いに接する。この二つの力とは、一方向の力で事態を一手に取るのではなく、複数の方向からの支援を図ると、問題解決の進展がより早くなる。したがって、〈二つの力〉に頼るのではなく、〈一つの力〉に頼る方が有効である。
このように、当該の所領にあっては、最初のヘッターであるナネットズィックスやまた一種の地主へと変貌を遂げ、又借り人が実際の経営を担当している。ここでは、第二のヘッターが管掌する労働過程の分析が欠落するものの、該農場に現している制度を、イギリス的三分割制の要記をもじり、Eigentümlicher Pächter Unterpächter Landarbeiterの四者により構成される「ドイツ的四分割制」（The German Four Parts System）として記されるとも言え、不適切ではないであろう。

例1、甜菜糖工場の農場賃借り。
この例では、例1、甜菜糖工場の農場賃借り、
株式会社形態を取るグラウツィヒ（Gräflich）工場は、一つの典型であろう。

ドレンデン銀行頭取モースラー（Moser）やハンブルクの銀行家ロートシュルト（Rotshchild）らの錨鉄たる顔ぶれが経営陣にそう、ザクセン州在の工場は、ヴェルトハイム（W.H. von Weitheim）男爵所有の二つつの騎士農場（合計三五一・五ヘクタール）を借りて、一九一二年には一六〇、四四七マルク、そして、一九一八年は一七八三〇マルクという。当時としては群を抜く高額借地料を納めた。「集約的農業経営の大学」にとさえ言われる甜菜栽培が生み出す工場経営と農耕との結合は、ミュラーによれば、一箇の「模範経営」にほかならなかったのである。こうした工場経営への農地農場の貸し出し、の事例は、ザクセン州を中心にしつつ、シュレージェンやポーツェン等の他の東部諸州にも相当広範に見られた事実を、併せて記しておこう。

例2、「農工複合体」の形成。
第三章 問題提起

時に、二つの御料地の借用人は兼ねたからである。そのかぎりにおいて、御料地上級管理人（Oberamtmann）の肩書きを有する彼は、御料地借用人の（Oberamtmandant）の一面をも併せ持っていた。御料地の所有者は、ブラウヴィッツ（四・三ヘクタール）とランゲンボーゲン（五・七・八ヘクタール）であるが、ヴェンツェル家は、五代目の没した一九〇七年の翌年から一九二六年までに、この二農場の借用料として、年額三二・七〇〇ないし四〇・六〇マルクをプロイセン国庫に納めた。そして、ランゲンボーゲンには、カールの父より一九四八年に建てられた甜菜糖工場が存在していた。カールは、この工場を一八八年拡張し近代化する。それゆえ、御料地の借用人は、農場の管理を委ねたものである。ヴェンツェル家の農業経営は、農場取得・借用地の相続を通じて驚異的な成長を遂げる。とりわけ、カールの跡を襲った六代目の指揮下に入りた二次世界大戦後における最大の有機的農場複合体の一つ、その後の威容を誇るに至るのである。

「農業のクルッペ」あるいは「砂糖王」とも称された六代目は、農耕・畜産・種苗はともに、様々な関連工場、工場・製材所等の多岐にわたる一連の企業をも手がけて、農業と工業の一大複合体を築き上げた。一九三三年に「ドイツ砂糖信用銀行」を創設し、ブリュッセル砂糖協定（一九三〇年）やロンドンの「国際砂糖協議会」に際しては、ドイツ全体の利益を代表して熱弁をふるった六代目は、間違いなく、ヨーロッパ最大の農業企業家の一人に数えられる。彼の企業は、垂直の統合（垂直統合）を実現した成功例の一つであった。
# 表3-1 Tunderslebenの1900年度決算

<table>
<thead>
<tr>
<th>収入</th>
<th>358,506.47マルク</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>支出</td>
<td>312,820.34</td>
</tr>
<tr>
<td>残額</td>
<td>45,686.13</td>
</tr>
<tr>
<td>a 借地料</td>
<td>22,737.95</td>
</tr>
<tr>
<td>b 立替金返済</td>
<td>9,000</td>
</tr>
<tr>
<td>c 純収益</td>
<td>13,948.18</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）H.-H. Müller, Pächtner, S. 26, より作成。

前の農業答えの歴史的役割

ヴェンツェルの農工組合体を分析したミュラーは、農業を締め括るにあたり、甜菜糖工場ならびにこれを伴わせる農業体、効果的な恐慌克服策の基本にはかならないとする。彼は、一九世紀末から二〇世紀初頭に至る砂糖恐慌も、一生产と収益性との非本質的な被害をもたらしたにすぎないと断じるのであるが、この見解は、当該時期におけるドイツ農業をブルーベ（H. Pfeile）やモーゼル（H. Moosbrugger）らの見解に、もっぱら「構造的危機」のもとにあったと捉えるのか。それとも、シッサー（H. Schäfer）が示唆する「根本的変化」として把握するのかという研究史の対立に、その後の立場を支持する見地から有力な一石を投じたもの、と理解してさしつかえないであろう。

事例5、栄料地借地人の存在形態

ヴェンツェル同様、栄料地上級管理人の肩書を担うシュレーダー（Alfred Schröder）は、ザクセンの三つの栄料地アルフレンスレーヴェン（Klein Rottenbüren）、そして、トゥンデルスレーヴェン（Tundersleben）の借地人である。最も聡明な甜菜栽培農民（Rottenbauer）の一人である彼は、一九〇〇年度の決算に計五〇八・五へクタールの農地を耕したが、その三九パーセント（三九へクタール）が甜菜作用であった。シュレーダーが算めた借地料のヘクタール当たり単価は、当時のプロイセンにおける最高水準に達していたが、彼は、それでもなお、当該の一農場のみ
<table>
<thead>
<tr>
<th>表 3-2 シュメルツァーの土地所有</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Domäne Sachsendorf</td>
</tr>
<tr>
<td>Rittergut Tucheband mit Hackenow</td>
</tr>
<tr>
<td>Rittergut Rathstock</td>
</tr>
<tr>
<td>Lehngut Hattenow</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）ミュラー博士による1992年9月25日付の筆者宛て信書に基づいて作成。この信書は、テキストでは不明である面積規模に関する筆者の1992年8月31日付の問い合わせに対するミュラー博士の回答である。
役割に注目して、その周辺に散在する中小諸経営に対する教育的効果を認め、ウェーバーの「世襲財産論」が含む枢要な論点と一脈相通じる認識が、ミュラーにはある。世襲財産であることは否とを問わず、ドイツの一部の大農場が、一九世紀末以降にあって、それゆえ、古いグーツヘルシャフトの近代的アウフヘーベンを担う「農民解放」の洗礼を受けた後の時期に、プロイセンにおける資本主義的農業推進の点に多分からず寄与した一定の歴史的役割を、大土地所有の近代化促進の効用」と見なすことはできないであろう。この点を間違いないと示唆する言わば「M・ウェーバー『H・H・ミュラー的視点』の意味を吟味する必要が、いまここに提起されてしかるべきであると思われる。

事例77、「下層民企業家」の実例。イタリアにおける「世襲隷民の零細地保有農（Kleinleute）」の息子として出生したコッペ（Johann Gottlieb Koelle）は、前に事例で見たシュメルツァーが活躍した同一オーデルブルク地方に住む二つの御料地ヴォルプ（Wolpe）とニーデルツェ（Niendorf）とのベヒターであった。ミュラーは、コッペを、「一九世紀中葉頃の最も傑出した農業家の一人」に数えている。わたしたちは、ここでトリオイエによる次の範疇規定を若干修正しておきたい。すなわち、トリオイエは、「下層民企業家」（Einzelunternehmer aus den Landarmen und Landlosen）の実例にほかならないと、したがって、コッペ、シュメルツァー、そして、シュレーダーらの御料地借地人が締じて、経済的進歩の担い手であるという彼らは、また、実務の合同を経て、研修旅行にしばしば出かける新入行にしっかり覚えて、新しい知識の摑取にも努めた。勉学の行き先として彼らがイギリスを選ぶのが多かったことは、興味深い事実である。
イギリス的輪郭（Die englische Wirtschaftsgeschichte）の近代的合理性を充分理解していたと言っている。

影響力に富む社会階層としての御料地借地人自身が、多くの若き農業家にとって、さながら「農業の大学」のものであった。コッペはコッペで、ティア（Albrecht Thiæ）のメーレン（Möhlen）農場内の農業アカデミーにおいて教鞭を取る経験を積んでいた。一八三七年には、一八四六年までの二年間、コッペを師と仰いで、「ポーダルシュヴィンツィング（Friedrich von Bodenschatz）が一八四九年から一八五一年までの三年間、コッペを師と仰いで、合理的農業経営の実務を学んだ」。その場を建設する。工場の炭焼生産額は、一八五六年を迎えると、「ニーデン（Diezheim）に建てられた」とでも言うべきものであった。

この借地人階層と国との関係は、コッペの言う「道義的信頼」によって固く結ばれていた。国有地の経済的効率向上の借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされていた。表向きの借地契約期間は一八八年であったが、ペヒターは、借地料の軽微な上昇を必要とされて
誤りではないと考えたい。ともあれ、御料地借地人職のうちの無視すべきかざる部分が、一世纪有余もののときを刻むのが指摘されるべきならばならぬ。例にすぎぬが、コッペは、御料地借地人階層の同族性（Domänenverwandtschaft）が指摘されなければならない。以上のような関連して、さらに、【御料地借地人階層の同族性（Domänenverwandtschaft）】が指摘されなければならぬ。例にすぎぬが、コッペは、御料地借地人階層の同族性（Domänenverwandtschaft）が指摘されなければならぬ。例にすぎぬが、コッペは、御料地借地人階層の同族性（Domänenverwandtschaft）が指摘されなければならぬ。例にすぎぬが、コッペは、御料地借地人階層の同族性（Domänenverwandtschaft）が指摘されなければならぬ。
最後に、現在わたたくしが暖めている次の若干の問題を提示することにより、旧東独における農業史研究の成果に関
する考察の結論にかかわる。

世襲財産制を含む農業・土地制度史研究のドイツ歴史学派の中の双璧と言えるコンラートとウェーバーが、ニュア
ンスの相違こそあれ、大世襲財産制に端的に象徴される一部の大土地所有の肯定的意義をすくれて高く評価しなが
ら、ドイツ世襲財産制の"イギリス的世襲財産制度への接近"を提言する点で、巨大土地所有の有効性を充分するほ
ど認識し続けていたことは、意外にも知られていない。コンラートとウェーバーが、ともに、巨大土地所有の有害性を
否定したわけでも全くないのである。これに対して、研究室の現状はどうか。わたたくしがつとに批判的に言及したモムセン
(Wolfgang I. Mommsen)と「ベルリン会議」の席上、片や「2つの農業の支配エリート」層の存在を言い、他方「農場所有者にあっての官僚の
要求思考の支配化と敢然たる資本家の経営家精神の欠如」と語るとき、そこには、グーテベルツァーなないしはユンカ
ーの全体を、たとえなんらかの社会経済的性質の相違があったにしてもそれを等閑に付して、完全に丸ごと把捉しよ
うとする安易な学問的態度が見え隠れしていたように思われる。このように、学問の主流の見解は、コンラートとウェーバーをどう見るのかという点に関するかぎり、プロイセン＝ドイツ
の大土地所有の全部の一括把握とそれに対する厳格な全面的批判の姿勢との一点において、基本的に一致している
と言われる。単純明解ながら、ある種の浅薄さを免れぬこのような考え方をもってしては、東独歴史学が到達した
地平におけるある支配的搾取者諸階級の肯定的遺産に、ひいては、言わば「東エルベのエルベ」(Erbe der
Elbe)へ
公平な視野に収めた経済史研究を行うことはとうてい不可能である、とわたたくしは考える。以下、若干の仮説的論を展開して本節の結びとする。

かつて、ファハは、一九六〇年代以来の西ドイツの「社会史」研究を舌鋒鋭く指弾して次のように主張した。「ヴェルナー」を打倒するといわゆる「新正統派学説」における「近代農村史の系統的検証」の一つである「低いプライオリテイシー」は、疑問である。そのために、西ドイツの「社会史」研究が共有する次の一理解、すなわち、農民層全体を静態的かつ固定的に把握する「単一的ドイツ農民層概念」もしくは「一つだけのドイツ農民層に関する全体概念」は、この際、「解体」あるいは「破壊」されているように如くはない。

ファハは、「社会史」批判に学びながら、わかち、次のように考えたい。旧西独の「社会史」ののみならず、新東ドイツの「農業史」研究が有する次の一理解、すなわち、農民層全体を静態的かつ固定的に把握する「単一的ドイツ農民層概念」もしくは「一つだけのドイツ農民層に関する全体概念」は、この際、「解体・破壊」する学者的意義が、いま、喫緊の課題となるざるをえないであろう。
この点で、地道なアルヒーフ・アルバートによって築かれたミュラーの最新の労作は、旧東ドイツ農業史研究が生み出した最高成果の一つとして、ひととき恐れを放つ業績だったように思われる。おそらく、ミュラー自身にもない理論的な観察の卓越した有効性を確証してあろうが、彼の実証は、ヴェーラーが世襲財産論において展開したあの政策においても無視できるものである。わたくしは「ベルリン学派」の第一人者に拝げて、高く評価したい。とある。西ドイツ「社会史」の守護神ヴェーラーの研究の近百年の動向を無視してよろこばずほどの、われわれの視角からすれば、ヴェーラーの言う「西洋の近代史の唯一無比性」を組織して、「近代農業史」の未知の国」の開拓を提唱するならば、「貴族社会史」（Adelsgesellschaft）の ENVIRONMENT という何れかの広範な内容により模倣されるに足るる生存を価値ある批判と言えるのか。それは、「千年もの永遠にわたる貴族支配の永続性」、ヴェーラーのこの問題提起は、まことに気宇壯大であり、示唆と指摘に富む。これに触発されつつ、わたくしは、
しあたり次の二つの論点を提示しておいた。
第一に、マッテルの言う「貴族世界のエルベ」とは、後の
論争で問題になった「支配的相取者諸階級の肯定的エルベ」の重要な一環を成すものである。では、オペルシャ
フからユンカースームを経てLPGへと至る東エルベの近現代史的展開は、つまり、これを約するに
「モノスマルツィのエルベ」を、われわれは、「いかなるものとして理解すればよいのか。
いま、わたたくし自身の観点から言
ね「貴族的生活様式の市民各層による受容」と彼が把握するかぎりでの「バージョンのユンカースーム」。

第二に、本書前篇のメインテーマの一つである「ウェーバーアミュール的視点」は、上述の事柄に鑑みて、はたし
て、どのような意味を持つのか。すなわち、ここである。「知性と資力を兼ね備えた農業家」の『基礎的準備作業の
有制』こそが、『東エルベのエルベ』の最も本質的な「契機」にかなならぬのではないのか。それならばかぎりでの「合理的な土地所有制」の重要性を再検証することに
LPG解体後
Agrarverfassung. Agrargeschichte. J. Kocka, Sozialgeschichte, S. 395-422.

Ebenda, S. 405.


Locating Peasants and Lords in Modern German Historiography, Introduction.


Ebenda, S. 23.

Ebenda, S. 22.

Ebenda, S. 24.

Ebenda, S. 22.

Volkmer Klemm (federf. Autor), Agrargeschichte. Von den bürgerlichen Agrarreformen zur sozialistischen Land...


1990, Universitats-Rostock, pp. 7-7.

第三章 問題提起

加藤房雄『ドイツ世襲財産』-六ページ-について

藤原氏による著書『ドイツ世襲財産』に対する書評中の


31) Vgl. ders., Domanenpachter, S. 9-12.


33) Ebenda, S. 12.

34) Ebenda, S. 11.


36) Ebenda, S. 8.


38) Ebenda, S. 5.


40) Ebenda, S. 3.

41) Ebenda, S. 2.

42) Ebenda, S. 1.

43) Ebenda, S. 0.

44) Ebenda, S. 16.

45) Ebenda, S. 14-16.

46) Ebenda, S. 15.

47) Ebenda, S. 10.


49) Ebenda, S. 8.

50) Ebenda, S. 7.


52) Ebenda, S. 5.


54) Ebenda, S. 3.


56) Ebenda, S. 1.

57) Ebenda, S. 0.
第三章 問題提起

1課

ウェーバーの大作「世襲財産論」を検討した論考としては、「よく知られているとおり、すでに、住谷一彦氏と山口
和男氏の先駆的な労作が世に問われている。いささか屋上屋を架す趣がないけれどもなかったが、わた
くしもまた、ウェーバーの「世襲財産論」は、リスト、マックス・ウェーバーによる大土地所有のとら
まえ方の小世襲財産の関係を論じている。一方で、小世襲財産の性格を示す方法論的な観点から見た応
用的、経済的相違が示されており、その重要性が示されている。すなわち、著者にあつての弾力性・適応
力の増進点で、ウェーバーが示すべき境界を超えるほどの実質的意義がある。
もとより、わたくしには、ユンカースの肩を持つような主観的意図はなく、プロセス弁を使っている。ポルシェス

「プロセス弁弁護しよという気もさらさら。それでも逆に、ヴェーラーが

指摘するところにより、ダーティーマンは前工業化の新封建支配者や、なかんずく権威的な国家指導部のような前工業的

エリートが、工業化を達成した社会になお与え続けた『重い歴史的責任の長い一覧表』を、わたくしとしては充分

に意識している。そして、ユンカースの歴史的罪過を厳しく糾弾し、その全面的な有罪論の発地に立つかぎりにお

なわゆる『民主的户籍改革』の実践的価値を強く自覚するドイツの場合には、それには、一つのアクターエル的な要

である。メクレンブルク・イーテーのグーツヘルシャフト論は、この点で、事態適切的な関連に立つものであった。

在野において、首尾一貫して堅持され続けた基礎視角の一つなのであった。

講でさえあったと言えば、ニヒトヴァイス（Otto von Niethammer）やハイツの農業史研究は、一九四五年の大土

地所有権の歴史的根拠を明らかにし、その直接的過去を解釈するためという現実の意義を担った。農民解放を重視

する彼らのメクレンブルク・イーテーのグーツヘルシャフト論は、この点で、事態適切的な関連に立つものであった。

なお、わたしたは、前節までの論述との若干の重複を恐れず、以下の三項目を指摘することによって、この問題に

提起できたいと思える。第一に、ローゼンベルク(Hans Rosenmengel)の述べる、東ドイツの農民解放、特に南

ドイツでは、ユンカース一定程度残存する地方領所有者層、旧東ドイツにおいて、私的大土地所有復活の動きが一

部
第三章 問題提起

で見られたこと、そして、第三に「重い歴史的負荷の長い一覧表」の作者、ウェーラーその人が、このたびは一転して、近代貴族史のテラ・インコグニターの開拓を呼びかけたこと、以上である。

第一章においては、さしあた∕し、一九四五五年以降のドイツ現代史を物ししたグローザー（Alfred Grosz）の言うとこころを聴こう。すなわち、一た年下半年貴族は、家系から重じる気風や後継者を選ぶ際に門閥を重視する傾向のおかげで、一九五〇年代の復古調にうまく乗り、五年半に外交官の七百セントを再び貴族が占めるようになっている。それに加えて、さらに、前段（本書 四・四ページ）においてすでに述べた理由で、外交の専門家であったケン・アーレンベルク公爵令嬢ロザ・ゾフィーの父君カルル・トーデール・フォン・ウント・ツー・グッテンベルク男爵はこの好例で、六六年から六九年まで内閣官房政務次官を勤め、外交炯のタカ派の専門家であった。こういう土地所有の存続は、少なくとも、その可能性の法的根拠があり、農業経営は、とりわけ第一次世界大戦後に驚異的な飛躍を示し、それは、合計ニーヴ旧農場によって構成される

レーテ地に所在する約一〇〇ヘクタール規模の大農場の地主だったヴェンツェルは、同時に、二重の意味でのベヒターア法を兼ねていた。ヴェンツェルは、一九〇八年从一九〇六年までのあいだに、年二二七〇〇ないし四〇六〇マルクという相当な高額借地料をブロイセン国庫に納めた。現在、上級管理人の肩書きを持つヴェンツェルの指揮のもと、農業経営は、とりわけ第一次世界大戦後に驚異的な飛躍を示し、それは、合計ニーヴ旧農場によって構成される
約一万ヘクタール規模の「ドイツにおける最大の有機的農場複合体」の一端を築いたのである。一九四五年の東独地域改革が、農工複合体のこのドイツの形態をも収用の対象としたことは言うまでもない。しかし、「農業のクルツェ」とあるのは「砂糖王」とまで激賞された「ペヒター出身の大農業家ヴェンツェルの私的大地所有者である」。一九九〇年のドイツ新統一後、復活を遂げたことが報道されている。

さて、ローゼンベルクは、一九五八年に、次のような感想を述べていた。「西の考え方ドイツが再統一される場合、東エルベの農業所有者階級が再びよみがえるのが基本的同感であるから、誰が本当にまじめに信じることができるかだ。」

第三、この点も前節ですぐに述べたことだが、「一九八八～九九年の貴族史会議の主宰者ヴェークの近視が、注目値しよう。すなわち、ヨーロッパでは千年間わたる貴族支配の永続性は、ヴェーパーの言う「西の世界史の唯一無比性」の特殊条件の一つであり、それはおそらく、世界全体を見渡しても、例外的に、日本資本とみるか、日本資本より弱かった社会規模上の機能の輪郭が現在もなお強力を喪失していない事態は、「全ヨーロッパの現象」と言うべきなのである。そして、この「ノブレス・オブリージュ」あるいは「貴族世界の遺産」は、そもそもない。はたして、そ
それは、今日でもなおかつ広範な人々によって模倣される足として価値ある代物なのであろうか。また、「千年も
の永きにわたるエリート支配の、まだ一般には知られていない最終段階」は、いったい、いかなる様相を呈するもの
なのか、と。
ここで、次のようなかねてからの疑念を提示したい。最初に指摘したとおり、東ベルの大地所有制を専制的・
権威的なものであると論難し、その近現代史的展開を否定的に捉える見地と、「定言的にアンティ・グループルー
の立場を堅持しつつ、グループルーの全面的な有害論に捉える見地」と、それらの見地と学説を並立させて、
言わば三位一体の関係に立っている。しかし、誤解を恐れずにあえて言うならば、この三位一体は、あたかも批判を許
さぬ至高的教義であるかのように、非の打ち所が全くない完全無欠のものなのだろうか。ここには、「なんらかの観点
の欠落は、いささかも見られないのか。なぜして、イリーゴスの言う『視角の体系的移行』は、ことこの
問題に関するかぎり、全然必要ないのであるよう。カーキのいわゆる『特殊東ベルの発展』の本質的契機を形作
った大地所有制の歴史的過渡について、わ
れわれは、いままで、ハルニッシュやコッカから、さらには、大塚史学ならびにマルクス主義史学からも、折にふれ
て、きわめて多くのことを教えられ、また、聞かされてきた。各人各様のユンカー批判の厳しい視角には、基本的に、
ジャコバン・ルソーのような近代の個人の確立に近代市民社会の要諦に関わるローマの言葉としての枢要な意味が込めら
されていた。と言ってよいだろう。しかし、ここで、あえて歴史的功罪のうちの必ずしも罪とも断言できない方の側面
にも照を当てて、最近の研究史を少し回顧してみる作業も、あからじめで、あるまい。
リードを誤解を避けるために、なお、以下のような点を付言しておこう。わたしが、なおも、貴族的でヒュラルヒッ
シュなエリート思想に与して、古風なものへの郷愁を蘇らせようとするか、とき反動的な『農業ロマン主義的イデオ
ロギーの立場を、先の「ルーサーとジャパン」的な視点に対置させようと意図しているわけではない。そうではな
くて、ある意味では「社会的成層システムの多様性の構造」や「社会的な流動性の存否」による複数の問題点である
一つの多彩な表現でローゼンベルクが言い表そうとした観点を、ドイツの大土地所有者階層の理解についても、考
慮してみるべき必要性を提起したいと考えているだけである。

2 グーテフ・ルフ層階層の社会経済的分化

さて、グーテフ・ルフ層階層の発展経路の多様性は、領主層の所有地規模別分化を伴わずに実はおかなかったのである
か、この点に関わって、カールは、グーテフ層階層の実態を分析したハルニックシュとベルク（Willi Alfred Boeckle）
アラン・タ・コンテンツの地域史研究に注目している。三者は、それぞれ、ブランデンブルクのウッ
シュレーディヒ・ホルシュタインにあたって、アルニム家に匹敵するランツァウ（von Rentzau）やブロックドルフ
（von Brockdorff）の当家のみならず、その分家さえもが大所領を構えたのであった。

当該の分家は、ランデスベルク
の成り行きをも直接的関係を保ち続けた。農民のなかで、グーテフ層と馬が合い親しくつきあえた者のが一番幸せな
生活を送ることができたのである。と。この場合、農民の状態の改善がグーテフ層の個人的な好みに左右されたこと

前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割
第三章 問題提起

は、もとより事実である。だが、カースは、その点を認めると大行進を進め、大きなバル
ールが農業・土地改革に対して積極的かつ肯定的な態度を示したことだけは言い出
かに小さくしてはならないうちと結論するのであ
る。この点に関連することがただだが、オーベル・ラウツェッツでは、上級貴族（シュタニングスヘル）の領地における農民権
取は、普通の騎士農場に比べればかなりゆるやかな程度にすぎなかったし、また、シューレスウィヒ・ホルシュタン
のプレーン（プレー）兵爵領にあっては、ヘルツォーゲ（フューロー）が改革の先頭に立ちさえしたのであ
る。アルノム伯爵家のドイツェンブルク所領を仔细に分析したハルニッシュの一九六八年刊の劳作から、以下の事実が
判明する。地主農場（フォルツェ）と農民村（ゲンデルト）との大複合体を成した、総面積二万ヘクタールを超える
壮麗な所領においては、一八四年以降一五五三年までのあいだに、農民解放過程の一環としての調整（メディア
での一七一四パーセントに当たる九六モルゲンの共同地が存在した。地主による土地切り取りは、約一・九〇ヘクタール
モルゲンに達したが、そのうちの五四四モルゲンが共同地だった。したがって、この農民村落には、四三三モルゲン
すなわち一〇〇ヘクタール以上の相当な大きさのアルメンデが、農民解放後にみなお、農民村の手許に残ったのであ
る。有力な農民は、調整による土地喪失を共同地分割によって埋め合わせることができたというテーズを、ハルニッ
シュは、共同地を有する農民村数の少なさゆえに、あっさり否定するのであるが、しかし、ヴィーハンスドルフの事例は、上述のテーズとは違う別の観点から見れば、重要な意味を持つのではないだろうか。なぜなら、東部
ドイツ大土地所有の歴史的役割

前篇

イタリアの農村村落において、農民共同体の関係が、農民解放後もなお一定程度残存した事実があるからである。これは、ウンガールが指摘する次のような論点に直結する重大な問題を孕むものである。すなわち、「地方のゲイリャードが」(1)利用団体として、全部か一部のかの違いを問わず存続していたあいだは、かつて、農民の協力関係が維持されていたが、その後、それが崩れ、年代によって組織の名が見えないが、日常生活を包括的・組織的・地方で、あらたな役割を果たしたかったのである。これに由来して、ボイツェンの大ゲイリャードが、農民からの土地奪取に血道を上げたわけでは決してないところ。もちろん、鷲揚な態度を示したことのは、明らかであろう。ハルニッシュは、一連の大農場を擁するこうした大規模領の特徴を、一農場しか持たぬ通例的なエンカーター大土地所有の性格と同列に論じることはできない、と警告を発す所である。また、大所領の固有の特色という論点との関連で、カーカー・グレーグの「大農場と小農場の対比論」、そして、ハルニシュの「大所領とエンカート所有地の対照論」は、ともに、ウェーバーの「世襲財産論」における「大世襲財産と小世襲財産の類型的相異論」を髄髄とさせながら、中小農民経営にとっての模範提示という意味での、領民への大世襲財産の教育的効用とその社会政策的意義（たたき込みの表現で言い換えると、一部の地主の大土地所有の近隣ゲイリャードとの協調的・非敵對的関係、ならばに、その育成的、非社会反動的関与を力説するとき、わたる）は、これに反動的な農業政策のロマン主義者の夢想にすぎぬとして、ただに退けるだけの勇気を持ちえない。ウェーバーは、他面において、大世襲財産の経済的合理主義、
第三章 問題提起

3 「大世襲財産」の実態

ウェーバーが忌避する「月並な田舎・火酒男爵」すなわち通例的な「地方ユンカーや」に比して、時空両面ではるかに気象に大パースペクティヴを誇る「大世襲財産」の実態を、少しつくづくに検討しておこう。さて、ボイツェンブルクが位置したウッカーマルクにおける大世襲財産の平和的成立と拡張というコルト（Kurt Foerster）のテーゼは、

この所領における農民の共同体がばらばらに分かれるような社会的構造は、調整に至るまでほぼ完全に一様であった。封建的な上級所有権が、土地の自由な売却と農民層の分解を阻止したからである。村落ごとの数量的違いはあれ、あらゆる農民村落に、ほとんど同じ規模の農民地が比較的豊かに存在し、その規模二一、九二へクタールを数え、一七三三年の後、一八五五年に再び家族世襲財産化された。ウェーバーのいわゆる「大世襲財産」の一つである。

この所領における農民経営の全体構造は、土地の自由な売却と農民層の分解を阻止したからである。村落ごとの数量的違いはあれ、あらゆる農民村落に、ほとんど同じ規模の農民地が比較的豊かに存在し、その規模二一、九二へクタールを数え、一七三三年の後、一八五五年に再び家族世襲財産化された。ウェーバーのいわゆる「大世襲財産」の一つである。
<table>
<thead>
<tr>
<th>農村村落</th>
<th>西暦年</th>
<th>0 - 2</th>
<th>2 - 5</th>
<th>5 - 10</th>
<th>10 - 20</th>
<th>20 - 50</th>
<th>50 - 100</th>
<th>100 - 200ha</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Beenz</td>
<td>1841</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Berkholz</td>
<td>1844</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Hardenbeck</td>
<td>1816</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Haßleben</td>
<td>1787</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Klauslagen</td>
<td>1831</td>
<td>3</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Rosenow</td>
<td>1845</td>
<td>7</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Thomsdorf</td>
<td>1785</td>
<td>13(3)</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Warthe</td>
<td>1842</td>
<td>6</td>
<td></td>
<td>4</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Wichmannsdorf</td>
<td>1831</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>23</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

(注) 1) すべて、Pfarrerhauの農地を一つずつ含む。
2) これは、HerrschafftのTagelöhrer。
3) 100ヘクタール以上の農村は、本表には示されていない。だが、ハルニッシュは、調整以前のその存在を二つと見なしている。Vgl. H. Harnisch, Boitzenburg, S. 257.
(出典) Ebenda, S. 255, より作成。Beenzの空白は、原典のまま。
表 3－4 1866年の農民経営の分化状況

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>0－2</th>
<th>2－5</th>
<th>5－10</th>
<th>10－20</th>
<th>20－50</th>
<th>50－100</th>
<th>100－200ha</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Beenz</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>6</td>
<td>4</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>Berkholz</td>
<td>5</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>9</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>Hardenbeck</td>
<td>28</td>
<td>2</td>
<td>7</td>
<td>1</td>
<td>11</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>Haßleben</td>
<td>7</td>
<td>-</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>12</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>Klaushagen</td>
<td>7</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>5</td>
<td>10^1</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>Rosenow</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>Thomsdorf</td>
<td>15</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>7</td>
<td>6^1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>Warthe</td>
<td>20</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>6^1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>Wichmannsdorf</td>
<td>17</td>
<td>1</td>
<td>-</td>
<td>5</td>
<td>20</td>
<td>3^1</td>
<td>-</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（註）1 すべて、Pfarrbauerの農地を一つずつ含む。
（出典）H. Harnisch, Boitzenburg, S. 256, より作成。
したがって、上述の事態は、やはり、農民層のプロイセン型両極分解を基本線とする過程以外のものである。ニッシュは、他の眼にも明らかに、このきわめて急速な農民層のプロイセン型両極分解をめぐっては、それゆえ、一八四四年後の時点に置く。近代の東部ドイツにおける農民層のプロイセン型両極分解の起点を、調整に、それゆえ、一八四四年後の主として、レーニン的なその理論上の見地が、様々な探求に導き、基本的に共通している。一方におけるエンカーレ階級および大農層の少数派と、他方での農村貧民層の一団との両極分解として捉える点で、基本的に共通している。一八世紀中は、農民と貧民の通婚も、なお少なかったが、一九世紀以降、村落貧民階層と大農層との階級的隔絶が進み、大農は、ユニカーとの利害共同関係を強めて行った。封建制度下の地主と農民の階級対立は、ユニカー型資本主義において、大農がユニカーにおけるユニカーと大農との『搾取者の階級連帯』に取ってかわった。

ブルジョワの大農の成立については、なお、以下的事実も重要である。八四〇年頃とされるのが、ポイシェンブルクでの拡張は、六〇年代以降も続く。グノモルゲンのシャルロッテンタール（Charlottenburg）と九〇ハモルゲンだったマティルデンホーフ（Matthiaskanal）が、それぞれである。先述のレポーテ・クーロンなどさしきめ、競争戦でいささか頑張りすぎの気味があったグロース＝パウアーの典型で、トムスドルフ村において一八六六年に
### 表 3-5 大ユンカーの農場貸出

<table>
<thead>
<tr>
<th>貸出料収入</th>
<th>1800年</th>
<th>1847年</th>
<th>1877年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Fürstenau</td>
<td>1,150</td>
<td>2,100</td>
<td>5,700</td>
</tr>
<tr>
<td>Boisterfelde</td>
<td>750</td>
<td>1,350</td>
<td>3,200</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）H. Harnisch, Boitzenburg, S. 251, より作成。
前編  ドイツ大土地所有の歴史的役割

表3-6 ポイツェンブルクの貸出一覧表

<table>
<thead>
<tr>
<th>名称</th>
<th>土地の性格</th>
<th>規模ha</th>
<th>年収入1919-20年</th>
<th>年収入1920-21年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Arnimshain</td>
<td>Rittergut</td>
<td>469</td>
<td>19,000</td>
<td>19,000</td>
</tr>
<tr>
<td>Brödün</td>
<td>Rittergut</td>
<td>251</td>
<td>8,000</td>
<td>8,000</td>
</tr>
<tr>
<td>Charlottenthal</td>
<td></td>
<td>210</td>
<td>3,040</td>
<td>3,040</td>
</tr>
<tr>
<td>Funkenhagen</td>
<td>Rittergut</td>
<td>401</td>
<td>13,200</td>
<td>13,200</td>
</tr>
<tr>
<td>Krewitz</td>
<td>Rittergut</td>
<td>656</td>
<td>25,000</td>
<td>25,000</td>
</tr>
<tr>
<td>Lichtenhain</td>
<td>Rittergut</td>
<td>605</td>
<td>20,000</td>
<td>20,000</td>
</tr>
<tr>
<td>Lindensee</td>
<td>Rittergut</td>
<td>183</td>
<td>10,000</td>
<td>10,000</td>
</tr>
<tr>
<td>Sternthal</td>
<td>Rittergut</td>
<td>205</td>
<td>9,000</td>
<td>9,000</td>
</tr>
<tr>
<td>Mathildenhof</td>
<td></td>
<td>180</td>
<td>5,000</td>
<td>5,000</td>
</tr>
<tr>
<td>Steinrode</td>
<td>Rittergut</td>
<td>314</td>
<td>11,800</td>
<td>11,800</td>
</tr>
<tr>
<td>Neu Kervellin</td>
<td></td>
<td>33</td>
<td>3,000</td>
<td>3,000</td>
</tr>
<tr>
<td>Boitzenburg</td>
<td>Landparzellen</td>
<td>8</td>
<td>1,200</td>
<td>2,160</td>
</tr>
<tr>
<td>Berkholz</td>
<td>Landparzellen</td>
<td>31</td>
<td>ー</td>
<td>ー</td>
</tr>
<tr>
<td>Haßleben</td>
<td>Landparzellen</td>
<td>24</td>
<td>ー</td>
<td>ー</td>
</tr>
<tr>
<td>Weggun</td>
<td>Landparzellen</td>
<td>ー</td>
<td>ー</td>
<td>ー</td>
</tr>
<tr>
<td>Cüstrinchen</td>
<td>Gastwirtschaft</td>
<td>4</td>
<td>500</td>
<td>500</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Mühlgut</td>
<td>60</td>
<td>2,000</td>
<td>2,000</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Mühlgut</td>
<td>60</td>
<td>3,500</td>
<td>3,500</td>
</tr>
<tr>
<td>Cüstrinchen</td>
<td>Fischerei</td>
<td>17</td>
<td>315</td>
<td>315</td>
</tr>
<tr>
<td>Funkenhagen</td>
<td>Fischerei</td>
<td>ー</td>
<td>400</td>
<td>400</td>
</tr>
<tr>
<td>Wichmannsdorf</td>
<td></td>
<td>ー</td>
<td>300</td>
<td>300</td>
</tr>
<tr>
<td>Warthe</td>
<td>Fischerei</td>
<td>ー</td>
<td>1,350</td>
<td>1,350</td>
</tr>
<tr>
<td>Naugarten</td>
<td>Fischerei</td>
<td>ー</td>
<td>300</td>
<td>300</td>
</tr>
<tr>
<td>Boitzenburg</td>
<td>Fischerei</td>
<td>ー</td>
<td>3,000</td>
<td>3,000</td>
</tr>
<tr>
<td>Wichmannsdorf</td>
<td></td>
<td>ー</td>
<td>300</td>
<td>300</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Pfarrgehöft</td>
<td>ー</td>
<td>140,205</td>
<td>141,165</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）年収入の単位はマルク。
ドイツ大土地所有の歴史的役割

ボイツェンブルク所領の農場貸し出し契約書の一般的諸規定を読むと、地主的利益を厚い保障に、一目瞭然たるものがある。ペヒターは排水設備を自前で整えなければならない。なお、満期を迎えるときには補償請求はできない。

公租公課についてはペヒターが引き受けなければならない。ペヒターは、自分に対する不穏当な振る舞いがペヒターにあった場合に、全面的にペヒターの責任である。これに対して、地主は、自分に対する不穏当な振る舞いがペヒターにあった場合に、全面的にペヒターの責任である。これに対して、地主は、自分に対する不穏当な振る舞いがペヒターにあった場合に、全面的にペヒターの責任である。

一方で、ポイツェンブルク所領内の農場貸し出し契約書の一般的諸規定を読むと、地主の利益を厚い保障に、一目瞭然たものがある。ペヒターは、自分に対する不穏当な振る舞いがペヒターにあった場合に、全面的にペヒターの責任である。これに対して、地主は、自分に対する不穏当な振る舞いがペヒターにあった場合に、全面的にペヒターの責任である。これに対して、地主は、自分に対する不穏当な振る舞いがペヒターにあった場合に、全面的にペヒターの責任である。

その結果が、貸し出し農場収入の毎年の集計からうかがい知られるであろう（表3-1参照）。資本利益部分に当たる分継益があるところ、資本利益部分に当たる分継益があるところ、資本利益部分に当たる分継益があるところ、資本利益部分に当たる分継益があるところ、資本利益部分に当たる分継益があるところ。
<table>
<thead>
<tr>
<th>名称</th>
<th>規模モルゲン</th>
<th>純収益マルク</th>
<th>借地料マルク</th>
<th>借地期間</th>
<th>西暦年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Krewitz</td>
<td>2,540</td>
<td>6,042</td>
<td>18,900</td>
<td>1885 - 1899</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Mathildenhof</td>
<td>800</td>
<td>2,005</td>
<td>3,300</td>
<td>1887 - 1894</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Lichtenhain</td>
<td>2,000</td>
<td>6,849</td>
<td>16,500</td>
<td>1884 - 1902</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Sternthal</td>
<td>784</td>
<td>2,754</td>
<td>6,000</td>
<td>1884 - 1904</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Brüsenwalde</td>
<td>1,030</td>
<td>1,935</td>
<td>3,000</td>
<td>1884 - 1898</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Bröddin</td>
<td>970</td>
<td>1,614</td>
<td>3,500</td>
<td>1879 - 1904</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Charlottenthal</td>
<td>890</td>
<td>2,000</td>
<td>3,700</td>
<td>1890 - 1894</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Cüstrinchen</td>
<td>1,282</td>
<td>441</td>
<td>1,350</td>
<td>1888 - 1902</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Steinrode</td>
<td>1,230</td>
<td>4,935</td>
<td>7,400</td>
<td>1882 - 1896</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Funkenhagen</td>
<td>1,604</td>
<td>4,824</td>
<td>6,000</td>
<td>1886 - 1900</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Lindensee</td>
<td>833</td>
<td>3,171</td>
<td>6,000</td>
<td>1888 - 1902</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Boitzenburger Mühle</td>
<td>230</td>
<td>-</td>
<td>3,600</td>
<td>1890 - 1905</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Mühle</td>
<td>210</td>
<td>6</td>
<td>1,000</td>
<td>1893 - 1905</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Brüsenwalder Mühle</td>
<td>400</td>
<td>18</td>
<td>984</td>
<td>1892 - 1904</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Brüsenwalder Krug</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>500</td>
<td>1890 - 1896</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Boitzenburger Krug</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>300</td>
<td>-</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Krug</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>48</td>
<td>-</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Fischerei Warthe</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>250</td>
<td>1894 - 1900</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Fischerei Boitzenburg</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>1,620</td>
<td>1888 - 1898</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Fischerei Wichmannsdorf</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>405</td>
<td>1893 - 1899</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Fischerei Naugarten</td>
<td>-</td>
<td>-</td>
<td>141</td>
<td>-</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Acker (Haßleben)</td>
<td>24</td>
<td>-</td>
<td>200</td>
<td>1896まで</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）BLHA Potsdam, Pr. Br. Rep. 37, Boitzenburg, Nr. 1480, Bl. 19, より作成。
前篇 ドイツ大土地所有の歴史的役割

4 ヴェーヴァー・ミュラー的視点の意義

「ヴェーヴァー・ミュラー的視点」の意義を今、まず述べるからだ。この観点は、歴史的役割を演じた人物や事柄に関する考察を進めるための重要な視点である。ヴェーヴァー・ミュラーは、第一次世界大戦後のドイツの土地問題を解決するために重要な役割を果たした人物である。彼の考え方は、ドイツの土地所有制改革の重要性を強調し、特に農民の利益を考慮した方針を提唱した。

ドイツの歴史的役割の調査において、ヴェーヴァー・ミュラーの視点が重要である。彼の考え方は、農業の近代化と効率化を促進すること、そして農民の利益を尊重することを重視した。これらの考え方は、後の歴史的な動きに影響を与えた。

一方、ヴェーヴァー・ミュラーの見解は、特に第一次世界大戦後のドイツに重要であった。彼の考え方は、農業の近代化と効率化を促進することが、農民の利益を尊重することが大切であると強調した。これらの考え方は、後の歴史的な動きに影響を与えた。
結びにかえて

「ライン・ポメルン農耕株式会社」（Rheinisch-Pommersche Ackerbaufabrikanteilsgesellschaft）は、ドイツ統一の前年の一八七五年に設立された。ヴェストファーレン出身のピルツハハ（Gezett von Pilsbach）は、五つの大農場を賃する計四七五ヘクタール規模のポメルンの大所領ゲラーメンツ（Graevenitz）を、一八三〇年に購入する。ポメルンの豊かな自然力の開発には、西部諸州の工業的知性の努力が不可欠である旨をピルツハハに説き、支持を取りつかった。

東エルベ農業のために、資本をポンプで汲み上げた同社は、ゲラーメンツ所在領を賃借し、年一千万マルクの借地料をピルツハハに支払う。その後、借地料は、年一九万八〇〇〇マルクにまで増額される。なお、所領の農場監
ドイツ大土地所有の歴史的役割

前篇

ドイツ大土地所有の歴史的役割

督（Gefeldrichter）には、他の大経営のベテランだった者が任用された。プロイセン農民大臣を務めたゼルヒヨ

耕地会社（Siedlungserhaltung）は、将来採れるべき多くの耕地会社（Siedlungserhaltung）全体によっての模範にかなならぬ役

が、工業の蓄積資本は、こうした耕地会社への投資にはさえど向かおうとせず、この試みは、グラーメンツの一

のみに終わる。耕地会社は、一八六六年、清算のやむ無きに至り、一六年あまりの決して長いとは言えぬ生涯を閉じるの

である。耕地会社の短命は、耕地会社そのものの失敗を原因とするのではなく、地主ビルツッハの借財が主因だった。

ランドウユーザーのユンカール大土地所有者の組織的提携は、わずか七年足らずで水泡に帰した。ミュラーの結語にあるとおり、これは、耕地会社それ自体の挫折と言うよりむしろ、地主の個人的利害に規定されていた側面の方が、より根本的な問題だったように思われる。増資に成功しなかった耕地会社の清算は、ひっしよう、当然の帰結でもあったのである。

しかし、同時に他方において、次の事柄が忘れられてはならないであろう。すなわち、ライエン・ポメルン借耕地

同社は、決して長くはなかったその一生によって、先駆者的に示したのではなかったか。ヴィルヘルム二世即位二

年前の同社消滅の必然性とともに、ドイツ統一の前年におけるその成立の先駆性が指摘されてよいように思われる。

(2) Vgl. Fränkel, S. 214.

(2) Vgl. Fränkel, S. 214.

(2) Vgl. Fränkel, S. 214.
後篇
ドイツ都市農村連続体の歴史的個性

「都市史と農村史のあいだ」研究序説
問題

本書後編においては、世襲財産＝土地所有の実証的検討を、前著『ドイツ世襲財産と帝国主義』に引き続き継続し
ながら、都市社会史をも含む近代社会生成上のダイナミックな現代の局面に着目する。『都市と農村のあいだ』と
いうべし、ペルリン＝ベルリン＝レーテ＝ルート＝ケルト＝ベルンの都市農村連続体と呼ばれるふさわしい個性的地域類型の一翼を担っ
た。同郡は、一筋のペルリン、近郊、クライス、ヴォルフスブルン＝ケルン（von Berlin）にほかならない。『ポツダム・アルヒーフ』所蔵未公刊・一次史料を基礎にしつつ、
一方においては、地方自治体による給付行政の業績を、ペンドラーの階層的生成を伴う都市化の進展との関連に
経済史研究上の新領域を独自の理論視点から切り拓くという、二段構えの検討作業を経て、戦後歴史学以降のドイツ
史像を批判し、それにかわりうる新しい映像の問題提起を行うことによって、全篇にわたる検討を終える。
第四章 ベルリン圏の都市化と農村社会の変容

一 考察の対象と順序

一九〇〇年時点で、一九二〇年時点で、ヘクターール規模を示したブランデンブルク州内のテルトウ郡は、これが所属する同州のボツダム県のなかでは五番目の大ささであった。図4-1に見られるように、ベルリンを南北から包囲するレンゲルンの「一方的帝国主義」による領域拡張志向の対象となるほかなかった点で、一九二〇年四月二七日の法律で完成した大ベルリン(Große Berlin)形成史上、相違する特性を共有した。しかし、両郡は、その担税力の点で対照的で、それぞれの有力自治体を失うことは、テルトウの生産力・消費力の低下はもちろ、財政力の弱化と自治の「給付」行政(Leistungsverwaltung)遂行上の由来しい損失に直結し、その結果、クライスの空洞化がもたらされる重大事
図 4-1 ボツダム県とテルトウ郡

（出典）C. Wilke, Landrätte, S. 53, より作成。

ただかったからである。

最初に、人口動態からうかがい知られるかぎりでのこうした合併の推移を概観しておこう（表4-1参照）。一九〇一年に三万人余を数えたにすぎぬ同郡の人口は、一九世紀中盤に増加の一途を辿り、一九一〇年には、四〇万人の経を突破するに至る。だが、一見順調に見えるこのような人口増も、有力自治体が二つにわたり、郡が合併を目的とする選択肢として、有力自治体があいまって郡から離れたため、一八八〇年以降、再ならず中間を通過してテルトウ郡からの離脱は一八七八年だった。リックスドルフとシュペルク（Oberspree）のそれらは一八九九年に、そして、ドイツのヴィルメスドルフ（Deutschwindsdorf）の郡巣は一九〇七年に、順次次第に離脱が行われたからである。

シュペツ（Willerspitz）のいわゆる「マルク人魂を帯びた自治」意識の強い手を誇ったテルトウ郡は、とりわけその北部地域で、大都市ベルリンによる覇食の影響を受けざるを得ず、構成自治体を次々に失っていったのである。だが、それでもなお、一九〇〇年には四〇〇〇〇人ほどの住民を擁した同郡では、アンハルト（Anhalt）やオルデンブルク（O.

200
第四章 ベルリン圏の都市化と農村社会の変容

表4-1 テルトウ郡の人口

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>農村</th>
<th>都市</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1801年</td>
<td>20,804</td>
<td>10,220</td>
<td>31,024</td>
</tr>
<tr>
<td>1871</td>
<td>73,314</td>
<td>34,048</td>
<td>107,362</td>
</tr>
<tr>
<td>1875</td>
<td>102,221</td>
<td>43,585</td>
<td>145,806</td>
</tr>
<tr>
<td>1880</td>
<td>117,685</td>
<td>19,806</td>
<td>137,491</td>
</tr>
<tr>
<td>1885</td>
<td>139,636</td>
<td>23,608</td>
<td>163,244</td>
</tr>
<tr>
<td>1890</td>
<td>194,293</td>
<td>27,667</td>
<td>221,960</td>
</tr>
<tr>
<td>1895</td>
<td>298,008</td>
<td>30,809</td>
<td>328,817</td>
</tr>
<tr>
<td>1900</td>
<td>232,999</td>
<td>35,188</td>
<td>268,187</td>
</tr>
<tr>
<td>1905</td>
<td>333,796</td>
<td>43,580</td>
<td>377,376</td>
</tr>
<tr>
<td>1907</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
<td>352,990</td>
</tr>
<tr>
<td>1909</td>
<td>356,400</td>
<td>46,643</td>
<td>403,043</td>
</tr>
<tr>
<td>1910</td>
<td>一</td>
<td>一</td>
<td>約440,000</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）1）シャルロッテンブルクの離脱（1877.1.1.）。25,847人減。
2）RixdorfとSchönebergの離脱（1899.4.1.）。186,420人減。これを加算すれば約430,000人になるが、都市の住民数約165,000を引けば概算で265,000になる。
3）Landgemeinde Deutschwilmersdorf（1907.4.1.に離脱）の住民数を除けば313,808人。

（出典）R. Jaeckel, Geschichte, S. 8, より作成。
後篇 ドイツ都市農村連続体の歴史的個性

に一定程度迫りつつ、併せて「都市史と農村史のあいだ」とも言うべき研究テーマの設定をも同時に展望すること、これである。

以下においては、次の考察の順序で、ポツダム・アルヒーフを中心として行った実証作業の成果の一端を、ベルリン・テルトゥ間関係に例証される都市・農村関係の近代の変化のダイナミズムを明らかにするのに必要なかぎりで、整理して示す試論的検討を通じて次の通りに整理されて次第に整備されている。ベルリン・テルトゥの鉄道建設に関する概観を、とりわけ郡の南北を貫通する路線に注目して与えた上で、ベルリン地域全体にわたるレンデラの先駆的研究するルーデ（Mitterwalde）とケーニヒス・ヴァルツーハウゼン（Königs Wusterhausen）の所論を吟味し、そこに残された空白部分をもってしてよいミッテルツーハウゼンの所論をどのように押しつけていたかを、農業・土地問題史の基本指標に照らして実証的に追究する。過去の都市化の波の所領経済構造とその変化。

二、鉄道建設と農村社会

1. ベルリン・ゲリリッツ線の開設

1882年にプロイセン国有となる鉄道で、テルトゥ郡を南北に貫通するものとしては、図4・12に明らかとなお、ベルリン・ゲリリッツ線の三路線がある。ここでは

202
第四章 ベルリン圏の都市化と農村社会の変容

図4-2 テルトウ郡と鉄道

(出典) L. Enders, Ortslexikon, Übersichtskarte zum historischen Ortslexikon (付録); W. Holtz u. G. Koischwitz, Südlich von Berlin, の付図より作成。

本章の行論にとって必要なベルリン-ベルリンツ間にに関する以下の素描のみを果たしておきたい。さて、ベルリンを、ザクセンのベルリンツ線と接続させる一九五八年の鉄道建設案は、ベルリン近辺の路線を、大規模な防衛設備で守りたいとするプロイセン軍の要求に突き当たることによって、その資金圧力が顕著になる。イギリス人出身者が現れ、ようやくベルリン-ベルリンツ鉄道会社の設立に至る。やがて、一九六六年のプロイセン・オーストリア戦争の勃発に伴い、軍部は、ラウジツツ (Laust) 方の一大中心地たるコトプス (Golbe) まで路線の可及的にすみやかな敷設のために、資金供与を申し出るが、それは、ひとえに、ペーメン方面へ大規模な軍事展開の必要に迫られたからには……
後篇 ドイツ都市農村連続体の歴史的個性

かなならない。このようなにして、一八六七年三月一日のベルリン一ベルリン間の全線開通に先立って、一八六六
年三月三日に、ベルリン一コトブス線の完成を見ると。そして、一八七四年までに、ベルリン一メルヒューレ
間の複線が完了したのちに、一八八三年には、すべての路線が国有化されたのである。
本章の問題関心は、この鉄道路線の開通がテルトウ郡の農村社会に及ぼした影響の跡を歩く一点に絞られるのだが、
ここではさしあたり、論理上重要な以下の二視点のみを指摘しておきたい。第一に、ベルリン一コトブス線の竣工を
成すものであった。一八九〇年とその二〇年前を比較するならば、実に離れた一農村の「うたたね生活からの大覚醒」を
要時間が、わずか二〇年ほどに短縮された事実は、人里離れた一農村の「うたたね生活からの大覚醒」とも言うべきこ
の間の事情を象徴的に物語る。第二に、一八八三年営業年度の一年間、ケーニヒス・ストーハウゼン駅で発売され
た乗車券の枚数は、全部で四五、五六枚に達した。この大変な利用が、「ベルリン一メルヒューレ間の労働者
への所要時間が、わずか二〇年ほどに短縮された事実を、人里離れた一農村の「うたたね生活からの大覚醒」とも言うべきこ
その間の事情を象徴的に物語る。第二に、一八八三年営業年度の一年間、ケーニヒス・ストーハウゼン駅で発売され
た乗車券の枚数は、全部で四五、五六枚に達した。この大変な利用が、「ベルリン一メルヒューレ間の労働者
への所要時間が、わずか二〇年ほどに短縮された事実を、人里離れた一農村の「うたたね生活からの大覚醒」とも言うべきこ
の間の事情を象徴的に物語る。第二に、一八八三年営業年度の一年間、ケーニヒス・ストーハウゼン駅で発売され
た乗車券の枚数は、全部で四五、五六枚に達した。この大変な利用が、「ベルリン一メルヒューレ間の労働者
への所要時間が、わずか二〇年ほどに短縮された事実を、人里離れた一農村の「うたたね生活からの大覚醒」とも言うべきこ
の間の事情を象徴的に物語る。第二に、一八八三年営業年度の一年間、ケーニヒス・ストーハウゼン駅で発売され
た乗車券の枚数は、全部で四五、五六枚に達した。この大変な利用が、「ベルリン一メルヒューレ間の労働者
への所要時間が、わずか二〇年ほどに短縮された事実を、人里離れた一農村の「うたたね生活からの大覚醒」とも言うべきこ
の間の事情を象徴的に物語る。第二に、一八八三年営業年度の一年間、ケーニヒス・ストーハウゼン駅で発売され
た乗車券の枚数は、全部で四五、五六枚に達した。この大変な利用が、「ベルリン一メルヒューレ間の労働者
への所要時間が、わずか二〇年ほどに短縮された事実を、人里離れた一農村の「うたたね生活からの大覚醒」とも言うべきこ
の間の事情を象徴的に物語る。第二に、一八八三年営業年度の一年間、ケーニヒス・ストーハウゼン駅で発売され
た乗車券の枚数は、全部で四五、五六枚に達した。この大変な利用が、「ベルリン一メルヒューレ間の労働者
への所要時間が、わずか二〇年ほどに短縮された事実を、人里離れた一農村の「うたたね生活からの大覚醒」とも言うべきこ

第四章 ベルリン環の都市化と農村社会の変容

表 4-2 ベルリン環ベンドラーの数量把握

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>Potsdam</th>
<th>Oranienburg</th>
<th>Bernau</th>
<th>Teltow</th>
<th>Strausberg</th>
<th>Werder</th>
<th>Altlandsberg</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ベルリンへ</td>
<td>4,285</td>
<td>713</td>
<td>1,497</td>
<td>1,717</td>
<td>129</td>
<td>191</td>
<td>520</td>
</tr>
<tr>
<td>ベルリンから</td>
<td>692</td>
<td>1,851</td>
<td>102</td>
<td>666</td>
<td>20</td>
<td>15</td>
<td>0</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）E. Wiebel, Städte, S. 15, Tabelle 1, より作成。
次に、第2章の問題について、テルトウ郡に着目するかぎりで言うならば、図4-2が示すとおり、当郡はも

なお、六つの都市が点在する。では、これら六つの都市とベルリンとの関係は、たしてどの

ようなものであったのか。ベルリンとテルトウ市との関係は、見られようなブドーーマー移動は、そこには、全くな

ったのであろうか。以下では、さしあたり、ミッテンヴァールデに止目することによって、当面の問題に迫ってみたい。

3 アルバインツ・ミッテンヴァールデ間の軽便鉄道

図4-2記載のベルリンのリックスドルフとミッテンヴァールデを結ぶ路線は、表4-3から知られるとおり、ブリ

ツ・ブーコ・ルード・シューネフレルト・ゼルヒオ・グロース・キーニッツ・ブーゲンベルクそしてラーゴの計

八つの途中停留駅を持つ軽便鉄道である。一九○○年九月二日には通車を開始した当該鉄道（単線）の総運行距離は、

二三キロメートル。そして、その総工費は、土地取得用経費の一九万マルクを含めると、二九万八マルクに達した。

これは、建設と経営をクレーツ・ヴェルツ、社が受け持った民間鉄道であった。鉄道敷設それ自体のためには一八万

マルクを要しただけだが、そのうちの八万マルクは、この鉄道を担保としたプロイセン抵当証券銀行の公債によって

まかなわれ、残額の一九万マルクについては、優先株が発行されることが知られている。その内訳を示した表4-4から、

研究史が指摘するとおり、軽便鉄道を敷設する際のライフの関与は相当大きかったことが知られる。だが、本表か

ら読み取れればならないことは、むしろ、七つの関係ゲマインデが総額二万五〇〇〇マルクを、騎士領所有者等の

ユンカースが一九万マルクを、そして、王宮（ホーハマーレ）によって代表される王家が五万マルクを、それぞれ

引受けた点ではないだろうか。当該の鉄道建設が、郡行政にかなり依存するプロジェクトだったことは事実と

しても、その他の関係当事者の役割もまた、決して無視されなかったのであって、それは、王家・ク

ライス・ゲマインデ・ユンカースそして民間企業が足を並をそろえて建設した。言わばそれらの合作でさえも言うべき
第四章 ベルリン圏の都市化と農村社会の変容

表 4-3 ベルリン−ミッテンヴァルデ間軽便鉄道

<table>
<thead>
<tr>
<th>名称</th>
<th>駅</th>
<th>Rixdorf からの距離 km</th>
<th>もより駅からの距離 km</th>
<th>住民数</th>
<th>鉄道利用者の割合 %</th>
<th>鉄道利用者概数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 Britz</td>
<td>Britz</td>
<td>3.8</td>
<td>0</td>
<td>7,000</td>
<td>20</td>
<td>1,400</td>
</tr>
<tr>
<td>2 Buckow</td>
<td>Buckow</td>
<td>6.1</td>
<td>1.0</td>
<td>1,100</td>
<td>90</td>
<td>990</td>
</tr>
<tr>
<td>3 Rudow</td>
<td>Rudow</td>
<td>9.4</td>
<td>0.5</td>
<td>1,300</td>
<td>100</td>
<td>1,300</td>
</tr>
<tr>
<td>4 Gr. Ziethen</td>
<td>Rudow</td>
<td>9.4</td>
<td>3.4</td>
<td>870</td>
<td>30</td>
<td>260</td>
</tr>
<tr>
<td>5 Shönefeld</td>
<td>Shönefeld</td>
<td>12.8</td>
<td>0.5</td>
<td>630</td>
<td>100</td>
<td>630</td>
</tr>
<tr>
<td>6 Wassmannsdorf</td>
<td>Shönefeld</td>
<td>12.8</td>
<td>2.3</td>
<td>510</td>
<td>90</td>
<td>460</td>
</tr>
<tr>
<td>7 Diepensee</td>
<td>Shönefeld</td>
<td>12.8</td>
<td>2.7</td>
<td>120</td>
<td>80</td>
<td>100</td>
</tr>
<tr>
<td>8 Selchow</td>
<td>Selchow</td>
<td>16.7</td>
<td>0.9</td>
<td>500</td>
<td>100</td>
<td>500</td>
</tr>
<tr>
<td>9 Rotzis</td>
<td>Selchow</td>
<td>16.7</td>
<td>2.0</td>
<td>270</td>
<td>100</td>
<td>270</td>
</tr>
<tr>
<td>10 Gr. Kienitz</td>
<td>Gr. Kienitz</td>
<td>19.3</td>
<td>1.6</td>
<td>170</td>
<td>90</td>
<td>150</td>
</tr>
<tr>
<td>11 Brusendorf</td>
<td>Brusendorf</td>
<td>21.7</td>
<td>1.0</td>
<td>290</td>
<td>100</td>
<td>290</td>
</tr>
<tr>
<td>12 Kl. Kienitz</td>
<td>Brusendorf</td>
<td>21.7</td>
<td>1.0</td>
<td>160</td>
<td>100</td>
<td>160</td>
</tr>
<tr>
<td>13 Ragow</td>
<td>Ragow</td>
<td>25.8</td>
<td>0.5</td>
<td>550</td>
<td>100</td>
<td>550</td>
</tr>
<tr>
<td>14 Mittenwalde</td>
<td>Mittenwalde</td>
<td>26.8</td>
<td>1.0</td>
<td>3,000</td>
<td>50</td>
<td>1,500</td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>16,470</td>
<td>8,560</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>


表 4-4 100万マルクの内訳

| i) Teltow 郡       | 200,000 |
|                   | 40,000  |
| ガマインデ Britz   |         |
| Herr Rittergutbesitzer Dr. Wrede-Britz | 100,000 |
| ガマインデ Buckow  | 50,000  |
| ガマインデ Rudow    | 60,000  |
| Herr von Benda-Rudow | 10,000  |
| ガマインデ Schönefeld | 40,000  |
| Herr Rittmeister Wrede-Diepensee | 60,000  |
| ガマインデ Selchow  | 20,000  |
| Herr Leutnant Neuhaus-Selchow | 30,000  |
| ガマインデ Gr. Kienitz | 20,000  |
| ガマインデ Brusendorf | 5,000   |
| ii) Firma          | 635,000  |
|                   | 300,000  |
| iii) Hofkammer     | 50,000  |
| 計                 | 985,000  |

(註) ロツィス（Rotzis）が株式の引き受けを拒否したので、合計額は100万マルクに満たない。

(出典) BLHA Potsdam, Pr. Br. Rep. 37, H. K. W., Nr. 127, Bl. 57，より作成。
### 表 4 - 5 ベルリン圏ベンドラーの先駆的形態

<table>
<thead>
<tr>
<th>勞働者</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Britz</td>
</tr>
<tr>
<td>Buckow</td>
</tr>
<tr>
<td>Rudow</td>
</tr>
<tr>
<td>Gr. Zieten</td>
</tr>
<tr>
<td>Schönefeld</td>
</tr>
<tr>
<td>Wassmannsdorf</td>
</tr>
<tr>
<td>Diepensee</td>
</tr>
<tr>
<td>Selchow</td>
</tr>
<tr>
<td>Rotzis</td>
</tr>
<tr>
<td>Gr. Kienitz</td>
</tr>
<tr>
<td>Brusendorf</td>
</tr>
<tr>
<td>Kl. Kienitz</td>
</tr>
<tr>
<td>Ragow</td>
</tr>
<tr>
<td>Mittenwalde</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>勞働者</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1/2</td>
</tr>
<tr>
<td>7回</td>
</tr>
<tr>
<td>1/3</td>
</tr>
<tr>
<td>5回</td>
</tr>
<tr>
<td>1/4</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(出典) 表 4 - 3 を加工して作成。
後篇 ドイツ都市農村連続体の歴史的個性

ハーゼン駅とその周辺道路を図示したものであり、また、図4.4はケーニヒス・ヴスター・ハーゼン市街全体の鳥瞰図である。図4.4については、のちにあらためて検討するが、ここでは、駅の立地とともに、ベルリン－ゲルリッツ線が、同市を南北に縦貫する路線だったことを確認しておきたい。

さて、ベルリン－ゲルリッツ鉄道路線の敷設の際、ケーニヒス・ヴスター・ハーゼン市街を結ぶ道路、第二に、ゼンツィヒ（Zentzweg）郡道と改称されたシュトルフ（Storlfweg）の国道、そして、第三が、ブーフホルツ街道に向かう家畜道（Gepflugweg）を含む部分であった。これらのものは、第一の道路は、一九六六年一月一日付の当初の建設計画では、野良道（Gepflugweg）と通学道だったかぎりでのみ、公的意義を担った。

本節の問題は、駅によって分断されたこれら三つの代替道路の建設とその保全をめぐるものなのであるが、以下においては、一九九九年二月一五日の関係当事者間の協議で決着を見ることの間の紛争について、さしあたり、次のように整理しておきたい。さて、ベルリン－ゲルリッツ間鉄道会社は、鉄道により遮断された地域住民のコミュニケーションを再建するために、上記三部分の代替道路の建設を決定し、結局、駅西部のバーレーフ・シュトラーセ（Beralso-Strasse）を起点に取るなら、北部のトンネル、東側部分の平行道（Parallelweg）、そして、南部の踏切を横切ってブーフホルツ街道へと至る代替道路が完成する。

その後、いったん作られた道路の保全義務を達が負うのかという点をめぐる紛争が発生する。この問題を解決するには、先述の三部分に照らして、全道路を三つに区分して考察しなければならなかった。すなわち、第一は、バー
図4-4 ケーニヒス・ヴスター・ハウス市の街の鳥瞰図

（出典）K. Adamy, K. Hübener u. M. Leps, Königs Wusterhausen, S. 114f. より作成。
シュトーレンベルクからトンネルを抜けて、ノイエ・ミューレン行道路へと合流する地点までの部分。第二は、この旧国道からシュトーレンベルク舗装道へと続く道路である。

この合流点から旧シュトーレンベルク国道へと至る道、そして、第三が、この旧国道からシュトーレンベルク舗装道へと続く道路である。

鉄道会社とその法的後身たる国鉄（Deutsche Reichsbahn）は、建築当初は、上記の道路の一部のすべてを保全していたのだが、やがてときを経て、次のように主張するようになった。すなわち、道路建設義務者には、少なくとも前述の第二・三の平行道部分については、新たに設置された代替道路の施設ないし保全義務を負うにすぎないことが判明した。それに対して、道路保全の通常の場合の義務者たる王家財産（das königliche Haushalteinkommen）と道路警察は、次のように対論した。鉄道建設に関わる従来の慣例から見てもまたしっかりなのかである。代替道路の建設は、この第一四条に基づいて、地方警察の命により、企業者に課されているのであるから、企業者はまた、その保全義務を負うべきである。このことから、道路保全の通常の場合の義務者たる王家財産（das königliche Haushalteinkommen）と道路警察との中間の位置に置かれたものである。
エ・ミューレ方面への分岐点からシュトゥルコ国道までの平行道は、純然たる野良道としての性格を持ち。また、北方
トンネルとそれへの接続道路は、教会と学校への歩道として建設されたものである。したがって、これらの第一と第二
の部分のすべてが、一つの統一体を成す点に疑念の余地はなく、たとえ、それがのちにますます公的交通のために
発展して行ったとしても、該部分は元来、切り取られた公道の埋め合わせとして建設されたものである。したがって、これらの第一と第二
の部分のすべてについて、鉄道建設企業が保全義務を負うことは明らかである。鉄道会社の法的後身たる国鉄が、この
義務を引き継いで負う点は、いかんとも動かしがたい。
これとは違って、先述の第三の部分、すなわち、シュトゥルコ国道からブーフホルツへと至る部分の状況は、全く
の別物である。これは、シュトゥルコ国道と家畜道のための公的意義を担う補償道路にはかならない。それゆえ、この
部分については、公道の移転を規定した鉄道法第四条の適用を受ける見ても、企業者には、元元の面積を上回る超
過分についてのみ保全義務が発生するのである。一九一九年に駅が南方に拡張され、代替道路の面積が相当増大した
とは言え、それは、七、七五平方メートルにとどまり、切り取られた公道の総面積八二〇平方メートルには及
ばない。したがって、この部分の保全に関する鉄道企業の「慣習上の義務」を絶対の義務として保全責任は、あて
て、通常の義務者に負わせてしかるべきである。
一九一九年二月一五日。当該の問題をめぐる締結とされた利害状況の調停案を作成したシュタインベルク主宰の協議
が執り行われる。その出席者は、ドイツ国鉄・王家世襲財産・テルトゥ郡、ならびに、ゲマインデ長とゲマイン
シュトゥルコ国道からブーフホルツ舎装道へと続く代替道路の三部分について、次のような合意が得られた。
第一に、(a)
デが引き受ける。また、王家世襲財産が国鉄も、ともに、その所有地内にある道路用地を無償供与しなければならな
い。しかし、道路建設後の保全義務は、ゲマインデが負うものと見える。このようにして、代替道路設
設費の国鉄負担、の合併（Gemeindeverband）とについて、当事者間での大筋の合意が得られた。第二
に、（b）の箇所については、鼬って協議
ネル内での道路本体（Wegstrecke）を保全するべき国鉄の義務を前提とした上で、その詳細についても、
旨が、次承されたのであつた。
一つの小括として、われわれはここで、次のように言うべきである。それらは、ケーニヒス・ヴスタ
情報を利害状況の調停についてもまた、もとよりポラマのイニシアティヴを必須の条件にしたと
は覚え、やはり、王家世襲財産所在地ゲマインデとし
ックの仲裁案に異存なき
行に移された点が確認されること、これである。

三

世襲財産所領の経済構造とその変化

まず最初、ケーニヒス・ヴスター・ハウスゼン市街を鳥瞰する前掲図4・4を見られ
の境界線を持ち、また東では、王の狩猟地に開まれながら、その西北方向に、
の広大な森林地の一端をのぞか
第四章 ベルリン圏の都市化と農村社会の変容

せる同市街の姿が一望されるよう。ケーニヒス・ヴスターハウゼンの土地所有については、まずもって、それには三つ
の種類があったことを押さえなければならない。そのガマイイェン面積は、約三〇〇ヘクタールであるが、
これに合わせたグートと森林は、合計で六〇〇ヘクタールほどの規模であった。

さて、ケーニヒス・ヴスターハウゼンにに関する最新研究の一論者たるM・レプスは、一九世紀初頭から第一次世
界大戦に至る工業化時代の当該地方史を分析し、当初は、「みすぼらしいフレッケン」にすぎなかったこの土地が、
二〇世紀への転換期になると、「都市的な性格」を併せ持つ「ベルリンの近郊」へと成長した。と特徴づけている。

ガマイイェン史の追究に重要な問題関心を注ぐ研究者、プロイセン史におけるガマイイェン自治の役割を把握する上
での一つの例証として、貴重な資料をつなぐものと評価されている。だが、言うまでもなく、ケーニヒス・ヴスターハ
ウン地方史の全体像を明らかにするためには、これを構成するガマイイェン部分だけでなく、もう一方の世襲財産
領の経済構造に関する分析が果たされなければならない。後続研究には、M・レプスの論述に見られるこの欠落分
野への一考察が課されよう。そこで、本節においては以下、農業・土地問題の分析にとられて避けて通れない基礎指
標が知られよう。また、一八九八年の内訳を明らかにした表4-7を見ると、以下の事実が分かった。すなわち、世襲
財産はこの年度に一六一二九・三三マルクの収入を上げたのだが、その主要部分は、各種土地所有によるものであっ


表4 - 6 納付金額の推移

(単位：マルク)

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>1896年</th>
<th>1897年</th>
<th>1898年</th>
<th>1899年</th>
<th>1900年</th>
<th>1901年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>12,848.28</td>
<td>12,481.63</td>
<td>13,184.77</td>
<td>13,065.39</td>
<td>13,290.96</td>
<td>12,073.85</td>
</tr>
</tbody>
</table>


表4 - 7 1898年度の収支

(単位：マルク)

<table>
<thead>
<tr>
<th>収入</th>
<th>支出</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1. 各種土地所有</td>
<td>12,299.30</td>
</tr>
<tr>
<td>2. 漁撈・工場施設</td>
<td>3,799.62</td>
</tr>
<tr>
<td>3. 土地権益（使用料）</td>
<td>70.10</td>
</tr>
<tr>
<td>4. その他</td>
<td>30.30</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>16,199.32</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）BLHA Potsdam, Pr. Br. Rep. 37, H. K. W., Nr. 947, Bl. 329f. より作成。

表4 - 8 世襲財産の現金残高

(単位：マルク)

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>収入</th>
<th>支出</th>
<th>残高</th>
<th>前払</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>アムト</td>
<td>982.14</td>
<td>342.75</td>
<td>639.39</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>森林</td>
<td>55,301.15</td>
<td>47,398.96</td>
<td>7,902.19</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>健康保険</td>
<td>263.42</td>
<td>389.28</td>
<td>—</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>廃疾年金</td>
<td>204.43</td>
<td>442.32</td>
<td>—</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>アムト会計課保管物</td>
<td>0.50</td>
<td>0.50</td>
<td>—</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>森林会計課保管物</td>
<td>11,584.35</td>
<td>11,200.35</td>
<td>384.00</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>森林会計課前払</td>
<td>0.90</td>
<td>1,465.85</td>
<td>—</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>その他</td>
<td>1,332.22</td>
<td>1,412.22</td>
<td>—</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>残高と前払の小計</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>8,925.58</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>69,669.11</td>
<td>62,652.23</td>
<td>7,016.88</td>
<td>—</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）BLHA Potsdam, Pr. Br. Rep. 37, H. K. W., Nr. 956, Bl. 71-73, より作成。

表4 - 9 借地料収入見込み

(単位：マルク)

<table>
<thead>
<tr>
<th>人数</th>
<th>見込み額</th>
<th>内金（Angeld）</th>
<th>残額</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>128人</td>
<td>26,182.66</td>
<td>4,872.62</td>
<td>21,310.04</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）BLHA Potsdam, Pr. Br. Rep. 37, H. K. W., Nr. 956, Bl. 74-76, より作成。
一四五マルクを差し引くと、残額は「一三一八四・七マルク」となる。シャルロッテンブルクの王室主計局に納されたもの、これである。次に、表4.18は、世襲財産が一八九二年三月三〇日に所有していた現金の残高を明らかにしている。さて、世襲財産の経理担当部門は、グーテンベルクを所掌する部門（マール）と森林とを二分して、少ない額にとどまり、その圧倒的大部分が森林会計課の金庫に貯えられていたことが判明する。ただしこれは、同表に関しては、一例のみにすぎぬが、一八九二年三月三〇日時点での、なお二一万〇〇〇マルクほどにすぎなかった現金は比較的将来に手当する予想されることが判明する。たまたも、同表に関しては、一例のみにすぎぬが、一八九二年三月三〇日時点での、なお二一万〇〇〇マルクほどにすぎなかった現金は比較的将来に手当する予想されることが判明する。ただし、同表に関しては、一例のみにすぎぬが、一八九二年三月三〇日時点での、なお二一万〇〇〇マルクほどにすぎなかった現金は比較的将来に手当する予想されることが判明する。ただし、同表に関しては、一例のみにすぎぬが、一八九二年三月三〇日時点での、なお二一万〇〇〇マルクほどにすぎなかった現金は比較的将来に手当する予想されることが判明する。ただし、同表に関しては、一例のみにすぎぬが、一八九二年三月三〇日時点での、なお二一万〇〇〇マルクほどにすぎなかった現金は比較的将来に手当する予想されることが判明する。ただし、同表に関しては、一例のみにすぎぬが、一八九二年三月三〇日時点での、なお二一万〇〇〇マルクほどにすぎなかった現金は比較的将来に手当する予想されることが判明する。ただし、同表に関しては、一例のみにすぎぬが、一八九二年三月三〇日時点での、なお二一万〇〇〇マルクほどにすぎなかった現金は比較的将来に手当する予想されることが判明する。ただし、同表に関しては、一例のみにすぎぬが、一八九二年三月三〇日時点での、なお二一万〇〇〇マルクほどにすぎなかった現金は比較的将来に手当する予想されることが判明する。
3. 零細地小作の集合体

一九〇五年一〇月一日以降の五年間にわたる零細地の農業利用を示した表4-10から、労働者・農夫・内屋親方・工場主等の製作の農業利用を含め、合計一四の零細地を借りている。同一人物がいるので、労働者数の合計は二人になる。鉄道敷設の影響は、車掌と鉄道車両掃除夫との借地人としての登場の点にも現れている。
### 表 4-10 零細地の農耕利用

| 1 | vereh. Arbeiter | 40 | Fuhrherr |
| 2 | Handelsmann     | 41 | Schürpfer  |
| 3 | Landwirt        | 42 | Schürpfer  |
| 4 | Landwirt        | 43 | Kutscher   |
| 5 | Landwirt        | 44 | Schürpfer  |
| 6 | Landwirt        | 45 | Kutscher   |
| 7 | Landwirt        | 46 | Schürpfer  |
| 8 | Landwirt        | 47 | Fuhrherr   |
| 9 | Landwirt        | 48 | Schürpfer  |
| 10| Landwirt        | 49 | Arbeiter   |
| 11| Landwirt        | 50 | Schürpfer  |
| 12| Landwirt        | 51 | Fuhrherr   |
| 13| Landwirt        | 52 | Schürpfer  |
| 14| Landwirt        | 53 | Schürpfer  |
| 15| Landwirt        | 54 | Fuhrherr   |
| 16| Landwirt        | 55 | Schürpfer  |
| 17| Landwirt        | 56 | vereh. Arbeiter |
| 18| Landwirt        | 57 | Witwe      |
| 19| Bäckermeister   | 58 | Schürpfer  |
| 20| Fabrikbesitzer  | 59 | Schürpfer  |
| 21| Fabrikbesitzer  | 60 | Schürpfer  |
| 22| Fabrikbesitzer  | 61 | Schürpfer  |
| 23| Fabrikbesitzer  | 62 | Schürpfer  |
| 24| Fabrikbesitzer  | 63 | Schürpfer  |
| 25| Fabrikbesitzer  | 64 | Schürpfer  |
| 26| Fabrikbesitzer  | 65 | Schürpfer  |
| 27| Fabrikbesitzer  | 66 | Schürpfer  |
| 28| Fabrikbesitzer  | 67 | Schürpfer  |
| 29| Fabrikbesitzer  | 68 | Schürpfer  |
| 30| Fabrikbesitzer  | 69 | Schürpfer  |
| 31| Fabrikbesitzer  | 70 | Schürpfer  |
| 32| Fabrikbesitzer  | 71 | Schürpfer  |
| 33| Fabrikbesitzer  | 72 | Schürpfer  |
| 34| Fabrikbesitzer  | 73 | Schürpfer  |
| 35| Fabrikbesitzer  | 74 | Schürpfer  |
| 36| Fabrikbesitzer  | 75 | Schürpfer  |
| 37| Fabrikbesitzer  | 76 | Schürpfer  |
| 38| Fabrikbesitzer  | 77 | Schürpfer  |

(注) 零細地番号1 - 22は、第11耕区（Schlag）に、そして、
23 - 77番は、第12耕区に属している。
(出典) BLHA Potsdam, Pr. Br. Rep. 37, H. K. W., Do-
kumente, Nr. 670, o. Bl. より作成。

細地小作を手がけている。54・55番の葉巻製造工場主がそれである。第三に、借地番号77・89・92番の小作人が行う
生業は、先述の車輌掃除夫同様、農業ではない。当該の世襲財産所有者は、工場主と労働者が、そして農業と非農業の
両面にわたる各種生業者が複数に入り乱れて展開する零細地小作の一個の集合体としての一体を保つものだっ
た、といえよう。表中の多くのは、やはり農業労働ではあるが、まだごく少数だったものの、そこだけがを含め
大土地所有が軒並み存続。零細地の小作と農業労働者的二相性、その構成比、そして、それによる借地労働者の在地性
の確保というヴェーバーの分析をもって示している。そして、ほぼ一六七ヘクタールにおおむね一致する。たがって、グート・ケーニヒス・ゲスターハウゼンとは、単独の
大集団体にほかならなかったことが見て取れるのである。図4・12からは、遺伝的な零細地から構成される所領の姿
の一面が、視覚的に解釈し得て見えるようにも思われるが、ここではさらに、マインツと王家世襲財産が、比較
的大きなまとまりを成す別の二区画として並存したのでではなく、あたかも小土地所有の渾然一体とした状況下で散

221
### 表 4-12 所領の零細地総数

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>(a) 耕地</th>
<th>(b) 牧草地</th>
<th>(c) 耕地</th>
<th>(d) 牧草地</th>
<th>(e) 耕地</th>
<th>零細地数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>I</td>
<td>21901〜</td>
<td>21905〜</td>
<td>2</td>
<td>29</td>
<td>2</td>
<td>31 b+c</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1910</td>
<td>1910</td>
<td>1910</td>
<td>1910</td>
<td>1919</td>
<td>d+e</td>
</tr>
<tr>
<td>II</td>
<td>212</td>
<td>12</td>
<td>26</td>
<td>12</td>
<td>26</td>
<td>38 b+c</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>d+e</td>
</tr>
<tr>
<td>III</td>
<td>2116</td>
<td>16</td>
<td>16</td>
<td>-</td>
<td>16牧草地のみ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>IV</td>
<td>2110</td>
<td>36</td>
<td>10b)</td>
<td>10</td>
<td>36</td>
<td>46 b+c</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>d+e</td>
</tr>
<tr>
<td>V</td>
<td>215</td>
<td>5</td>
<td>-</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5耕地のみ</td>
</tr>
<tr>
<td>VI</td>
<td>215</td>
<td>5</td>
<td>-</td>
<td>5</td>
<td>5</td>
<td>5耕地のみ</td>
</tr>
<tr>
<td>VII</td>
<td>219</td>
<td>9</td>
<td>-</td>
<td>9</td>
<td>9</td>
<td>9耕地のみ</td>
</tr>
<tr>
<td>VIII</td>
<td>229</td>
<td>-</td>
<td>27</td>
<td>-</td>
<td>29牧草地のみ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>IX</td>
<td>217</td>
<td>16</td>
<td>6</td>
<td>13</td>
<td>23 b+c</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>X</td>
<td>213</td>
<td>8</td>
<td>3</td>
<td>7</td>
<td>11 b+c</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>XI</td>
<td>222</td>
<td>30</td>
<td>-</td>
<td>52</td>
<td>52</td>
<td>52耕地のみ</td>
</tr>
<tr>
<td>XII</td>
<td>255b)</td>
<td>10</td>
<td>-</td>
<td>65</td>
<td>65</td>
<td>65耕地のみ</td>
</tr>
<tr>
<td>XIII</td>
<td>226</td>
<td>-</td>
<td>26</td>
<td>-</td>
<td>26牧草地のみ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>177</td>
<td>105</td>
<td>174</td>
<td>102</td>
<td>247</td>
<td>356</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(説) 零細地総数は356であったと判断される。なお、1）にはLocomotivführerが含まれ、2）の所にはEisenbahn-Wagenputzerがいる。


### 表 4-13 零細地と小作料予定額

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>(a) 耕地</th>
<th>(b) 牧草地</th>
<th>(c) 耕地</th>
<th>(d) 牧草地</th>
<th>(e) 耕地</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>零細地数</td>
<td>77</td>
<td>105</td>
<td>174</td>
<td>102</td>
<td>247</td>
</tr>
<tr>
<td>付け値の数</td>
<td>77</td>
<td>87</td>
<td>153</td>
<td>64</td>
<td>247</td>
</tr>
<tr>
<td>付け値なし</td>
<td>-</td>
<td>18</td>
<td>21</td>
<td>38</td>
<td>-</td>
</tr>
<tr>
<td>最高付け値の合計額</td>
<td>908.7</td>
<td>1,881.5</td>
<td>2,118.5</td>
<td>1,415.8</td>
<td>4,530.2</td>
</tr>
<tr>
<td>付け値一箇当たりの平均額</td>
<td>11.8</td>
<td>21.63</td>
<td>13.85</td>
<td>22.12</td>
<td>18.34</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(説) 付け値合計額・平均額の単位はマルク。(d)と(e)との合計額を合算すれば、1910年10月時点の小作料予定総額が分かる。また、牧草地(d)の総面積は22.4ヘクタール、耕地(e)のそれは144.6ヘクタールであるから、小作地全体の面積は約167ヘクタールとなる。

（出典）表4-12と同じ。
在し、それは、駅周辺においてもまた同様だった事実を、併せて指摘しておきたい。

4 小作人の階層変化

次に、一九世紀初頭まではケーニヒス・ウェスターハウゼン所領に属したが、その後ミッテンヴァルデに編入され続けることとなる小作フォーレルザング（Gornergasse）の牧草地の貸し出しに関する史実に即して、小作人の階層変化を追跡し、そこに示されるかぎりでの鉄道敷設後の農村社会の変容を明らかにしておきたい。それは、表4・14のiv）を対照させて中で把捉されるであろう。なぜなら、ベルリン＝ミッテンヴァルデ間軽便鉄道の運転は、先に見たとはならないからである。

第1章に、製パン所親方・桶屋親方・銅造り親方等の各種の手工業者が、同村に相当多数存在していた点は、前後期を通じてあまり変わらなかった。だが、市民農夫（Ackerbürger）についても、変相が一変する。すなわち、一九〇〇年に八人いた当該農民は、一九二二年以降の時期に入るとたった一人に激減するのである。

第2章に、軽便鉄道開通後の第五期においての新たなビュードナー（Pudding）が、二〇世紀末期までなお残存したビュードナー（Pudding）が、との新登場が、注目に値しよう。肉屋がいることは、ひとまずは、この土地における畜産の進展の一

所産と考えられるであろう。また、労働組頭の存在については、こうである。もし彼が、農業労働の組頭だったとするならば、同様の立場にいる人々の存在は、もちろん必要である。ミッテンヴァルデ地場工業発展の一図式の見方もある。
5 補説... ヘルムスドルフとハルべ

いま、このフォーメルザリング村における小作人の階層変化を、ヘルムスドルフ（Hermansdorf）の状況と対比させる。北部の村で、前後の変化の様相を、ひととき鮮やかに把握されるであろう。ただし、ヘルムスドルフは、隣接郡ベストホフの村について述べたのちに、ヘラブンの研究を紹介しよう。この村は、以前のヘルムスドルフ騎士農場に属する合計五～三九一～五ヘクタールの地であり、一九五五年より九月三日までの一九五年間にわたる土地契約を結んだ小作人の職業を明らかにしてくる。それによれば、開拓農民（Ackerer）一人、労働者二人、労働者三人、れんが職人（Mager）一人、車大工一人、農民一人の合計六九人が、小作を申し出ている。なお、付け値なしの五、そして、不明三を加えれば、貸し出し総数は七七となる。また、全貸し出し地からの小作料収入予定額は、割り増し額の四・九六マルクを含めて一六・八六マルクであった。
このように、同村には、開拓農民・農民・ピューリタン・労働者・れんが職人・車大工の計六種類の小作人が登場するだけであって、ミッテンヴァルデ南方のフォーゲルザンゼのような各種生業の多面的展開は見られない。フォーゲルザンゼにおいては二〇世紀初頭期にすでに消滅したピューリタンと、そしてこれに加えて、開拓農民、いわば下フューレンスドルフが、永久に比較的斬新な農業社会にとどまり続けたことが知られるであろう。ここには、鉄道開設の影響が、フォーゲルザンゼでの多様性とは対極的な、農村社会の人的構成の斬新性という形で、かえって逆に鮮やかに示されているのである。

次に、都市化をめぐるマインデー間の消長は、教会建設の問題にも露呈している。さて、教会マインデーにおけるヴェンディッシュ・ブープホルツ (Wendisch Buchholz) は、ヴェンディッシュ・ブープホルツ市と呼ばれるツー（ヴァーディッシュ・ブープホルツ、トゥル・フー・フューレンスドルフ、フレイデルフフェルテン、フレイデルフフェルテン）によって構成されていた。これらのなかで、たまたまベルリン・ギュレッツ線に位置したハルペ（図 4・2 参照）は、他のものに比べて自立する道を決意する。一九二〇年二月に行われた協議には、教会問題に関する議決権を持つ構成メンバーが、ハルペから多数参加する。合計三人の会議出席者の顔ぶれは、以下のとおりであった。
第四章 ベルリン圏の都市化と農村社会の変容

教会地方監督
Schmidt
ケーニヒス・ヴェンディッシャ・アーヴォルツ

2
牧師
Neuhaus
ハルペ

3
副牧師
Kiersten
ハルペ

4
主教
Leppin
ハルペ

5
主教助手
Draßdo
ハルペ

6
市長
Krappe
ハルペ

7
耕地
Dohrmann
ハルペ

8
地元農民
Rorschig
ハルペ

9
開拓者
Gericke
ハルペ

10
失業者
Lubon
ハルペ

11
無業者

12
観光

13
新教会ガーデン

ハルペ代表の一人は、新教会ガーデンの設立を認可し、この問題にはひとまず決着がある。これで重要なことは、本章の問題関係者からすれば、むしろ以下の点である。すなわち、新教会ガーデンの独立と維持をまかなうという他の実力を兼ね備えるに至る点である。しかも、その場合、投票権を持つガーデンメンバーの一員、すでに新教会ガーデンがその名を連ねている点が重要である。新教会の
後篇 ドイツ都市農村連続体の歴史的特性

波を農村地域に運ぶ鉄道建設の影響は、小作人の階層変化に明瞭に現れたばかりではなく、新しい芸術とマインデの
誕生の際にも、大きくその影を落とすものだったのである。ヘルムスドルフとハルベとのこうした対照的な姿は、本
章が追ってきた鉄道建設と農村社会変容の関係の意義を補強する恰好の事実であった。言葉によって思い浮かべる。

四

結びにかえて

ここで、いままでの実証の成果と、「土地所有者」の契機に止目する理論的観点との突き合わせから得られる以下の
概説を、一つの試論として提示することによって、本章の結びにかえておきたい。ベルリン・ミッテング＝ヴァルデ間便鉄道は、そうした鉄道建設の一例にほかならない。他方、

M・ウェーバーのいう、「森林世襲財産」の一つと目されるケーニヒス・ツターハウゼン所領は、零細地小作の
一大集合体としての一面をも併せ持つ世襲財産であった。賃貸出し地一つ当たりの平均面積は、農耕利用の場合が

○五八ヘクタール、牧草地のそれは○ニニヘクタールといったわけである。「森林世襲財産」の一つと目されるケーニヒス・ツターハウゼン所領では、零細地小作の
非農業労働者もまた、その借り手の重要な一部を占めた。鉄道機関士・鉄道車両掃除夫や車掌あるいは労働組頭や肉
屋等の非農業労働者が、このような零細地の新手の借り手として登場し、在地の大土地所有との土地貸借関係を保持
したのである。わたったは、こうした多様な非農業にいそしむ多様な労働者階層を、ベルンドラムを含むのが濃厚な
都市近郊農村労働者階層の新種の範疇として把握したいと考える。ケーニヒス・ツターハウゼンや往時のミッテ
ンヴァルデには、「森林経営」とともに、このような零細地貸し出しを必須の経営基盤の一つとする世襲財産形態での大

228
土地所有が存在したのであった。
ところへ、かつて、わたくしは、二〇世紀への転換期における零細地小作の人史的基礎性に目を向けて、前著「ドイツ農業の都市化と農村社会の変容」では、世襲財産と帝国主義の一節で、次のように、すなわち、第一に、いわゆる「シュレーバー・ベルリン化層」を含む、世襲財産と帝国主義の「二つの基礎」の一つと、資本主義の生産様式の永続的基礎にほかならない土地所有の契機が、ドイツ農法における零細地小作という独特の形態で、帝国主義転化のための構造的な基盤として、その成立は、明らかだったこと、また、資本主義生産方式を果たす。これらは、同じく資本主義の生産様式としての歴史的意義を担ったことになる。そして、第二に、M・ウェーバーの「世襲財産論」という立場による、世襲財産と帝国主義の「二つの基礎」を、土地所有の契機として、零細地小作という独自の形態で、零細地小作を論じた立場における、零細地小作の歴史的役割と「世襲財産」の「肯定的な経済的意義」ととの積極的な関連に関する以下の著作に基づく論点を、すなわち、基本的構造をもって自由な労働者階層の維持を助長したという点を指摘した。
後篇 ドイツ都市農村連続体の歴史的個性

深化を支える農村的基礎の「契機」でもあったのである。この場合、農村と都市の媒介環が鉄道だったことは、言うまでもない。

「都市と農村のあいだ」と言うべきベルリン圏テルトゥ郡と、まさに、「都市農村連続体」と呼びならわされるにふさわしい「都市近郊農村」地域の一つにほかならなかった。この「都市農村連続体」の近現代のダイナミックな展開史をもつべく不可欠の構成要素の一環が、土地所有の契機であった。これを本章の結語とした。

一〇、ホーム（Eberhard Böhm）によれば、テルトゥは、バルニムとともに、「ミッテルマルク（Mittelmark）」の最も興味深い地域を成す。言うのは、こうである。テルトゥとバルニム以外の諸地域、すなわち、一方におけるロービン（Ruppin）とヘーフラント（Havelland）、そしてツァーレヒ（Zauche）を結ぶ「フォークト」（Fechen）管轄地（Vogtei）だった。

Wezel (Hrsg.), Das ortsansiedelnde Beithin und seine Besiedlung, Berlin 1922, S. 218. "...und wir konnten feststellen, dass der ganze Raum von einem großen, reichen Stamm besetzt war, der sich durch seine Fähigkeit, christliche Religion und Wohltat weiterzugeben, auszeichnet."

"...und wir konnten feststellen, dass der ganze Raum von einem großen, reichen Stamm besetzt war, der sich durch seine Fähigkeit, christliche Religion und Wohltat weiterzugeben, auszeichnet."

Wolfgang Homann, Allgemeiner und Stichter der Kommissionen Selbstverwaltung in der Zeit der Hochfinanz...


これに加えて、都市化の進展を「都市経済学」の視点で説明した簡潔な筆致を《都市化と交通》（岩波講座 世界歴史）産業と革新 資本主義の発展と変容》岩波書店 一九八八年 所収 もまた 基本文献としての有用度は少ないからず高い。だが この作品について 前橋同様の批判点を言うなら 次のようなだろう すなわち ベンドラー労働者と都市近郊ゲーミングの役割に対する問題意識が ものに稀薄なのである いか と も もも 一言にして 『都市史と農村史のあいだ』と言うべき新領域の本格的開拓の業業は 今後果たされるべき重要な実証的検討課題の一つにほかならないと思われる。

次に 本書が対象とする二重転換期に先立つ時期のベルリン地域空間の問題に関して論じた重要な研究として 産業と革新 二重転換期における地域経済化の動き 一八六〇年革命 一八四八年革命》ベルを探す歴史》岩波書房 一九八八年 所収 と 前橋 クリストフ・高橋秀行編著 地域経済化の比較史的研究 二〇〇〇年二〇〇〇年三〇〇年 所収 が挙げられる これは 石坂昭雄 高橋秀行編著 地域経済化の比較史的研究 二〇〇〇年三〇〇年 所収 における初期経済化・一八四八年革命期・地域経済の問題を問うものである。しかし この中で 本書の問題視点に背反しきれない重要な点を一つだけ指摘しよう すなわち 両者の先行研究においては でのベルリンと近隣の関係における都市経済化の問題がある。あるいは 『近郊ベルリン』という用語を用いて付言しつつ考える。彼の言及でよいのではないだろうか。
後篇 ドイツ都市農村連続体の歴史的個性

もちろん、財政史の成果についても、ここで一言あつけて必要なべきである。関野満夫氏の『ドイツ都市経営の財政史』（中央山西省、一二九八年）と同様、『財政史の基礎的研究と評価』（昭和七年、一二九五年）が、それである。将ら、関野氏の著書は、特に「特に都市経営の実態を財政史的に検討していとる」とすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二年発行の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけてのドイツ都市経営の形成を論じている。関野氏は、ドイツ都市経営の実態を財政史的に検討しているとすれば、他方、関野氏の著書は、二九世紀末から二一年初頭にかけ
箇国本邦に於ける農業化と農村社会の変容

Chūō Kōron, 26, 3, 329, 1972, 393-416.

「国・地域・社会」の農業化と農村社会の変容

Studies in Agriculture and Rural Society. 1971, 393-416.

農業化と農村社会の変容


第五章
ベルリン圏の都市化と近郊ゲマインデの自治

課題

【都市と農村のあいだ】と言えば、ベルリン圏のテルトゥ郡は、【都市近郊ゲマインデ】（Gemeindekern）を数多く持つ。【都市農村連続体】（Stadt-Land-Kontinuum）と呼ばれる地域にふさわしい地域の一つだった。首都ベルリンに隣接し、その【一方的帝国主義】による領域拡張志向の対象となったことである。前章におけるすでに開始した。そこでの多様な立場に着目して、その歴史的特徴を描き出すための実証的検討を、わたたくしは、本章の行論にとって必要を感じている。ベルリンと近郊農村地域を結ぶ、両者の媒介環たる鉄道路線の建設は、一方の百七十年の電化に象徴されるように、一九世紀末以降の世紀転換期には、一つのピークが見られた。その時期の形成は、そこをなすのが、都市化の波、ペンドラー労働者の形成である。その決定的な要因だとも思う。いや、そればかり
201
二
都市化の進展とペンドラー層の生成

ベルリン環状鉄道網の拡充

ベルリン環状鉄道網の拡充として、軽便鉄道をとりあげず、ベルリン、ゲルリッツ線の三路線がある（図5-1参照）。そこで、本章においては、前二者の路線に止まることとしたい。さて、のちにベルリン＝アンハルト鉄道社は、トーディン（Schönefeld）＝ムッケンベルク（Luckenwalde）＝ツァッセン＝デッサ（Dessau）を通るベルリン＝ケーテン（Cottbus）＝ルッケンヴァーデン間の鉄道路線を通じての路線を調整するための認可を、一八三九年に得る。この会社は、一八四一年の営業開始後だんだん路線の拡充に着手し、一八五九年、ウィーンにまで達する国際的接続を実現する。こうしたなかで、アンハルト駅は、中欧の南部・南西方面をならむ交通の要衝としての地位を獲得することになるのである。当該鉄道の国営化は、他路線同様一八四八年二年のことだった。

次に、ツァッセン（Cottbus）＝パルト（Baruth）＝グローツンハイム（Großbenbraun）＝モーリッヒブルク（Moritzburg）＝マリー＝エンフェルデ（Mariental）＝マーゼロ（Mahlow）＝ラングスドルフ（Rangsdorf）＝マリエンデル（Mariendorf）＝シュートエンデ（Zehlendorf）＝ツァッセンの各地に停車場が設けられた点に、該路線がベルリン＝アンハルト路線にとって持つ重要な意義がある。ベルリン＝ドレスタン間鉄道路線の経由で、ツァッセン地域を含む各地への交通を促進する効果は、明らかである。
図 5-1 テルトウ郡と南北縦貫鉄道

第五章 ベルリン圏の都市化と近郊ゲマインデの自治

道は、一八七一年に動き出した「ベルリン環状線」と一八七六年に接続され、ベルリン圏における鉄道網の整備・拡充の一環を支えるものであった。グロイツェンの手に落とされるペルリンの鉄道網は、特にその役割を果たすものであった。これにより、以下の事実が無視されるべきではない。それは、クレムスドルフ（Krummes）の砲兵隊射撃場との軍事的な関連である。この射撃場は、独仏戦争後のフランスからの補償金によって一八七年に建設されたものだった。これに伴って、ベルリン・ドレスデン間の三番目の線路の敷設が迫られる。これに加えて、鉄道大隊（Bayerische Eisenbahnbataillon）が同年夏までに、この射撃場をツェッセンに接続する支線の建設を終えるのである。鉄道の建設は、ベルリン圏の都市化の要因である。ツェッセン南西部の地にあって、クレムスドルフのほかシュペーレンベルク（Spandau）とクラウスドルフ（Krummes）にも専用の停車場を持ち、ドイツ参謀本部の直下に置かれたのであった。鉄道の建設は、ペルリン圏の都市化の要因である。このようにして、軍事上の必要に迫られて推進された側面も併せ持つものだったこと、見失われてはならないであろう。

三本の南北縦貫鉄道路の敷設が、ベルトント郡の農村社会に与えた影響は、絶大であった。たとえば、一八七〇年頃ツェッセンからベルリンまで郵便馬車で出かけるには四時間も費やしたのだが、ツェッセン南部西部の地にあっては、クレムスドルフの都市化の要因である。ツェッセン南西部の地にあって、クレムスドルフのほかシュペーレンベルク（Spandau）とクラウスドルフ（Krummes）にも専用の停車場を持って、ドイツ参謀本部の直下に置かれたのであった。鉄道の建設は、ペルリン圏の都市化の要因である。このようにして、軍事上の必要に迫られて推進された側面も併せ持つものだったこと、見失われてはならないであろう。ハウゼンの二〇世紀初期ににおけるベルリンの近郊への成長は、ひとりその土地ののみにとっては決してなかった。
後篇 ドイツ都市農村連続体の歴史的個性

表5-1 ベンダー労働者の総数

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>近郊から都市へ</th>
<th>都市から近郊へ</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>人数（人）</td>
<td>206,535</td>
<td>72,479</td>
<td>279,014</td>
</tr>
<tr>
<td>比率（％）</td>
<td>74.02</td>
<td>25.98</td>
<td>100</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）M. Broesike, Binnenwanderungen, S. 44 の叙述と統計表より作成。

図5-1からわかるところ、アングル線とオスティ線にそれぞれ位置し、ベルリンか
らの距離もほぼ等しいのみのトーベンとツォッセンに代表される鉄道線路沿いの数多くの村や町
が、多かれ少なかれ首都ベルリンとの結びつきを強め、その影響下に巻き込まれたものである。

表5-1からグラフでみたベングラ搭乗者の空間分布の状況を示す。

2 ベンダー労働者の統計的概観

ベンダー・ハノ・ファ・キールを初め合計二のプロイセンの大都市・工業的中都市における
ベンダー労働者の形成の点で、それは、一八九一年一月一日、首都圏に導入された制安の「近郊
運賃」に優るとも劣らぬ大きな効果を上げたのであった。

(1) 二世紀初頭期のベンダーについて、ブレゲ（M. Broesike）は、それら全体の合計数がニ

250
表 5-2 ベンドラー労働者の男女別比率
（単位：%）

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>近郊から都市へ</th>
<th>都市から近郊へ</th>
<th>全体</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>男性</td>
<td>85.80</td>
<td>88.13</td>
<td>86.41</td>
</tr>
<tr>
<td>14.20</td>
<td>11.87</td>
<td>13.59</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>100</td>
<td>100</td>
<td>100</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(出典) M. Broesike, Binnenwanderungen, S. 44, の叙述と統計表より作成。
後篇 ドイツ都市農村連続体の歴史的個性

表 5-3 ペンドラー労働者の通勤距離

<table>
<thead>
<tr>
<th>距離</th>
<th>近郊から都市へ</th>
<th>都市から近郊へ</th>
<th>全体</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1～3km</td>
<td>13.90</td>
<td>8.90</td>
<td>12.60</td>
</tr>
<tr>
<td>3～7</td>
<td>66.09</td>
<td>84.76</td>
<td>70.94</td>
</tr>
<tr>
<td>7～10</td>
<td>10.11</td>
<td>4.17</td>
<td>8.56</td>
</tr>
<tr>
<td>10～20</td>
<td>8.12</td>
<td>1.53</td>
<td>6.41</td>
</tr>
<tr>
<td>20km以上</td>
<td>1.78</td>
<td>0.64</td>
<td>1.49</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>100</td>
<td>100</td>
<td>100</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）M. Broesike, Binnenwanderungen, S. 44, の叙述と統計表より作成。

表 5-4 遠距離ペンドラーの総対数

<table>
<thead>
<tr>
<th>距離</th>
<th>近郊から都市へ</th>
<th>都市から近郊へ</th>
<th>全体</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>20～25km</td>
<td>1,326</td>
<td>206</td>
<td>1,532</td>
</tr>
<tr>
<td>25～30</td>
<td>1,777</td>
<td>125</td>
<td>1,902</td>
</tr>
<tr>
<td>30km以上</td>
<td>574</td>
<td>141</td>
<td>715</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>3,677</td>
<td>472</td>
<td>4,149</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典）M. Broesike, Binnenwanderungen, S. 44, の叙述と統計表より作成。

ここで、テルトゥ郡に関する以下の事実が確認されなかったことが判明するのである。表 5-1 に記載のミッテンヴァルデ（Mittewald）のリックストロフを経る軽便鉄道の運行距離は、約二七キロメートルである。22 トレインとケーニヒス・ヴスター・ハクゼンの数値が、当然、注目されているべきである。人々、それらの方々の通勤によるペンドラー、同様に見られたのでは無く、特に、一、六、三万人という、それ自体として一定の意味を持つ定量的な存在形態となっているのである。いや、そればらで、約二百五十二ページ。
表 5 - 5 テルトウ郡のペンドラー
（単位：人）

<table>
<thead>
<tr>
<th>表示</th>
<th>数値</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ケーペニク</td>
<td>395</td>
</tr>
<tr>
<td>テルトウ</td>
<td>33</td>
</tr>
<tr>
<td>トレピーン</td>
<td>17</td>
</tr>
<tr>
<td>アードラースホフ</td>
<td>685</td>
</tr>
<tr>
<td>アルト・グリーニッケ</td>
<td>108</td>
</tr>
<tr>
<td>ブリッツ</td>
<td>541</td>
</tr>
<tr>
<td>ブー</td>
<td>14</td>
</tr>
<tr>
<td>ドイチシュヴィルメルスドルフ</td>
<td>3,724</td>
</tr>
<tr>
<td>アイヒヴァルデ</td>
<td>73</td>
</tr>
<tr>
<td>フリーデナウ</td>
<td>1,416</td>
</tr>
<tr>
<td>グローレ・リヒターフェルデ</td>
<td>1,604</td>
</tr>
<tr>
<td>グリューナウ</td>
<td>200</td>
</tr>
<tr>
<td>グルーネヴァルト</td>
<td>262</td>
</tr>
<tr>
<td>ヨハニスタール</td>
<td>181</td>
</tr>
<tr>
<td>ケーニヒス・ヴスターハウゼン</td>
<td>37</td>
</tr>
<tr>
<td>ランクヴィッツ</td>
<td>302</td>
</tr>
<tr>
<td>リヒチラーデ</td>
<td>15</td>
</tr>
<tr>
<td>マリーエンドルフ</td>
<td>380</td>
</tr>
<tr>
<td>マリーエンフェルデ</td>
<td>50</td>
</tr>
<tr>
<td>ノイエンドルフ</td>
<td>52</td>
</tr>
<tr>
<td>ニーダー・シェーネヴァイデ</td>
<td>144</td>
</tr>
<tr>
<td>ノヴァヴェーレ</td>
<td>118</td>
</tr>
<tr>
<td>ルード</td>
<td>13</td>
</tr>
<tr>
<td>シュメルゲンドルフ</td>
<td>317</td>
</tr>
<tr>
<td>シュメックヴィッツ</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td>シュテーグリッツ</td>
<td>2,428</td>
</tr>
<tr>
<td>テムベルホーフ</td>
<td>1,324</td>
</tr>
<tr>
<td>トレーブト</td>
<td>894</td>
</tr>
<tr>
<td>ヴァンゼー</td>
<td>40</td>
</tr>
<tr>
<td>ヴェーレンドルフ</td>
<td>642</td>
</tr>
<tr>
<td>ツォイチン</td>
<td>26</td>
</tr>
<tr>
<td>オスドルフ</td>
<td>17</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>16,083</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（出典） Prewische Statistik, Heft 177, Teil II, S. 471, より作成。
表 5-6 ベンダーの生業

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>合併ゲマインデ</th>
<th>周域ゲマインデ</th>
<th>鉄道ゲマインデ</th>
<th>比率（％）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>農業・畜産</td>
<td>141</td>
<td>113</td>
<td>22</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>鉱工業</td>
<td>5,686</td>
<td>4,212</td>
<td>497</td>
<td>977</td>
</tr>
<tr>
<td>商業・保険</td>
<td>679</td>
<td>417</td>
<td>56</td>
<td>206</td>
</tr>
<tr>
<td>家内仕事</td>
<td>717</td>
<td>544</td>
<td>24</td>
<td>149</td>
</tr>
<tr>
<td>軍人・牧師等</td>
<td>87</td>
<td>61</td>
<td>9</td>
<td>17</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>7,311</td>
<td>5,347</td>
<td>608</td>
<td>1,356</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(出典) Preußische Statistik, H. 177, Teil II, S. 496 u. 508, より作成。
かつてのシュールヒッテルクとドイツメルスドルフの経緯 以下に記すかんなり激しい抗議が表れていたのである。もちろんこの地域において、同類のゲマインデであったと言われ、シュールヒッテルクは、ハイドン・デーヴルの合併（Germanisation）を提案する。それは、ドイツギルメルスドルフで、自立したゲマインデとしての誇りを放棄して、自分に合併してくれれば、シュールヒッテルクが全額支弁してもよいとの交渉条件を付して提示さ
れ、することだった。こうして、ドイツギルメルスドルフの無償整備という一種の経済的な実を取るべきか否かの困難な二択一を突きつけられたのである。

三 近郊ゲマインデにおける自治の諸相
第五章 ベルリン圏の都市化と近郊ゲマインデの自治

| 表5-7 マリーエンドルフ警察管区の構成 |
|-----------------|------|
| 住民数（人） | 面積（ha） |
| マリーエンドルフ | 11,169 | 1,111 |
| マリーフェルデ | 3,252 | 950 |
| ランクヴィッツ | 8,067 | 698 |

(注) 原典の日付は1908年3月1日。

2 マリーエンドルフによる警察管区の新設

マリーエンドルフ警察管区（Amtsbezirk Mariendorf）は、マリーエンドルフとマリーフェルデ、ランクヴィッツ、マルティンゲルを切り離して、新たに設立されたものとされる。この警察管区は、ベルリン市の一部を含む非常に広い範囲を管轄することになる。

この管区の創設は、ベルリン市の都市化が進む中で、近隣のゲマインデに対する制限を緩和し、自治権を拡大するための重要な一歩である。管区の構成は、住民数と面積の基準に基づいて、ベルリン市全体の均衡を図るためのものである。

この管区の組織は、地方自治法に基づき、地方自治体の役割を果たす。これが、ベルリン市と近隣のゲマインデの協調を図り、共同の課題を解決するための手段である。

マリーエンドルフは、ベルリン市と近隣のゲマインデとの間で、交流を深め、相互理解を進めようとしている。これにより、地域の統合が図られ、より効率的な治理が実現されることが期待されている。

また、この管区の創設は、地方自治の発展を促進し、地方自治体の自主性を高める一助となるものである。これにより、地域の自治がより一層の発展を遂げるものと期待される。

今後のこの管区の活動は、地方自治の発展を支え、地域の統合を図るとともに、地方自治体の協力体制の強化を図ることとなる。
後篇 ドイツ都市農村連続体の歴史的個性

表 5-8 負担金の著増
（単位：マルク）

<table>
<thead>
<tr>
<th>年</th>
<th>金額</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1899</td>
<td>4,680</td>
</tr>
<tr>
<td>1903</td>
<td>7,120</td>
</tr>
<tr>
<td>1906</td>
<td>17,700</td>
</tr>
</tbody>
</table>


59 一九〇六年二月三日付のマリーエンドルフ市議会の案内において

区を作ることを目的としていた内務大臣に請願する。一九〇六年二月三日付のマリーエンドルフ市議会の案内において、内務大臣宛ての文書によれば、この請願の必要を

示すものであり、純都市的性格を示すに従って生じたを同市のインペリャル（九〇年代より以上の高額の地を売却するもの）の一つに含まれない。このニーグマインデに以下に述べるのようなものである。

迎えつつあるベルリン近郊の一区にかかわらない。他のニーグマインデよりも以下の高額

を拠出してきた警察管区の負担金も、表 5-8 記載のとおり、この数年間で著しく増加している。その上、一九〇六年度の管区の維持費は、この一区、七〇〇〇マルクの負担金

を作ったことがある前例を引き合いに出しながら、固有の警察管区の形成、ならびに、マリーエンドルフは、シュメルゲンドルフやグルーネアーヴァルトのように、自分より狭小なマインデでさえ、すでに自前の警察管区を強制要請するものである。

アッフェンバッハ（Adolf von Achenbach）は、郡会の議を経て、同年三月一日、上述の請願を妥当なものと判断する。これを受けたボツダム（Regierungsbezirk Potsdam）の賛意の表明（三月二日）後、内務大臣は、三月二日、当該警察管区の新設を認可したのである。こうして、ランクヴァッツの抵抗もむなしく、マリーエンドルフは、
新しい警察管区の設立に成功したのだった。

マリーエンフェルデの排水設備

次に、ヨーロッパ都市制度における「第一級の文化革命」たる意義を担った排水溝整備上のゲマインデの努力の跡を、前節に登場したマリーエンフェルデに止めて、概観しておこう。ベルリン・ドレステン線と軍用鉄道が走り、ベルトゥン河を運ぶ当該ゲマインデは、九〇〇ヘクタールの規模で、かつ南西部のハイデックルと鉄道に利用されていた。マリーエンフェルデは、また、ベルトゥン河の貫流によって高い実績を誇った排水設備は、ベルリンの近郊ゲマインデにおいて高い知られているゲマインデである。

さて、ベルリンの近郊ゲマインデにおいて高い実績を誇った排水設備は、ベルリンの近郊ゲマインデのうち、そのうちの約二〇〇ヘクタールの河川を二つに分けて実行するシステムが、これであった。また、下水灌漑用地」は、住民二〇〇人当たり一〇〇ヘクタールの流し場である。公共の福祉が向上させられ、借金ももののかは、進んで引き受けることを決したのだった。

ゲマインデの負担は負担として、非営利的なようになされて新しい設備が作られたからには、言葉までもなく、そこから直接利益を得る世帯あるいは借家人への費用の転嫁が図られることがある。「接続義務は、そして接続料・使用料」の徴収が、それである。だが、社会政策的な、あるいは衛生政策上の配慮が必要だったから、このような費用の転
後篇 ドイツ都市農村連続体の歴史的個性

嫁は、不完全な状態にとどまるほかなかった。一例を示そう。マリーエンフェルデに存する「良き羊飼い」(50)。

4 ガーツベツィルクのゲマインデへの合併

ゲマインデの能動性を示す証左と言える合併(Verwaltungsvertrag)の事例を、一例ほど挙げておこう。

月二日付の内務大臣文書は、ガーツベツィルクがゲマインデに吸収されて消滅する二つの事案を、王が裁可した。
第五章 ベルリン圏の都市化と近郊ゲマインデの自治

ことを、ポツダム県知事宛てに伝えている。それは、第一に、ゲーツペツィルク・ヴェルベン (Wetten) のゲマイノーベルクエンデツィルク・グリーニョック (Gemeinde) への合併であり、第二に、ゲーツペツィルク・ノイエ・ミューレ (Neue Mühl) のゲマイノーベルクエンデツィルク・グリーニョック (Gemeinde) への合併である。同銀行は、この農場の市街地への分割と販売を企画しており、それゆえ、該ゲーツペツィルクは、警備区南の学校・教会ゲマイノーベルクエンデツィルク (Gemeinde) の手に落ちる。

八人の住民を持ち、一九九八年、ベルリンの合併の一件であった。まことに、前書記者について、四つ四との実験を持つ点も、勘案されてるべきである。次に、ケーニヒス・ヴェスター・ハーゼンの事例についてであるが、ノイエ・ミューレ、これがゲマイノーベルクエンデツィルク枚数、二八二二人、その大半は、一五五〇〇ヘクタール強である。このゲマイノーベルクエンデツィルクが、住民数二七八八人を擁し、一五五〇〇ヘクタール強を数えたケーニヒス・ヴェスター・ハーゼンに統合されたので、ゲマイノーベルクエンデツィルクのラントゲマイノーベルクエンデツィルクの編成替え（Gemeinde）も士気を喪失するまでに至った。ケーニヒス・ヴェスター・ハーゼンの合併は、所領管理を続ける意欲を失う向けた。ゲーツペツィルクの細分化は、その一部をわすかに、前書記者について、三つ三の合併とは、合併の数を数えたのか、ケーニヒス・ヴェスター・ハーゼンの土地所有有には、一九二五年に、前書記者について、四つ三の合併とは、合併の数を数えたのか、ケーニヒス・ヴェスター・ハーゼンの土地所有有には、一九二五年に、前書記者について、三つ三の合併とは、合併の数を数えたのか、ケーニヒス・ヴェスター・ハーゼンの土地所有

後篇 ドイツ都市農村連続体の歴史的個性

5 ケーニヒス・ヴスターハッセンの力量と「ゲマインデ自由」

当地における一九世紀の自治的ゲマインデ行政の歴史を跡づける上で、文献上確認される最初の日付は、一八八六年までさかのぼる。宿場町長のウィルヘルム（Wielbach）が同年、ゲマインデ長（Ortsvorsteher）に就任したことが記録に残っているからである。その後、二人の後任を経て、クレーフェルト（Philipp Krefeld）が一八四三年にこの任を襲い、一八七八年まで三年間の永年にわたって、同職にとどまる。彼はケーニヒス・ヴスターハッセンにおけるゲマインデ長の最長在任を誇ったのである。彼の就任後数年経過した一八四七年五月三日に、フレッヘン（Frechen）はケーニヒス・ヴスターハッセンの半額足らずしか出費していないことが判明する。当該ゲマインデには、ゲマインデのノヴァヴェース（Novawes）が、ほぼ同額を支出し、ベルリン近郊のヴィルヘルムスドルフとテムペルホーフは、ケーニヒス・ヴスターハッセンの半額足らずしか出費していないことが判明する。
第五章 ベルリン圏の都市化と近郊ゲマインデ自治

有の「ゲマインデ財産」がなかったため、必要事項の費用は、もちろん、住民自身の出資によってまかなわれたのである。ゲーニヒス・ヴスターハーゼンは、一九世紀中葉当時すでに相当な財政的力量を持ちあわせていたゲマインデだっ

しかし、こうした見方だけでは、なお一見面であることは言うまでもなく、同時に他方では、以下の事実が忘れら

でる。一八七四年一年度の収支を一例に挙げよう。その内訳を見ると、学校維持と教職員の給与の額で、約三七

ターラーにも達し、両給費は、全額の三分の二を優先的に支払っている。これに対し、街路建設費は、一○ターラーにすぎなかったのである。先述の「給付行政」の充実に示される「地方自治の古典時代」の到来のためには、なお「郡条例」と「ラントゲマインデ条例」の制定・施行を待たなければならなかった。

はたして、一八七三年制定の「プロイセン郡条例」が、一八七年四年一年度の「プロイセン・ヴスターハーゼンの所有者たるプロイセン王宮のゲマインデに対する警察高権（Polizeihöhe）の在任中のことであった。例の紹介すると、ベルリンの機械製造会社が、ゲーニヒス・ヴスター
第五章 ベルリン圏の都市化と近郊ゲマインデの自治

された負担は、その結果、一九九一年の九〇〇〇万マルクから、一九九一年の二億〇〇〇〇万マルクへと激増したのである。

で、アイヒヴァルデは、高校についていた郡の助成を見逃し、日付の一願書によれば、そこにには、ゲマインデのレゾンデートルをかけた次のようなものが絡みが認められていた。

・ゲムナージウムの開設は、ひとりアイヒヴァルデのみの利益と言えるよりもむしろ、シュメックヴィッツ（Schmückewitz）を含む近隣ゲマインデ全体にとっての死活問題にほかならない。一九〇九年一〇月三〇日の開発の手が、これら居住ゲマインデのすみずみまで及ぶとすれば、健康な居住地はことごとくその姿を消すに違いない。ケーハール（Kopitz）やヴィルダウのように、ほとんど工業企業にいろいんされ尽くされたゲマインデに、これに加えて、工業企業の活動からもはや自粛ではありえないグリューナウ（Grünaue）の惨状を見るにつけ、居住ゲマインデが高級住宅街として維持されて行く利点はまことに大きくて、言うならなければならないのである。それゆえ、就学児童が国学校の卒業後、外部へと通学する事態は、決して好ましいものではない。高等学校の設立が急がれるのである。それが、アーデラースホーフ（Aderhöfe）やニーダーシューレーネヴァイデ（Niederschönwede）にさらしてのアーデラースホーフに違いない。ケーハールやヴィルダウのように、ほとんど工業企業にいろいんされ尽くされたゲマインデに、これに加えて、工業企業の活動からもはや自粛ではありえないグリューナウ（Grünaue）の惨状を見るにつけ、居住ゲマインデが高級住宅街として維持されて行く利点はまことに大きくて、言うならなければならないのである。それゆえ、就学児童が国学校の卒業後、外部へと通学する事態は、決して好ましいものではない。高等学校の設立が急がれるのである。それが、アーデラースホーフ（Aderhöfe）やニーダーシューレーネヴァイデ（Niederschönwede）にさらしてのアーデラースホーフに違いない。ケーハールやヴィルダウのように、ほとんど工業企業にいろいんされ尽くされたゲマインデに、これに加えて、工業企業の活動からもはや自粛ではありえないグリューナウ（Grünaue）の惨状を見るにつけ、居住ゲマインデが高級住宅街として維持されて行く利点はまことに大きくて、言うならなければならないのである。それゆえ、就学児童が国学校の卒業後、外部へと通学する事態は、決して好ましいものではない。高等学校の設立が急がれるのである。それが、アーデラースホーフ（Aderhöfe）やニーダーシューレーネヴァイデ（Niederschönwede）にさらしてのアーデラースホーフに違いない。ケーハールやヴィルダウのように、ほとんど工業企業にいろいんされ尽くされたゲマインデに、これに加えて、工業企業の活動からもはや自粛ではありえないグリューナウ（Grünaue）の惨状を見るにつけ、居住ゲマインデが高級住宅街として維持されて行く利点はまことに大きくて、言うならなければならないのである。それゆえ、就学児童が国学校の卒業後、外部へと通学する事態は、決して好ましいものではない。高等学校の設立が急がれるのである。それが、アーデラースホーフ（Aderhöfe）やニーダーシューレーネヴァイデ（Niederschönwede）にさらしてのアーデラースホーフに違いない。ケーハールやヴィルダウのように、ほとんど工業企業にいろいんされ尽くされたゲマインデに、これに加えて、工業企業の活動からもはや自粛ではあるのである。
のゲマイエンデに即して熟るすれば、こうである。すなわち、ベルリンに最も近いケーニヒスベルクは、「工業ゲマイ
エンデ（Industriegemeinde）と化した。アイヒヴァルデは、「住宅街ゲマイエン
デ（Stadtgemeinde）である。そして、ベルリンか
ら最も遠いケーニヒス・ヴェスターハウゼンは、農村の静穏なたたね生活から覚醒させられ、「ベルリンの近郊
への仲間入りを比較的近時になってようやく果たした。言わば「新近郊ゲマイ
エンデ（Neuburger Gemeinde）にほかなり
と。

1 テルトウ運河の建設と近郊ゲマイエンデの貢献

テルトウは、一九〇〇年三月五日の郡会において、その竣工を決定していた。建設費については、ニッポニ
西プロイセンにおける反ポーランドの国策遂行の道具としての郡長の働きに端的に示される国家的業務を司る「秩序
行政」（Ordnungsverwaltung）と、自治体固有の「給付行政」の違いに止目しながる、運河建設を、後者に属する重
要課題の代表例の一つに挙げている。テルトウ運河は、クライス（郡）自治の「重性格」（Doppelgesetz）すなわち、一八八〇年代のポーレンが
も全額を郡自身が負担したが、その後のニッポニ万マルクは、公債発行によって調達されることとなった。

研究史を続くならば、われわれは、さしつかえ以上の事実を確認することができるであろう。そして、これに対するゲマイ
エンデの関与は、あったのか、なかったのか、クライスの役割を絶対的に重視してきた従
来の研究史を補完するに足る論点は、本章が追ってきた「ゲマイエンデ自治」の観点から見て、全くな
くないと、はたして
第五章 ベルリン圏の都市化と近郊ゲーマインデの自治

### 表 5-9 超過額のゲーマインデ分担

<table>
<thead>
<tr>
<th>ベルリン圏都市圏</th>
<th>土地面積 (ha)</th>
<th>土地価格 (M)</th>
<th>土地価格 の比率 (%)</th>
<th>土地価格による割当 (M)</th>
<th>郡会委員会想定額 (M)</th>
<th>償還額0.5％を含む場合 (M)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>リヒターフェルデ</td>
<td>1,675</td>
<td>50,936,000</td>
<td>20.7</td>
<td>54,544.5</td>
<td>68,672.25</td>
<td>91,080.5</td>
</tr>
<tr>
<td>シュテーグリッツ</td>
<td>605</td>
<td>25,750,000</td>
<td>10.5</td>
<td>27,667.5</td>
<td>34,833.5</td>
<td>46,200.5</td>
</tr>
<tr>
<td>ランクヴィッツ</td>
<td>723</td>
<td>25,396,000</td>
<td>10.3</td>
<td>27,140.5</td>
<td>34,170</td>
<td>45,320.5</td>
</tr>
<tr>
<td>マリーエンドルフ</td>
<td>1,194</td>
<td>19,324,000</td>
<td>7.9</td>
<td>20,816.5</td>
<td>26,208.25</td>
<td>34,760</td>
</tr>
<tr>
<td>ブリッツ</td>
<td>1,325</td>
<td>12,690,000</td>
<td>5.2</td>
<td>13,702</td>
<td>17,251</td>
<td>22,880</td>
</tr>
<tr>
<td>チュベルホーフ</td>
<td>602</td>
<td>11,735,000</td>
<td>4.8</td>
<td>12,648</td>
<td>15,924</td>
<td>21,120</td>
</tr>
<tr>
<td>セーヘンドールフ</td>
<td>1,595</td>
<td>11,510,000</td>
<td>4.7</td>
<td>12,384.5</td>
<td>15,592.25</td>
<td>20,680</td>
</tr>
<tr>
<td>テルトウ</td>
<td>1,520</td>
<td>9,196,000</td>
<td>3.7</td>
<td>9,749.5</td>
<td>12,274.75</td>
<td>16,280</td>
</tr>
<tr>
<td>王有林グリューヌナウ</td>
<td>1,345</td>
<td>8,070,000</td>
<td>3.3</td>
<td>8,695.5</td>
<td>10,947.75</td>
<td>14,520</td>
</tr>
<tr>
<td>フリーダウ</td>
<td>320</td>
<td>8,000,000</td>
<td>3.2</td>
<td>8,432</td>
<td>10,616</td>
<td>14,080</td>
</tr>
<tr>
<td>ルード</td>
<td>1,110</td>
<td>6,660,000</td>
<td>2.65</td>
<td>6,982.75</td>
<td>8,791.5</td>
<td>11,660</td>
</tr>
<tr>
<td>クライン・マハノ</td>
<td>1,133</td>
<td>6,158,000</td>
<td>2.5</td>
<td>6,587.5</td>
<td>8,293.75</td>
<td>11,000</td>
</tr>
<tr>
<td>シュマルゲンドルフ</td>
<td>230</td>
<td>5,750,000</td>
<td>2.4</td>
<td>6,324</td>
<td>7,962</td>
<td>10,560</td>
</tr>
<tr>
<td>アルト・グリーンカ</td>
<td>740</td>
<td>5,700,000</td>
<td>2.3</td>
<td>6,060.5</td>
<td>7,630.5</td>
<td>10,120</td>
</tr>
<tr>
<td>トレップト</td>
<td>468</td>
<td>5,616,000</td>
<td>2.2</td>
<td>5,796</td>
<td>7,297.25</td>
<td>9,678.5</td>
</tr>
<tr>
<td>シュターブルフ</td>
<td>1,140</td>
<td>5,060,000</td>
<td>2.0</td>
<td>5,270</td>
<td>6,635</td>
<td>8,800</td>
</tr>
<tr>
<td>ヴィルヘルムスドルフ</td>
<td>163</td>
<td>4,075,000</td>
<td>1.6</td>
<td>4,216</td>
<td>5,308</td>
<td>7,040</td>
</tr>
<tr>
<td>マリーエンフラウ</td>
<td>970</td>
<td>3,880,000</td>
<td>1.5</td>
<td>4,320.5</td>
<td>4,976.25</td>
<td>6,600</td>
</tr>
<tr>
<td>ブーコ</td>
<td>782</td>
<td>3,708,000</td>
<td>1.4</td>
<td>3,689</td>
<td>4,644.5</td>
<td>6,160</td>
</tr>
<tr>
<td>王有林ポツダム</td>
<td>566</td>
<td>3,396,000</td>
<td>1.3</td>
<td>3,245</td>
<td>4,313</td>
<td>5,720</td>
</tr>
<tr>
<td>北シュターヴアイデ</td>
<td>130</td>
<td>3,120,000</td>
<td>1.0</td>
<td>2,982</td>
<td>3,309</td>
<td>3,300</td>
</tr>
<tr>
<td>ルード所領</td>
<td>314</td>
<td>1,844,000</td>
<td>0.75</td>
<td>1,976.25</td>
<td>2,488</td>
<td>3,300</td>
</tr>
<tr>
<td>王領地デーレム</td>
<td>260</td>
<td>1,560,000</td>
<td>0.6</td>
<td>1,581</td>
<td>1,990.5</td>
<td>2,640</td>
</tr>
<tr>
<td>アードラースホーフ</td>
<td>130</td>
<td>1,560,000</td>
<td>0.6</td>
<td>1,581</td>
<td>1,990.5</td>
<td>2,640</td>
</tr>
<tr>
<td>ギューターグッツ</td>
<td>420</td>
<td>840,000</td>
<td>0.4</td>
<td>1,054</td>
<td>1,327</td>
<td>1,760</td>
</tr>
<tr>
<td>クライン・グリューヌナウ</td>
<td>68</td>
<td>744,000</td>
<td>0.3</td>
<td>790.5</td>
<td>995.5</td>
<td>1,320</td>
</tr>
<tr>
<td>オスドルフ</td>
<td>264</td>
<td>528,000</td>
<td>0.3</td>
<td>790.5</td>
<td>995.5</td>
<td>1,320</td>
</tr>
<tr>
<td>ヨハニスタール</td>
<td>66</td>
<td>792,000</td>
<td>0.3</td>
<td>790.5</td>
<td>995.5</td>
<td>1,320</td>
</tr>
<tr>
<td>グリューナウ</td>
<td>116</td>
<td>696,000</td>
<td>0.3</td>
<td>790.5</td>
<td>995.5</td>
<td>1,320</td>
</tr>
<tr>
<td>ルーレンスドルフ</td>
<td>300</td>
<td>600,000</td>
<td>0.25</td>
<td>658.75</td>
<td>829.25</td>
<td>1,100</td>
</tr>
<tr>
<td>ルールスドルフ所領</td>
<td>300</td>
<td>600,000</td>
<td>0.25</td>
<td>658.75</td>
<td>829.25</td>
<td>1,100</td>
</tr>
<tr>
<td>ノイエンドルフ</td>
<td>17</td>
<td>204,000</td>
<td>0.1</td>
<td>263.5</td>
<td>332</td>
<td>440</td>
</tr>
<tr>
<td>ヴァンゼー</td>
<td>15</td>
<td>180,000</td>
<td>0.1</td>
<td>263.5</td>
<td>332</td>
<td>440</td>
</tr>
<tr>
<td>クライン・グリューヌナウ</td>
<td>6</td>
<td>72,000</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
</tr>
<tr>
<td>シュターブルフ</td>
<td>42</td>
<td>84,000</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
<td>—</td>
</tr>
<tr>
<td>100</td>
<td>263,500</td>
<td>331,750</td>
<td>440,000</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）1） ドッペルの分担額を含む。
2） グーツベルツィルク・ギューターグッツの分担額を含む。
3） オスドルフはハイマースドルフを含む所領。
後篇 ドイツ都市農村連続体の歴史的個性

断言できるのであろう。表5-9を見よう。本表の物語ところは、一九〇〇年三月三一日付ポツダム県文書と同
年に、償還額が七〇万マルクを超える場合の負担については、『都市条例』第一七六条第二項の過重負担
に、適用されている。当然、その過重負担を引き受けて見えるべきである。すなわち、排水設備もしくは交通路として
地内にある各ゲマインデの土地の価格に基づいて查定される。こうして作成された各ゲマインデの分担額も、第一位のものから順に列記していくと、一位、リヒター・フェルデ、二位、シュテグリッツ、そして、ランクヴィッツ、マリーエンドルフ、プリッツ、テムペルホーフ、ツェーレンドルフと続く七位までが、運河沿いの有力ゲマインデだったことが分かる。第八位にようやく顔を出すのが、すでに都市資格を備えたテルトウ市である。

とありますが、本表を全体として見るならば、超過額分担の点での近郊ゲマインデの関与と相当な貢献は、明らかである。すなわち、建設のための重要な使命を引き受けたのである。総じて、本節が発掘された一連の諸事実は、プロイセン史におけるゲ

マインデの能動性、つまりは、『ゲマインデ自治』あるいは『ゲマインデ自由』の積極的・肯定的評価に繋がりうる。無視すべきからざる素材を少からず提供している。と言わなければならないであろう。
第5章 ペルリン圏の都市化と近郊ゲマインデの自治

四

結

語

テルトウ郡の南北縦貫三路線に代表される鉄道建設とその発展は、ペルリン圏都市化の牽引車たる歴史的役割を果たすものであった。それは、ペルリン圏都市化の反面、農村社会に絶大な影響も及ぼし、同郡の「都市農村連続体」としての個性的特徴をますます強化した。そして、この都市化によって生み落とされた一九世紀末期のペンドラー労働者の存在により、各地で豊かに開かされていた時期でもあったのである。

一方、当時、プロイセンは、「マッツェラートの言う「地方自治の古典時代」をを迎え、それは、ジェンツェルの「地方自治の古典時代」から果敢に脱却し、マリエンフェルデは、排水設備を整えて、ゲマインデ住民の福祉を厚生増進の実を上げるに至る。マリエンフェルデが造られる新たな警察管区を作って、その自主性を強めた。$(\text{マリエンフェルデは、ガマインデとアムトの「二重行政」から果敢に脱却し、マリエンフェルデは、排水設備を整えて、ゲマイインデ住民の福祉を厚生増進の実を上げるに至る。マリエンフェルデが造られる新たな警察管区を作って、その自主性を強めた。}$

一方、当時、プロイセンは、「マッツェラートの言う「地方自治の古典時代」をを迎え、それは、ジェンツェルの「地方自治の古典時代」から果敢に脱却し、マリエンフェルデは、排水設備を整えて、ゲマイインデ住民の福祉を厚生増進の実を上げるに至る。マリエンフェルデが造られる新たな警察管区を作って、その自主性を強めた。
リヒテル、アブラハム


F. ESCHER, BERLIN, S. 211.

マッケル・ローワーは、これらの近距離ペンドララーを「Vorortspendler」と呼んでいる。ベルリンのすぐ近くに位置して、事実上すぐに同市の一都区化、もしくはベルリン都市化もしくはグライスの自覚ある一員とは言えぬゲマイデ住民の多くは、ベルリンで働いて、自分自身を「ベルリン人」（Berliner）と意識し始めている。Vorortspendler は、一箇のペンドララーやベルリン近辺のベルリン近郊のベラージュデに住む人々を指すのが、これから三つの最近地のペンドララーだけでは、全体の五割を超えたことは明らかである。Vorortspendlerは、一つの事実である。}

「統計」として、これら三つの最近地のペンドララーだけでは、全体の五割を超えたことは明らかである。Vorortspendlerは、一つの事実である。

「統計」として、これら三つの最近地のペンドララーだけでは、全体の五割を超えたことは明らかである。Vorortspendlerは、一つの事実である。
第五節 ヘシリンの感化に近域ゲインの阻害

S.144

[plaintext content]

『あるある』という言葉で、あるあるの感化に近域ゲインの阻害が

生じるという現象が、特に予測に難易をもたらすことになる。この

ことは、あるあるの感化が、近域ゲインの阻害をもたらすこと

である。
後篇 ドイツ都市農村連続体の歴史的個性

法律上、特に独立して警察管区を形成したこと。そして、他のマインツやケーニヒスベルクを付け加える（Zu)

41 内務大臣宛て一九〇六年二月三日付文書中の文言。
内務大臣宛て一九〇六年二月三日付文書中の文言。

42 一九〇〇年時点の大いしい警察管区を形成し、その土地にはなさなかった。この点が条件であった。Vgl. L. Enders, Ortsbildung, S. 93 u. 249.

43 ダイナミズム・ランゲマンの建築監督官（Baurat）の手に成った一九〇七年一月三〇日付文書にある。


45 Vgl. W. Hofmann, Aufgaben, S. 593.


49 Vgl. C. Engel u. W. Hans, Quellen, S. 541-546.
後篇 徳川都市農村連続体の歴史的個性

強く発達していた事実が、記憶にとどめられなければならないうえ、エンゲルスが「顧念なまでに保守的な」からなる東部諸州の農村地域を、クライペダーの新しい時代の経済的状態、の古典的把握にせよ、また、エンゲルスの説で構成されている伝統的の見解である。

通説は、さらに、東部諸州における広範な大土地所有者階層が、自分のクライスの福利厚生を向上させるべき通説的見解である。これによっても、一八七二年の是が前時代からすでに、クライスのシュテンデグ、独自の特率で一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇　
第五章 ベルリン周の都市化と近郊ゲマインデの自治

エンゲルスの一元論難は逆に、土地所有を媒介環として、ラントラートと彼のクライスとの個人的かつ密接な結びつきになり求めるなければならなかったのである。このように、ウェルツは、彼の言う「自治的共同体組織」による国家・社会の基礎組織としての自治体説を、新たな価値を当ててドイツ史から掘り起こし、現代まで蘇らせようとする打算を秘めた。また、彼は、硬直した伝統的なプロイセン・イメージの転換ないしは拡張を図ることで、ドイツ史の段階論に、プロイセンやその他の力点を置き換える構造の成立を求めていた。この「ゲマインデ」の力が、ドイツ史理解の重要な場を形成していた。
後篇 ドイツ都市農村連続体の歴史的個性

ローゼンベルク（Hans Rosenberg）の視点を中心に、都市農村連続体の強化に大いに寄与したローラーの発展は都市のみに見られるというヘッター同様、都市に主眼を置く藤田氏は、「国家とゲマインデ」の政治的・言語的・心理的連続体の成長過程が視認されていくだろうか。その実相を把握するためには、ヘッターの通説の三論（Dialektik）の見地にとどまっている。それにより、都市の著書の「ゲマインデ自治の具体的諸相の実証を欠いたまま、氏自ら認めるとおり、静態的制度論」に傾いているばかりではなく、あたたかさ、アントリゲマインデにおける「上位の農民」への注目が欠落した点では、書物に先立つ

本書は、戦後歴史学のプロイセン史理解の全面批判を展開する場ではない。この点、後日別に述べるかも知れないが、おわりに、藤本健夫『社会史』第四章、藤田幸一郎『都市と市民社会—近代ドイツ都市史』青木第二部、一九八八年、第六章、北住敬一『近代ドイツ官僚国家と自治—社会国家への道』成文堂、一九九0年、はしがき、法学者研究（愛知学院大学）第二巻、第二号、一九七七年、所収、参照。なお、一言しておきたい。もとより、著者の主観的意図にすぎぬにせよ、本書は、戦後歴史学のプロイセン史理解の全面超克と新イメージの対等とに進むためにさあたって必要な中間報告的な序論的検討の一試論として、位置づけられてい
対主義時代における社会的基準化の過程は、さまざまな経過を経た結果、新たな道を拓くものである。しかし、後の政治的過程は、あくまで絶対的である。一見、絶対的で、敵対的である。これにより、自由民主同盟のものである。したがって、市民的民主的運動のための社会的基準のことがない。プロイセン絶対主義が盛んになったとき、プロイセン絶対主義の構造的な否定的役割、時代の発展に一つの重要かつ系統的な寄与をなすものなのであった。
後篇 ドイツ都市農村連続体の歴史的個性

本を構成するだけでなく、自分自身の研究課題に即して固有の方法論を踏まえて行こうとするのである。ドイツ国家論・憲法論・ドイツ国家の歴史的伝統を批判的に、だが歴史的に理解しながら、その考察のなかに取り入れねばならないであろう。このように、研究の進捗にとってもまた、味説するに足る根拠な意義を持つ言説として、より積極的に受け止めざるをえないものである。

それゆえ、研究史批判との不可分の関連のもとで、次のように言い切って大過かなろう。すなわち、一方において、あらゆる「ゾンダーウェーブルーレン」「ナレットヴェーブルーレン」「バーナートヴェーブルーレン」の全面戦略を視野に収め、西側の何れの社会政策の点での先駆性と「政治的反動および市民の不自由」を考慮してみるわけである。一方において、あらゆるナチスのあらゆる面における人間的価値を無視して、単なる政治の部品として、冷淡又は無差別に評価されざるをえないものである。

それでも、研究に於ての不可欠の前提作業とせざるをえない状況が、われわれの脳に強く迫るようになるに従い、この考察の作業を必要とする。一方において、あらゆるナチスのあらゆる面における人間的価値を無視して、単なる政治の部品として、冷淡又は無差別に評価されざるをえないものである。

それゆえ、研究史批判との不可分の関連のもとで、次のように言い切って大過かなろう。すなわち、一方において、あらゆる「ゾンダーウェーブルーレン」「ナレットヴェーブルーレン」「バーナートヴェーブルーレン」の全面戦略を視野に収め、西側の何れの社会政策の点での先駆性と「政治的反動および市民の不自由」を考慮してみるわけである。一方において、あらゆるナチスのあらゆる面における人間的価値を無視して、単なる政治の部品として、冷淡又は無差別に評価されざるをえないものである。
第五章 ベルリンの都市化と近郊グマインデの自治

アレクサンダー・レームと革命

ここで提起した古典的理論の重要性が加味されなければならなかった。ヨーロッパ大陸の
行政にそう、地域の開発に思い、農村の貧民の世話、地域の間の問題の解決、市民革命
を誘発させるために、フランスの貴族に対する批判的見地、もとより領土
ぼんどうと全ての所で同時に準備された大革命が、なら、他の諸国に先じてフランスにおいて
顕著である。集約されよう。同時に親身な保護をもつ
アンタリアントとしての役割を果たすには、やぶさかだった。

デュシャン・ド・ロベシエ（Dujamond de Rocqueville）とその部下たち（comité）にことごとく委ねられた上で、パリに赴いて安逸な宮廷生活を送るほ
つもり、経済的権利の点では、たとえ、グーツヘルシャフトのプロイセン
に関して、このように、地方行政の用に当たる地主と被掠取農民との関係という美
で、治安維持を含む所領行政の遂行において、自
己の責任を果たすのにやぶさかだった。デュシャン
の言う「地主・農民関係のアンサンブル」が奏でられていたプロイセン
においてブルジョワ革命は勃発しなかった。18世紀末の遠因にほかならない。
「略国文学・地名辞典」(5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

'略国文学・地名辞典' (5.1) 高崎国 江戸時代 高崎国

プロイセンのドイツの近代化は、大塚史学を中心としてわが国の戦後歴史学やドイツの「連続性」論者が、必ずしも充分な実証を伴わず、必ずしも想定してきただような社会反動的類型にすぎず、それは、近代ヨーロッパ史におけるイギリスあるいはフランス型とは異なる個別である。本稿では、この点に集約される基本的問題意識を、言えるや従って、一試論的再構成を取る本書は、「東エルベ農村社会史読書」を題する結論の冒頭に配して、後篇、ドイツ都市農村連続体の歴史的個性、土地所有と近代社会の関係」という古典的なながら、いまなお、その重要性を示したか、失ってはならない社会経済史学のアプローチ・現象性と理念に、近代都市社会形成の実証的討究の基盤である、研究の大枠を設定した。
世襲財産・土地所有の実証的追究を、前著『ドイツ世襲財産と帝国内政』に引き続き継続しながら、都市社会史をも含む近代社会生成上のダイナミックな現代的局面上に着目した。都市と農村のあいだというペルリン圏のテルトウ郡は、都市近郊ガマインデー数多く持つ都市農村連続体を、ベンドラー労働者の階層的形成を伴う都市化の進展との関連に置きつつ、地方自治体による給付行政の実績を、のぞきばかし、見直して、プロイセンにおける地方自治、経済史研究史の一つの新領域を、独自の理論視点から切り拓くという、二段構えの前著から展開を経て、戦後の歴史学に近現代ドイツ社会の伝統的ドイツ史像を批判し、それにかわりうる新しい映像の問題提起を試みることによって、全篇にわたる生産様式の永続的基礎としての土地所有の契約への執着は、【大阪大学】の産業の【大阪市】における、零細地小作という独特の形態で、帝国主義転化のための構造的基礎を、本書の重視は、さしつかえ、しごく当然の前提条件の一つである。たとえば、都市ペルリン圏の都市化の深化を支える農村の基礎の一要因として、現代史の展開に直接する能動的役割を果たす契機でもあったのである。
あとがき

謙虚に尊重しつつ、同時に他方において、たとえ小さきかな一歩の前進にすぎぬにせよ、きさかなっても引
き上げることを、少なくとも主観的には、内心ひそかに意図した営みにほかならない。一例にあるが、本書最終章
で試みられた「ゲマインデ自治」への着眼に基づく実証作業は、W・シュバッツやW・ホーフマンそしてC・ヴォル
ケらの先行研究を乗り越えて進むために必要な通過点の一つだった、と言えよう。

しかし、それについても、本書に残された課題は、あまりにも多く大きい。ここでは、今後すぐさま行われるべき研
究の一指針として、それらの一部を単率に吐露することによって、著者としての責任をふさぎたいと思う。すでに註
記で繰り説明したとおり、『クライス・テルトゥの一八世紀以前史』その自体が、興味深い一箇所の研究テーマにひ
なること、そして、『ブロヴィンツの統治的構成』への着目には、評価されてよい斬新な意味がある。なお、それがいかに引きのぼすかに
する関係自治体の苦悩と迎合を定式化し、研究課題の一端に一瞥をくくれるだけでも、このように、それは些少にすぎぬとは必
ずしも言えないと思われる。今後の精進を期待したい。

さて、本書は、以下に示す一〇〇ほどの旧稿を基礎として、まがりなりに一冊としての統一性と整合性を強調し
うるよう、それらを相当大幅に組み替えて加筆・改訂をほどこすことによって成った。
あとがき

二、ドイツにおける近現代土地制度史研究の新展開　「ベルリン会議」
  とK・ヘスのフィデイコミス論　広島大学歴史学　第一三巻　第一号　一九九三年三月

三、旧東独における農業史研究の最新成果とその意義　批判的継承のために、
「土地制度史学」　第一三八号　一九九三年四月

四、佐藤勝則　「オーストリア農民解放史研究　郊外の農業史研究」　京都大学経済
  学　第一五二巻　第一号　一九九三年七・八月

五、ドイツ農業・土地制度史上の二つの問題について　「Gutsburschaft」と
  Domäenergächter　「ベルリン国際学会の討議」　第一五一七巻　第一号　一九九三年四月

六、ドイツ農業・土地制度史に関するベルリン国際学会の討議　第一五一九巻　第一号　一九九三年四月

考　新輯　第三巻　一九九四年　一月

八、ドイツ大土地所有史小論　ザクセンのヴェンツェル家　「経済論叢」
  京都大学経済　第一七巻　第一号　一九九六年　一月

九、馬場哲　ドイツ農村工業史　ブロット工業化・地域・世界市場　「東京大学出版会」
  第一九九三年　一月

十、東エリア農村史論文集　研究動向の一断面　経済史研究会編　「欧米資本主義の史的展開」
  第九章　思文

292
これららの論考と書評は、一九九二年以降に発表されたものであり、それは、ちょうど、わたたくしが広島大学を転任した一九九年以降の時期に当たっている。本書は、わたたくしにとって、広島大学でのおおよそ一年間にわたる研究生活の一所得である。過去を去った時日に比ずると、いまここにようやく目的を見た本書の成果があまりにも貧しいことに、わたたくしは、内心悔悾たる思いを禁じえない。しかし、それでもやはり、新さやかな第二作を世に問うことができたのは、多くの一方の御指導と御鞭撻のたまものである。まして最初に、わたたくしは、学問を含む人生全般の恩師、宮野啓先生に衷心より感謝する。同様に、西洋経済史の専門分野とは言え、積み重ねた年輪の高い学問的見識によって、わたたくしを、おのずと鼓舞されただけでなく、悠々たる大いの風致と寛容の心を併せ持たれる宮野先生は、御高配でお示し下さった。いまはただ、籍を正して学思を深く思い、一そその御教訓を祈るばかりである。

一九八二年、広島修道大学に職を得てから今日まで続く、この四年中、貴重な人間関係の豊かな展開のきっかけを作って下さったのが、渡辺尚先生である。思い起こせば、一九八四年、渡辺先生は、広島大学総合科学部での集中講義のために、日南田先生のお招きによって御来広島された。
このとき始まったことを想起しつつ、わたたくしは、人生の重要な節目において、常に暖かい援助の手を差し伸べて下さる渡辺先生に、心から感謝したい。先生の御薫陶なしに、今日のわたたくしはありえなかったであろう。

当地広島において、松尾展成先生との出会いに恵まれたこともあれば、わたたくしにとっては、僕僕と言えども、幸いであつた。先生が示される凄まじいほどの実証への沈黙と傾倒は、一つの規範としての意味を持ち続けて今日に至って、それぞれの思いをこめて、感謝の言葉を申し述べたい。とりわけ、黒澤氏が遂げた清信の気風に富む学問的成長は、わたたくしの大きな喜びであると同時に、心おもしろい刺激でもあった。

さらに、わたたくしは、「ドイツ資本主義研究会」に集う錦鏡たる諸先生の面前に感謝しないわけには行かない。ここでは、諸田寛先生と柳澤雄治先生のお名前のみを挙げるにとどめておきたい。諸田先生からは、３月「フリードリヒ・リストと彼の時代—国民経済学の成立」（有斐閣、二〇〇三年）をつたわり、経済史家かくあるべしとの理想像とヒ・リストと彼の時代—国民経済学の成立（有斐閣、二〇〇三年）を指示していただいた。そして、柳澤先生の御学風に接することにより、わたたくしは、かぎりない敬意と共感の念を表する次第である。

一九七九年の留学時よりのこのたび、現在に至るまで途絶えることなく続く、ドイツ人研究者の変わるぬ御支援と御協力には、忘れられないものがある。ベルリン・フンボルト大学のローター・ペール・クレム（Volker Klemm）教授の両先生を初め、農業史の大家ミュラー（Hans-Heinrich Müllar）博士やからたまわったそれぞれに貴重な御助言と御配慮がもしあなければ、本書の実証研究を行うことは決してできなかったであろう。これらの両先生に心より感謝する。
あとがき

本書の刊行に当たりまして、前著同様、勤載書房の宮本祥三氏に、全面的にお世話いただきましたことを付記して、御礼の言葉にかえて思います。

私事において恐縮であるが、おわりに、なおひとこと書き足せることがお許しいただきたい。幼いときより弟のことを頼もしい存在の長兄、亮太郎（現、神戸学院大学法学部大学院教授）は、本書の上梓に際して、私に深く感謝する。そして、かつて苦闘の渦中にあたったあの若かりし頃、わたしへの伴侶として人生を歩むことを決意してくれた妻、真理子に、衷心からの感謝とともに、本書を捧げる。

二〇〇四年十月二日

加藤
房雄
参考文献

I 文献資料


BLHA Potsdam, Pr. Br. Rep. 37, Herrschaft Königs Wusterhausen, Nr. 947,
Quartals- und Finalberechnungen der Bezirksamtskasse zu Königs Wusterhausen, Bd. 6, 1890–1902.


BLHA Potsdam, Pr. Br. Rep. 2A, Regierung Potsdam, Abteilung I Präsidialabteilung, Kommunalangelegenheiten, Nr. 2514, Kanalisation

II 欧語文献・資料

*Bericht über die Verwaltung und den Stand der Kreiskommunal-Angelegenheiten des Kreises Teltow für das Rechnungsjahr 1909*, Berlin
参考文献

1910.
Blotevogel, Hans Heinrich (Hrsg.), Kommunale Leistungsverwaltung und Stadtentwicklung vom Vormärz bis zur Weimarer Republik, Köln / Wien 1990.
Broszat, Martin, Zweihundert Jahre deutsche Polenpolitik, Neuausgabe, Frankfurt am Main 1972.

311


Engeli, Christian und Wolfgang Haus (Bearb.), *Quellen zum modernen Gemeindeverfassungsrecht in Deutschland*, Stuttgart 1975.


Grabe, Charlotte, *Der Einfluß der Pendelwanderung auf die Arbeitnehmer*
unter besonderer Berücksichtigung der ländlichen Industriearbeiter, Karlsruhe 1926.


Ders., Die Agrarreformen in Deutschland als Thema der Forschung, in: Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte, 1991 Teil II.


Heinrich, Gerd, Friedrich - Wilhelm Henning und Kurt G. A. Jeserich
参考文献


Heitz, Gerhard, Varianten des preußischen Weges, in: Jahrbuch für Wirtschaftsgeschichte, 1969 Teil III.


Horsten, Franz, Die Familien = Fideikommiss = Politik in Preußen in besonderer Berücksichtigung der parteipolitischen Stellungnahme, Gießen 1924.


Inama-Sternegg, Karl Theodor von, Deutsche Wirtschaftsgeschichte bis zum Schluß der Karolingerperiode, Leipzig 1879.

Jaeckel, Reinhold, Zur Geschichte der Bevölkerung des Kreises Teltow, in:


Knipschild, Philipp, *Tractatus de fideicommissis familiarum nobilium, sive, de bonis, quae pro familiarum nobilium conservatione constituuntur, von Stammgütern*, Ulmae (Ulm) 1654.


List, Friedrich, *Die Ackerverfassung, die Zuwiegwirtschaft und die Auswanderung*, 1842.


Preuß, Hugo, Die Entwicklung des deutschen Städtewesens, Bd. 1, Leipzig 1906.

Preußische Statistik, Heft 177, Berlin 1903.

参考文献

Godesberg 1975.
Rosenberg, Hans, Probleme der deutschen Sozialgeschichte, Frankfurt am Main 1969.
Schöller, Peter, Die deutschen Städte, Wiesbaden 1967.
Stahl, Henri H., Traditional Romanian village communities. The transition from the communal to the capitalist mode of production in the Danube


Ders., Der Nationalstaat und die Volkswirtschaftspolitik (1895), in: ders.,
Wegener, Leo, Der wirtschaftliche Kampf der Deutschen mit den Polen um die Provinz Posen, Posen 1903.
Wunder, Heide, Die bäuerliche Gemeinde in Deutschland, Göttingen 1986.
参考文献

III 翻訳

アーベル、ヴィルヘルム、三橋時雄・中村勝訳『ドイツ農業発達の三段階』未来社、1976年。
アムプロジェクト、ゲーロルト、ウィリアム・H・ハーバード、豊前栄一・金子邦子・馬場哲訳『20世紀ヨーロッパ社会経済史』名古屋大学出版会、1991年。
イッガース、ゲオルク・G、中村幹雄・末川清・鈴木利章・谷口健治訳『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房、1986年。
ウェーバー、マックス、田中真晴訳『国民国家と経済政策』未来社、1959年。
ウェーバー、マックス、山口和男訳『農業労働制度』未来社、1959年。
ウェーバー、マックス、世良晃志郎訳『都市の類型学』創文社、1964年。
ウェーラー、ハンス-ウルリヒ、大野英二・肥前栄一訳『ドイツ帝国 1871-1918年』未来社、1983年。
エストライヒ、グルハルト、ハンス・マイアーほか、成瀬治編訳『伝統社会と近代国家』岩波書店、1982年。
エンゲルス、フリードリヒ。『歴史における暴力の役割』』『マルクス＝エンゲルス全集』第21巻、大月書店、1971年。
グラス、ギュンター、高本研一訳『ドイツ統一問題について』中央公論社、1990年。
クーリッシェル、ヨーゼフ、松田健雄監修、諸田実・松尾良成・柳澤治・渡辺尚・小笠原茂訳『ヨーロッパ近世経済史』I、東洋経済新報社、1982年。
クレム、フォルカー、大戸輝雄・村田武訳『ドイツ農業史—プルジョア的農業改革から社会主義農業まで』大月書店、1980年。
クロセール、アルフレート、山本良・三島憲一・相良憲一・鈴木直訳『ドイツ 総決算—1945年以降のドイツ現代史』社会思想社、1981年。
ゴスヴァイヤー、クルト、熊谷一雄編訳『現代ファシズムと金融資本』未来社、1977年。
ゴルツ、T. F. フォン・デル、山岡亮一訳『ゴルツ 独逸農業史—十九世紀』有斐閣、1938年。
トクヴィル、A. d.、井伊玄太郎訳『アンシャン・レジームと革命』りせい書房、1974年。
ブラッドボーン、デーヴィッド、ジェフ・イリー、リチャード・J.・エヴァンズ、望田幸男・川越修・工藤章男・小林聡人訳『イギリス社会史派のドイツ史論』晃洋書房、1992年。
ブリクレ、ペーター、服部良久訳『ドイツの臣民—平民・共同体・国家 1300〜1800年』ミネルヴァ書房、1990年。
参考文献

マルクス、カール、向坂逸郎訳『資本論』第3巻、岩波書店、1967年。
ライフ、ハインツ、加藤房雄訳『東エルベ農村社会史論（1・2）』『広島大学経済論叢』第21巻、第1号、1997年、第3号、1998年、所収。
リスト、フリードリヒ、小林昇訳『農地制度論』岩波書店、1974年。
レーニン、ヴェ・イ、国民文庫『社会民主党の農業綱領』大月書店、1956年。
レーニン、ヴェ・イ、『レーニン全集』第34巻、大月書店、1959年。
レーニン、ヴェ・イ、『レーニン全集』第34巻、大月書店、1959年。
レーニン、ヴェルナー、藤田栄一郎訳『農民のヨーロッパ』平凡社、1995年。
ローゼンベルク、ハンス、大野英二・川本和良・大月誠訳『ドイツ社会史の諸問題』未来社、1978年。

IV 邦語文献・資料

赤木須留喜『行政責任の研究』岩波書店、1978年。
大塚久雄『事実の信仰』大塚久雄著作集』第10巻、岩波書店、1970年。
尾崎芳治『ブルジョア的土地変革の理論』経済学と歴史変革——労働指揮権としての資本・生活意識・土地所有』青木書店、1990年。
加藤房雄『ドイツ世襲財産と帝国主義——プロイセン農業・土地問題の史的考察』勁草書房、1990年。
加藤房雄『松尾展成『ザクセン農民解放史研究序論』（御茶の水書房、1990年）に対する書評』『土地制度史学』第134号、1992年。
加藤房雄『旧東独における農業史研究の最新成果とその意義——批判的継承のために』『土地制度史学』第138号、1993年。
加藤房雄『ドイツ農業・土地制度史上の二つの問題について——GutsherrshaftとDomänenpächter』『広島大学経済論叢』第17巻、第1号、1993年。
加藤房雄『佐藤勝則『オーストリア農民解放史研究——東中欧地域社会史研究序説』（多賀出版、1992年）に対する書評』『歴史』第80巻、1993年。
加藤房雄『東エルベにおける大土地所有の歴史的展開について——中・東欧農業=土地制度史把握の一視角』『西洋史研究』新総第23号、1994年。
加藤房雄『吉野惟雄『ポーランドの農業と農民——グシトエフ村の研究』（木鐸社、1993年）に対する書評』『社会経済史学』第60巻、第4号、1994年。
加藤房雄『馬場哲『ドイツ農村工業史——プロト工業化・地域・世界市場』（東京大学出版会、1993年）に対する書評』『経済研究』第47巻、第1号、1996年。
加藤房雄『渡辺尚編著『ヨーロッパの発見』に対する書評』『歴史と経済』第178号、2003年。
川越修『ベルリン王都の近代——初期工業化・1848年革命』ミネルヴァ書房、

299
参考文献

1988年。
北住昭「ドイツ第二帝制・プロイセンにおける地方統治体制——クライス制からラントゲマインデ制へ」『法学研究』（愛知学院大学）第21巻、第1・2号、1977年。
北住昭「近代ドイツ官僚国家と自治——社会国家への道」成文堂、1990年。
阪口修平「プロイセン絶対王政の研究」中央大学出版部、1988年。
住谷一彦「マックス・ヴェーバーの『世襲財産』論——『ドイツ資本主義と土地制度』の思想史的研究」[1962年]『リストとヴェーバー——ドイツ資本主義分析の思想体系研究』未来社、1969年、復刊、1992年。
住谷一彦「ゾムバルトとヴェーバー——『ブルジョア』をどう読むか」『国際関係学研究』（東京国際大学大学院）第6号、1993年。
関野満夫『ドイツ都市経営の財政史』中央大学出版部、1997年。
高橋秀行「ベルリン経済圏における地域工業化の始動（18世紀末～19世紀中葉）——首都圏工業化のケース」篠原信義・石坂昭雄・高橋秀行（編著）『地域工業化の比較史的研究』北海道大学図書刊行会、2003年。
武田進子『ドイツ社会問題関係史論——第二帝政期からヴァイマル期まで』勁草書房、1995年。
遠藤信幸（発行）『近現代における中・東欧（諸国・地域）発展の歴史的位相と射程——農業・土地所有問題の側面から』『西洋史研究』新輯第23号、1994年。
馬場哲哉『ドイツにおける近代都市史・都市化史について』『経済学論集』第62巻、第3号、1996年。
馬場哲哉『都市化と交通』『岩波講座 世界歴史 22 産業と革命——資本主義の発展と変容』岩波書店、1998年。
原田勝「ドイツ社会民主党と農業問題」九州大学出版会、1987年。
原田勝「統合下の東ドイツ農業の構造調整」九州大学ドイツ経済研究会編『統合ドイツの経済的諸問題』九州大学出版会、1993年。
肥前栄一郎「ドイツとロシア——比較社会経済史の一領域」未来社、1986年。
肥前栄一郎「北西ドイツ農村定住史の特質——農民屋敷地に焦点をあてて」『経済学論集』第57巻、第4号、1992年。
藤瀬浩司『近代ドイツ農業の形成——いわゆる「プローシュ型」進化の歴史的検証』御茶の水書房、1967年。
藤田幸一郎「近代ドイツ農村社会経済史」未来社、1984年。
藤田幸一郎「都市と市民社会——近代ドイツ都市史」青木書店、1988年。
藤本建夫「ドイツ帝国財政の社会史」時潮社、1984年。
『毎日新聞』（大阪）、1991年12月6日号、1991年12月30日号。
参考文献

三好正喜『ドイツ農書の研究——十六世紀ドイツの農業生産力と農業経営類型』風間書房、1975年。
柳澤治『諸田寛『ドイツ関税同盟の成立』（有斐閣、1974年）に対する書評』『土地制度史学』第70号、1976年。
柳澤治『加藤房雄『ドイツ世襲財産と帝国主義』に対する書評』『土地制度史学』第133号、1991年。
柳澤治『渡辺尚編著『ヨーロッパの発見』に対する書評』『経営史学』第36巻、第2号、2001年。
山口和男『マックス・ウェーバーのユンカー論（2）——世襲財産制問題とウェーバー』（1959年）『ドイツ社会思想史研究——プロイセン・ドイツ国家における社会思想の諸形態』ミネルヴァ書房、1974年。
山田晟『近代土地所有権の成立過程』有信堂、1958年。
山田盛太郎（編）『変革期における地代範疇』岩波書店、1956年。
渡辺尚（編著）『ヨーロッパの発見——地域史のなかの国境と市場』有斐閣、2000年。
人名索引

A
Abel, Wilhelm 32
Achenbach, Adolf von 258,260,278
Achilles, Walter 59,64,70,72,73,76,159,168
Adamy, Kurt 211,232,238,239,241,242,243,271,276,277
Aerboe, Friedrich 147,148,149
赤木須留喜 241
Alvensleben, von 119
Alvensleben-Schonborn, von 92
Ambrosius, G. 141
Arenberg, von 171
Arnim, 15,77,93,174,175,180,185
Arnim, Bernt von 15
Askanier 230,231
Augustine, Dolores L. 33

B
Baar, Lothar 294
Baath 153
馬場哲 97,99,141,234,236
Babenzie, Paul 263,264
Bailwan, Ilona 142,164
Beck, Friedrich 191
Berda, Robert M. 27,32,124
Bernsdorf 118
Berthold, Rudolf 72,142
Betsius, Nikolaus 53,54
Bismarck, Otto von 187
Blackburn, David 33,123
Bleiber, Helmut 75,142
Blickle, Peter 3,17,25,28,29,30,140
Boltevogel, Hans Heinrich 276,279
Bodelschwingh, Friedrich von 156

Bodin, Jean 283
Boelcke, Willi Alfred 69,70,174
Bohm, Eberhard 230,231
Böhmer, Justus Henning 54
Boltze, Johann Gottfried 103,107,108,109,128
Borcke-Stargordt, Henning Graf von 135
Bosch 118
Braun, Heinz 191
Brenner, Robert 22
Brentano, Lujo 43,61
Brockdorff, von 174
Broesike, Max 240,250,251,252,272,273
Broszat, Martin 57
Brühl 147
Büchner 118
Buchsteiner, Ilona 58,59,62,69,70,75,164
Bürger 227
Büscher, Otto 56,235

C
Carsten, Francis L. 79,191
Chirot, Daniel 26,28
Chirot, Holley Coulter 26
進崎常明 285,287
Conrad, Johannes 43,101,144,159,168,191,193
Conze, Werner 124
Coulon, Leopold 178,180,192
Croon, Helmut 198
<table>
<thead>
<tr>
<th>姓氏</th>
<th>名前</th>
<th>ページ</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>D</td>
<td>Diestelkamp, Bernhard</td>
<td>287</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Dietrich, Richard</td>
<td>233,234,273,275,277</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Dilcher, Gerhard</td>
<td>287</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Dillwitz, Sigrid</td>
<td>142</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Dipper, Christof</td>
<td>85,86</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Dohna</td>
<td>118</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Dohrmann</td>
<td>227</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Drasdo</td>
<td>227</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Dumont, Jean</td>
<td>286</td>
</tr>
<tr>
<td>E</td>
<td>Eckert, Jorn</td>
<td>53,54</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Eddie, Scott</td>
<td>59,63,75</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Eley, Geoff</td>
<td>173,190</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Elsner</td>
<td>157</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Enders, Lieselott</td>
<td>191,203,271,237,242,243,276</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Engeli, Christian</td>
<td>231,274,275,276,278</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Engels, Friedrich</td>
<td>280,281</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Erbe, Michael</td>
<td>197</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Escher, Felix</td>
<td>31,201,234,270,271,272,279,294</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Evans, Richard J.</td>
<td>33,77,163,273</td>
</tr>
<tr>
<td>F</td>
<td>Farr, Ian</td>
<td>77,142,143,145,160,163,164,168</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Ferdinand, August</td>
<td>104</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Fischer, Alexander</td>
<td>75,143,144,163,164</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Flemming, Jens</td>
<td>61,68</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Fraenkel, Ernst</td>
<td>283,286</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Friedrich Wilhelm IV</td>
<td>262</td>
</tr>
<tr>
<td>G</td>
<td>Gansauge</td>
<td>157</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Gericke</td>
<td>227</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Ghaussey, A. Ghansie</td>
<td>25</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Gierke, Otto von</td>
<td>23,53,54,285</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Gneisenau, Hugo Neidhardt von</td>
<td>149</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Gneist, Rudolf von</td>
<td>281</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Goerdeler, Carl</td>
<td>119</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Görschnig</td>
<td>227</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Goltz, Theodor Freiherr von der</td>
<td>153,166</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Gossweiler, Kurt</td>
<td>130</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Graß, Günter</td>
<td>138,141</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Grabe, Charlotte</td>
<td>239,240,243,244</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Groß, Reiner</td>
<td>82,86,142,163</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Groeben, Klaus von der</td>
<td>30,234</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Grosser, Alfred</td>
<td>171,189</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Grosskopf, Werner</td>
<td>168</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Gunst, Péter</td>
<td>10,11,12,13,14,20,28,30</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Gutmann, Eugen</td>
<td>244</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Guttenberg, Freiherr Karl Theodor von und zu</td>
<td>171</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Guttenberg, Rosa Sophie</td>
<td>171</td>
</tr>
<tr>
<td>H</td>
<td>Haberland, Georg</td>
<td>231</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Habermann</td>
<td>256</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Haeckel, Julius</td>
<td>237,242</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Hagen, William W.</td>
<td>123,124,125,126,284,286</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Hardenberg, Graf</td>
<td>118</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Hanssen, Georg</td>
<td>168</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>原田修</td>
<td>88,194</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Handjery, Prinz</td>
<td>232</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Harnisch, Hartmut</td>
<td>10,14,15,16,17,18,19,20,25,28,29,30,3258,61,70,72,73,74,77,85,86,94,131,135,141,142,145,146,159,164,168,170,173,174,175,176,178,179,180,181,189,190,191,192,218,242,271,274</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>服部良久</td>
<td>29</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Haus, Wolfgang</td>
<td>231,274,275,276,278</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Heß, Klaus</td>
<td>9,10,26,27,38,39,40,43,45,46,47,49,50,51,53,54,55,56,57,59,63,69,75,129,159,168,277</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Hefft, Heinrich</td>
<td>241,271,278,280,281</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Heinrich, Gerd</td>
<td>30,234</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>Heitz, Gerhard</td>
<td>25,29,86,135,141,142,145,146,164,170</td>
</tr>
</tbody>
</table>

321
人名索引

Jaxa 230
Jersch-Wenzel, Stefi 79
Jeserich, Kurt G. A. 31,234
Johnston, David 52
Jordan-Rozwadowski, Jan von 174
Justinianus 40,52

K
Kaak, Heinrich 4,5,6,7,8,9,14,15,19,
22,26,27,28,30,31,32,77,131,134,137,139,
140,170,173,174,175,176,189,190,191
Kamen, Henry 52
金子邦子 141
Karbe, August 167
加藤芳雄 27,54,55,56,57,59,63,70,74,76,
78,79,88,126,165,166,168,189,191,192,
193,237,242,244
Kauffhold, Karl Heinrich 59
川越修 123,235
川本和良 129,190
Kersten 119
Kiersten 227
Kiesewetter, Hubert 86
Kindler, Karl 263,267
北条雄一 239,281,282
Kleist 187
Klemm, Volker 59,64,70,76,127,144,
145,163,164,167,186,243,294
Knapp, Georg Friedrich 20,21,134
Knipschild, Philipp 40,53,54
小林聡人 123
Kocka, Jürgen 75,142,143,163,170,173
Koischwitz, Gerd 203,238,271,272
Koppe, Johann Gottlieb 155,156,157
Koppe, Moritz 187
Korth, Siegfried 177,180
Krabbe, Wolfgang R. 231,232,234,276,
278
Kramer, Karl S. 17,29
Krappe 227
Krefeldt, Philipp 262
工藤章男 123
<table>
<thead>
<tr>
<th>姓氏</th>
<th>ページ番号</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Kühne</td>
<td>157</td>
</tr>
<tr>
<td>Kula, Witold</td>
<td>83</td>
</tr>
<tr>
<td>Kulischer, Josef</td>
<td>30</td>
</tr>
<tr>
<td>熊谷一男</td>
<td>130</td>
</tr>
<tr>
<td>Kurnatowski, Ernst von</td>
<td>49</td>
</tr>
<tr>
<td>黒澤隆文</td>
<td>231,294</td>
</tr>
<tr>
<td>Kurth, Peter</td>
<td>27</td>
</tr>
<tr>
<td>Kwilecki</td>
<td>47,49</td>
</tr>
<tr>
<td>Langewiesche, Dieter</td>
<td>239,240,243,244,272</td>
</tr>
<tr>
<td>Laubner, Jürgen</td>
<td>60,67</td>
</tr>
<tr>
<td>Lee, William Robert</td>
<td>77,163,273</td>
</tr>
<tr>
<td>Lenin, W. I.</td>
<td>91,92,94,95,99,100,101,130,144,145,180</td>
</tr>
<tr>
<td>Leppien</td>
<td>227</td>
</tr>
<tr>
<td>Leps, Marko</td>
<td>204,211,215,232,238,239,241,242,243,271,276,277</td>
</tr>
<tr>
<td>Lietzau, Bruno</td>
<td>192</td>
</tr>
<tr>
<td>List, Friedrich</td>
<td>96,169,189</td>
</tr>
<tr>
<td>Litzmann</td>
<td>119</td>
</tr>
<tr>
<td>Löwenstein, Karl</td>
<td>283</td>
</tr>
<tr>
<td>Lubon</td>
<td>227</td>
</tr>
<tr>
<td>Lütge, Friedrich</td>
<td>82,86,135</td>
</tr>
<tr>
<td>Lüttgert</td>
<td>226</td>
</tr>
<tr>
<td>Machiavelli, Niccolò</td>
<td>283</td>
</tr>
<tr>
<td>MacKay, Angus</td>
<td>52</td>
</tr>
<tr>
<td>Maier, Hans</td>
<td>118,283,284,286</td>
</tr>
<tr>
<td>Maria</td>
<td>52</td>
</tr>
<tr>
<td>Martindale, John R.</td>
<td>53</td>
</tr>
<tr>
<td>Marx, Karl</td>
<td>90,91,94,95,99,135,142,143,144,145,160,161,173,281</td>
</tr>
<tr>
<td>松尾智雄</td>
<td>30,80,243</td>
</tr>
<tr>
<td>松尾隆成</td>
<td>30,80,81,82,83,85,86,89,294</td>
</tr>
<tr>
<td>Matzenth, Horst</td>
<td>269,270,273,277</td>
</tr>
<tr>
<td>Mendels, F. F.</td>
<td>98</td>
</tr>
<tr>
<td>Merl, Stephan</td>
<td>59,64,76</td>
</tr>
<tr>
<td>Meyer</td>
<td>118</td>
</tr>
<tr>
<td>三橋時雄</td>
<td>32</td>
</tr>
<tr>
<td>宮野啓二</td>
<td>52,293</td>
</tr>
<tr>
<td>三好正喜</td>
<td>88</td>
</tr>
<tr>
<td>望田幸男</td>
<td>123,190</td>
</tr>
<tr>
<td>Moeller, Robert G.</td>
<td>142,143,145,163</td>
</tr>
<tr>
<td>Moll, Georg</td>
<td>82,85,86,95,142,145,146,164,165</td>
</tr>
<tr>
<td>Mommsen, Wolfgang J.</td>
<td>44,159,168</td>
</tr>
<tr>
<td>Moore Jr., Barrington</td>
<td>22</td>
</tr>
<tr>
<td>Mooser, Josef</td>
<td>69,152,166</td>
</tr>
<tr>
<td>Morgenbrod, Birgit</td>
<td>27</td>
</tr>
<tr>
<td>Moser, Johann Jacob</td>
<td>21,22,54</td>
</tr>
<tr>
<td>Mosler</td>
<td>150</td>
</tr>
<tr>
<td>諸田實</td>
<td>30,84,294</td>
</tr>
<tr>
<td>Mosse, Rudolf</td>
<td>244</td>
</tr>
<tr>
<td>Münch, Ernst</td>
<td>164</td>
</tr>
<tr>
<td>村田武</td>
<td>164</td>
</tr>
<tr>
<td>中村勝</td>
<td>32</td>
</tr>
<tr>
<td>中村幹雄</td>
<td>168</td>
</tr>
<tr>
<td>成瀬治</td>
<td>286</td>
</tr>
<tr>
<td>Nathusius, Heinrich von</td>
<td>149,150</td>
</tr>
<tr>
<td>Nathusius, Johannes</td>
<td>149</td>
</tr>
<tr>
<td>Neuhaus</td>
<td>227</td>
</tr>
<tr>
<td>Neuhaus, Gustav</td>
<td>244</td>
</tr>
<tr>
<td>Nichtweiß, Johannes</td>
<td>170</td>
</tr>
<tr>
<td>Nippel, Wilfried</td>
<td>31</td>
</tr>
<tr>
<td>Noack, Kurt</td>
<td>237,240,243,244</td>
</tr>
<tr>
<td>Nussbaum, Helga</td>
<td>78,79,142</td>
</tr>
<tr>
<td>Oestreicher, Gerhard</td>
<td>282,286</td>
</tr>
<tr>
<td>小笠原茂</td>
<td>30</td>
</tr>
<tr>
<td>大野英二</td>
<td>129,131,190</td>
</tr>
<tr>
<td>大塚久雄</td>
<td>80,83,91,92,94,95,98,99,101</td>
</tr>
<tr>
<td>大月誠</td>
<td>129,190</td>
</tr>
<tr>
<td>人名索引</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>----------------------------------</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>大藤 慶雄 164</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Otto II 231</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Otto, Carl Eduard 52</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>尾崎 芳治 56, 77, 92</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>P</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Peters, Jan 3, 25, 26</td>
</tr>
<tr>
<td>Peyer 157</td>
</tr>
<tr>
<td>Pfaff, Leopold 40, 53, 54</td>
</tr>
<tr>
<td>Pieper, Ilka 189</td>
</tr>
<tr>
<td>Pierenkemper, Toni 85</td>
</tr>
<tr>
<td>Pilsach, Senff von 187, 188</td>
</tr>
<tr>
<td>Plaul, Hainer 79, 142, 145, 273</td>
</tr>
<tr>
<td>Plön 175</td>
</tr>
<tr>
<td>Pognon, Edmond 286</td>
</tr>
<tr>
<td>Pohl, Hans 231</td>
</tr>
<tr>
<td>Potocki, von 47, 49</td>
</tr>
<tr>
<td>Prange, Wolfgang 174</td>
</tr>
<tr>
<td>Preuß, Hugo 270, 271</td>
</tr>
<tr>
<td>Pufendorf, Samuel von 283</td>
</tr>
<tr>
<td>Puhle, Hans-Jürgen 32, 57, 60, 70, 71, 140, 152</td>
</tr>
<tr>
<td>Puttkammer 118</td>
</tr>
<tr>
<td>Pyta, Wolfram 61, 67</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>R</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Rach, Hans-Joachim 142, 145</td>
</tr>
<tr>
<td>Rantzau, von 174</td>
</tr>
<tr>
<td>Reibnitz, Kurt Freiherr von 193</td>
</tr>
<tr>
<td>Reif, Heinz 3, 20, 25, 26, 27, 58, 61, 68, 71, 74, 76, 78, 79, 126, 294</td>
</tr>
<tr>
<td>Reusch 118</td>
</tr>
<tr>
<td>Ribbe, Wolfgang 197</td>
</tr>
<tr>
<td>Richter, Gustav 239</td>
</tr>
<tr>
<td>Ritter, Gerhard 129, 130</td>
</tr>
<tr>
<td>Rook, Hans-Joachim 60, 67, 77</td>
</tr>
<tr>
<td>Roscher, Wilhelm 61</td>
</tr>
<tr>
<td>Rosenberg, Hans 129, 131, 170, 172, 189, 190, 282</td>
</tr>
<tr>
<td>Rössner, Werner 10, 14, 25, 27, 28, 29</td>
</tr>
<tr>
<td>Rothschild 150</td>
</tr>
<tr>
<td>Rühl, Christof 168</td>
</tr>
<tr>
<td>Rümer, Kurt von 165</td>
</tr>
<tr>
<td>Schäfer, Wolf 25</td>
</tr>
<tr>
<td>Schacht, Hjalmar 118, 130</td>
</tr>
<tr>
<td>Schilling, Bruno 52</td>
</tr>
<tr>
<td>Schilling, Renate 164</td>
</tr>
<tr>
<td>Schissler, Hanna 140, 152, 166</td>
</tr>
<tr>
<td>Schluchter, Wolfgang 27</td>
</tr>
<tr>
<td>Schmelzer, Adolf 153, 154, 155</td>
</tr>
<tr>
<td>Schmidt 227</td>
</tr>
<tr>
<td>Schmidt, Siegfried 164</td>
</tr>
<tr>
<td>Schmitt, Günther 25</td>
</tr>
<tr>
<td>Schmoller, Gustav 61</td>
</tr>
<tr>
<td>Schöllner, Peter 269, 279</td>
</tr>
<tr>
<td>Schröder, Alfred 152, 153, 155, 156</td>
</tr>
<tr>
<td>Schröder, Ida 153</td>
</tr>
<tr>
<td>Schremmer, Eckart 60</td>
</tr>
<tr>
<td>Schurig, Artur 93</td>
</tr>
<tr>
<td>Schumpeter, Joseph Alois 96</td>
</tr>
<tr>
<td>関野 滋夫 236</td>
</tr>
<tr>
<td>Selchow, von 188</td>
</tr>
<tr>
<td>世良 晃志郎 31, 243, 286</td>
</tr>
<tr>
<td>Sering, Max 133</td>
</tr>
<tr>
<td>塚塚 信義 235</td>
</tr>
<tr>
<td>Siemens, von 118</td>
</tr>
<tr>
<td>Sohray, Heinrich 239</td>
</tr>
<tr>
<td>Šolta, Jan 142, 145, 180</td>
</tr>
<tr>
<td>Spatz, Willy 200, 231, 234, 237, 238, 244, 271, 274, 276, 278, 280</td>
</tr>
<tr>
<td>Sputendorf 244</td>
</tr>
<tr>
<td>Stahl, Henri H. 26</td>
</tr>
<tr>
<td>Stegmann, Dirk 73</td>
</tr>
<tr>
<td>Steidl 114, 120</td>
</tr>
<tr>
<td>Stein, Lorenz von 280, 281</td>
</tr>
<tr>
<td>Steinbeck 212, 213, 214</td>
</tr>
<tr>
<td>Stepinski, Wlodzimierz 60, 65, 73, 76, 77</td>
</tr>
</tbody>
</table>
人名索引

Stolze, Reinhard 122, 123
Stráth, Bo 73
Stubenrauch, Ernst von 256, 258, 266, 278
Stumm, Karl von 187
末川清 168
住谷一彦 78, 169, 189
鈴木直 189
鈴木利章 168
Sułkowski 50

T
高橋秀行 235
高本研一 141
武田公子 236, 237
田中真晴 79
Tangermann, Fritz 192
谷口健治 168
Teuteberg, Hans-Jürgen 58, 69, 71, 72, 74, 79, 80, 232
Thaer, Albrecht 156
Thienel, Ingrid 234
Thompson, E. P. 123
Tocqueville, Alexis de 285, 286
富岡庄一 294
Treue, Wolfgang 92, 109, 128, 155, 167

U
Unruh, Georg-Christoph von 198, 231, 237, 241, 271, 274, 277, 278, 279, 281

V
Vögler 118
Veltheim, H.-H. von 150

W
Wallerstein, Immanuel 10, 11
渡辺尚 30, 76, 77, 293, 294
Weber, Max 9, 10, 27, 31, 43, 44, 46, 47, 55, 56, 63, 68, 70, 74, 75, 76, 78, 79, 93, 100, 101, 130, 133, 134, 137, 139, 140, 144, 148, 149, 153, 155, 158, 159, 160, 161, 162, 166, 168, 169, 172, 176, 177, 181, 186, 189, 191, 192, 193, 217, 218, 229, 242, 243, 244, 286
Wegener, Leo 56
Weissel, Bernhard 142, 145
Wentzel, Andreas Friedrich Philipp 106
Wentzel, Carl Emil 106, 107
Wentzel, Carl Friedrich 120, 121
Wentzel, Georg Philipp 104, 106
Wentzel, Heinrich Moritz Carl 106, 107
Wentzel, Philipp Kurt Carl Emil 106, 128, 130, 166
Wettiner 230, 231
Wetzel, Jürgen 231
Wiatrowski, Leszek 60, 64, 70, 75
Wiebel, Elfriede 202, 204, 205, 237, 238, 250, 272
Wiehbach 262
Wilamowitz-Moellendorf, Hugo Theodor 48, 49, 56
Wichardt von 48, 49, 56
Wilhelm I 187
Wilhelm II 188
Wilke, Claudia 200, 231, 232, 233, 274, 275, 276, 278
Wilkens, Ulrich 29
Wippermann, Wolfgang 79
Woermann 118
Wrede, Karl 244
Wunder, Heide 10, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 29, 31, 32, 33, 85, 92, 124, 130, 140, 176, 190, 192, 285
Wuthenau, von 127

Y
山田毘 41, 53, 54
山田盛太郎 141
山口和男 28, 169, 189
山本専 189
山岡晃一 166
<table>
<thead>
<tr>
<th>人名索引</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>柳澤治  30,76,77,84,165,294</td>
</tr>
<tr>
<td>吉野悦雄  166</td>
</tr>
<tr>
<td>吉原達也  53</td>
</tr>
<tr>
<td>Zimmermann, Ella von  103,108,120,130</td>
</tr>
<tr>
<td>Zimmermann, Leopold August Julius  108</td>
</tr>
<tr>
<td>Zimmermann, Leopold August Julius von  108,109</td>
</tr>
<tr>
<td>Zimmermann, Leopold Julius August von  108</td>
</tr>
<tr>
<td>Zitzewitz  118</td>
</tr>
<tr>
<td>Zernack, Klaus  56</td>
</tr>
<tr>
<td>Zeysing  193</td>
</tr>
</tbody>
</table>